

45-255

# 世界三大宗教

衆議院副議長島田三郎君序文  
文學士三宅雄次郎君序文  
戶川 殘 花 著



東京 博文館 藏版



## 世界三大宗教序

宗教の性格を具備して、世界多数の信仰を支配する者三あり、佛教基督教回々教是なり、故に若し三大宗教といへば、世人自然に佛基回を指すに理會するもの、如し、戸川殘花氏、佛基儒三教の要概を擧げて、一卷の中に收め、題して三大宗教といふ、氏回を措て儒を擧ぐ、普通の撰に異なり、何によりて然る乎、予試みに氏の心を忖度して之を言はん、

宗教は最高至大の問題にして、其包羅する所際涯なし、愚夫愚婦の與かるを得る所にして、其至れるに及んでは、哲人尙ほ仰鑽の嘆を發せざる能はず、蓋し戸川氏鈎玄發幽の精神を以て、三教を説く者に非ず、唯今世の人をして、其教旨の如何の物たるを理會せしめんと欲するに在り、夫の回教は我



日本に絶へて無くして、儒教の人心に涵濡するは、唯道德的勢力のみならず、其感化正に佛教と韻頌す、我國人の爲めに筆を操れば、則ち氏の撰當れり、  
 寛厚包容は天地の萬物に於ける氣象なり、宗教家天意を體すこ稱して、往々此氣象を缺く、而して政治の迫害、社會の紛擾、亦此缺陷より生ず、蓋し自ら信ずると餘ありて、他を知らざるの過ちに出づるなり、故に諸教の大體を通觀して、其如何の者たるを知るは、唯博通の智に於て助あるのみならず、包容の徳に於て得る所なしとせんや、此小冊子能く此目的に適するあらば、著者の微意空からず、何ぞ必ず幽玄精微を事とせんや、

明治二十八年六月

鳴田三郎識

『世界三大宗教』の空白に投す

曰く美なる哉金楯、曰く何爲ぞ銀楯を金楯と呼ぶや、相問ひ相答へて互に槍をつきつけしは、楯の表金裏銀なるを知らざりしに出でにき、曰くカメレオンは青色なり、曰く青ならずして緑なり、曰く青にあらず緑にあらず、純乎漆黒なり、俱に共に檢するに及て、其の白きに驚きしは、其色の種々に變更するを知らざりしに因りにき、衆盲の象を評し、互に執て下らざりしも、畧之と一轍。

わけのぼる籠のみちは多けれど

同じたかねの月をみるかな

嗚呼世上の紛紜概ね斯の若くならざらんや、儒教は他教を指して異端といひ、佛教は外道といひ、基督教はヘーデンと



いふも雖、而も三教の三位一體頗る相類するが如し、

天

大日

上帝

聖人

阿彌陀

聖靈

孔子

釋迦

耶穌

此より以下、推して而して考へんか、則ち大道の融合必ずしも本跡の辨を待たざるべし。

然れども等しく二線、或は毫厘の差千里の差を致すなり、或は千里相距りて遂に相接するあり、或は合ふとなく離るゝとなく永く並行するあり、若し氣運の推移狀勢の變動を以て之に似たりとせば、彼の三教は畢竟其の孰れに屬すべきか。

人の三教に於ける、入る者は之を主とし、出る者は之を奴と

す、入る者は之に附し、出る者は之を汗とす、蓋し亦三教を比較する便なきか爲めか。殘花兄こゝに慨し、こゝに『世界三大宗教』の著あり、著や素より遺漏なきに非ざれども、然るも滔々たる衆人をして三教の關係何似を聽かしむる、或は浩瀚にして盡せるものに勝るあらんか。

明治二十八年十月

雪嶺迂人



## 例言

一 佛教、基督教、儒教は世界の三大教なり。一教の大意を示すのみにも小冊子の中に收む可きに非ず。況んや三大教を示さむと爲すは頗る難事あり。然りと雖も世には未だ三大教の門をも窺はざる者あり。此書は其等の人の爲に三教の案内になさむと望むのみ。

一 三大宗教とは佛教、基督教、回教の三教と稱す可し。儒教の如きは頗る穩當ならずと雖も、我が國の現状より視れば三教は鼎立して三大宗教と稱するに足るものあり。故に儒教を以て三大宗教の中に收めたり。

一 佛、基の兩教徒が布教傳道するにわたり之に反對する輩にして餘りに教相に暗く破す可き點を破せず、評す可き所を評さず、兩教ともに迷惑なること少からず、この小冊子が排妄の一助とならば幸なり。

一 著者の望む所は三大宗教の大意を知らしめむが爲なれば褒貶の管見は加へず、其教義も極めて正統的普通の説を取れり、この書をして佛教家の手になりしものと爲すなかれ、基督教家の筆によりてなりしものと爲すなかれ、法海の深さをさぐり、神の御業の高さを攀づる縁に由りて著し、のみ。



一 著者の淺學なる恐らくは誤謬も多かる可し、遺漏もとより少なからず。更に精確簡明なる書の世に多く出づることあらば宗教界の爲の幸と云ふ可し。

一 梵語、吳音或は讀み僻せある字には假名を施したれど、漢音の如きは特に傍訓をなさず。又迦毘羅、華都(カピラパスト)、太闍(ダビデ)の如きは時に漢字を以て書し、片假名を以て記することなれど別に意あるに非ず、行文の便に従しひのみ。されど片假名は梵、洋の二音に用ひ、眞假名は吳音に用ふ。

一 附録の宗教は三大宗教に關する事の多ければ聊か參考の爲に要領を記載せしのみ。

明治二十八年十月

著者識

# 世界三大宗教目次

## 佛 教

第一章 總論……………一

第二章 釋迦牟尼……………八

第三章 同……………八

第四章 同……………二七

第五章 教義附僧侶傳説……………三四

第六章 教派……………六四

第七章 傳道……………八四

## 基督教

第一章 總論……………八九

第二章 基督……………一〇〇

第三章 同……………一二六

第四章 同……………一二九

第五章 同……………一三五



第六章 教義……………一五〇

第七章 教派……………一六九

第八章 同……………一八二

第九章 同附傳道……………一八九

儒教

第一章 總論……………一九九

第二章 孔夫子……………二〇九

第三章 同……………二二五

第四章 同……………二二八

第五章 同附孟子並七十二弟子傳……………二三三

第六章 教義……………二三六

附錄

回々教……………二五三

印度教……………二七六

道教……………二九四



第六章 教義……………一五〇

第七章 教派……………一六九

第八章 同……………一八二

第九章 同附傳道……………一八九

儒教

第一章 總論……………一九九

第二章 孔夫子……………二〇九

第三章 同……………二一五

第四章 同……………二一八

第五章 同附孟子並七十二弟子傳……………二二三

第六章 教義……………二三六

附録

回々教……………二五三

印度教……………二七六

道教……………二九四

(目次終)

三 聖 像 之 記

釋尊の圖は明治二十六年十一月印度の達摩波羅僧正が我邦へ携へ來りし石像を撮寫せしものなり、かの阿育大王が造立せしものにして印度に於ても無類の靈像なり。

基督の圖は魯國の畫伯の筆になりしものにて原圖は油畫なり、所藏者鈴木眞一氏が司教ニコライ氏に依頼して二ヶ年の後やうやくにして成りし大作なりとぞ。

孔子の圖は湯島の聖堂大聖殿に置かれしものなり、聖堂は寛永六年の冬民部卿法印林道春の別莊忍ヶ岡の學問所へ尾張大納言義直卿が一堂を建立ありしを以て初とす、五代將軍綱吉公の台命により元祿三年の秋忍ヶ岡より神田臺に移し大聖殿と稱せり、この聖像は赤梅檀なりとの傳説あり。





佛の尊像

小川一真寫影銅版及印刷

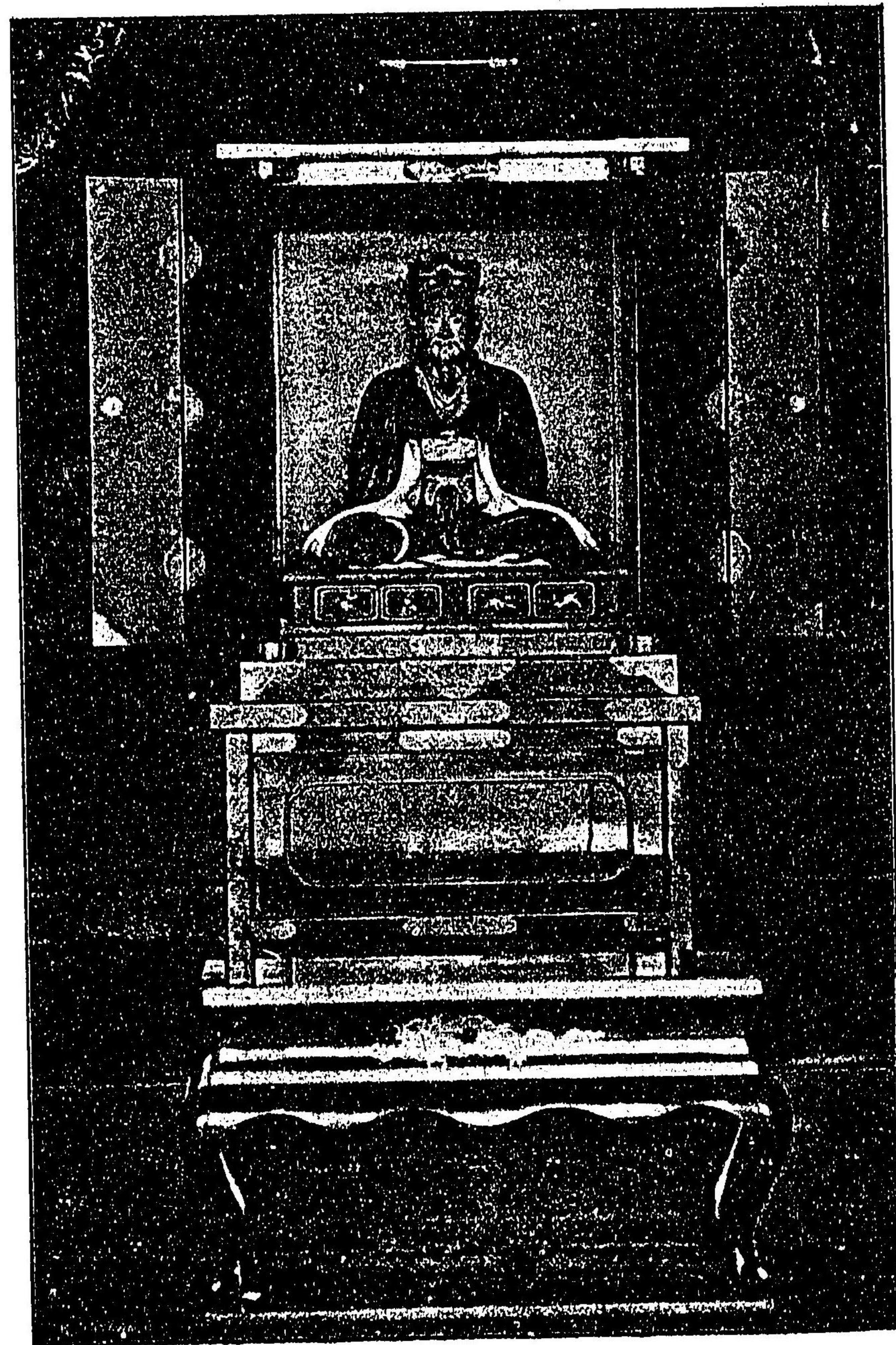




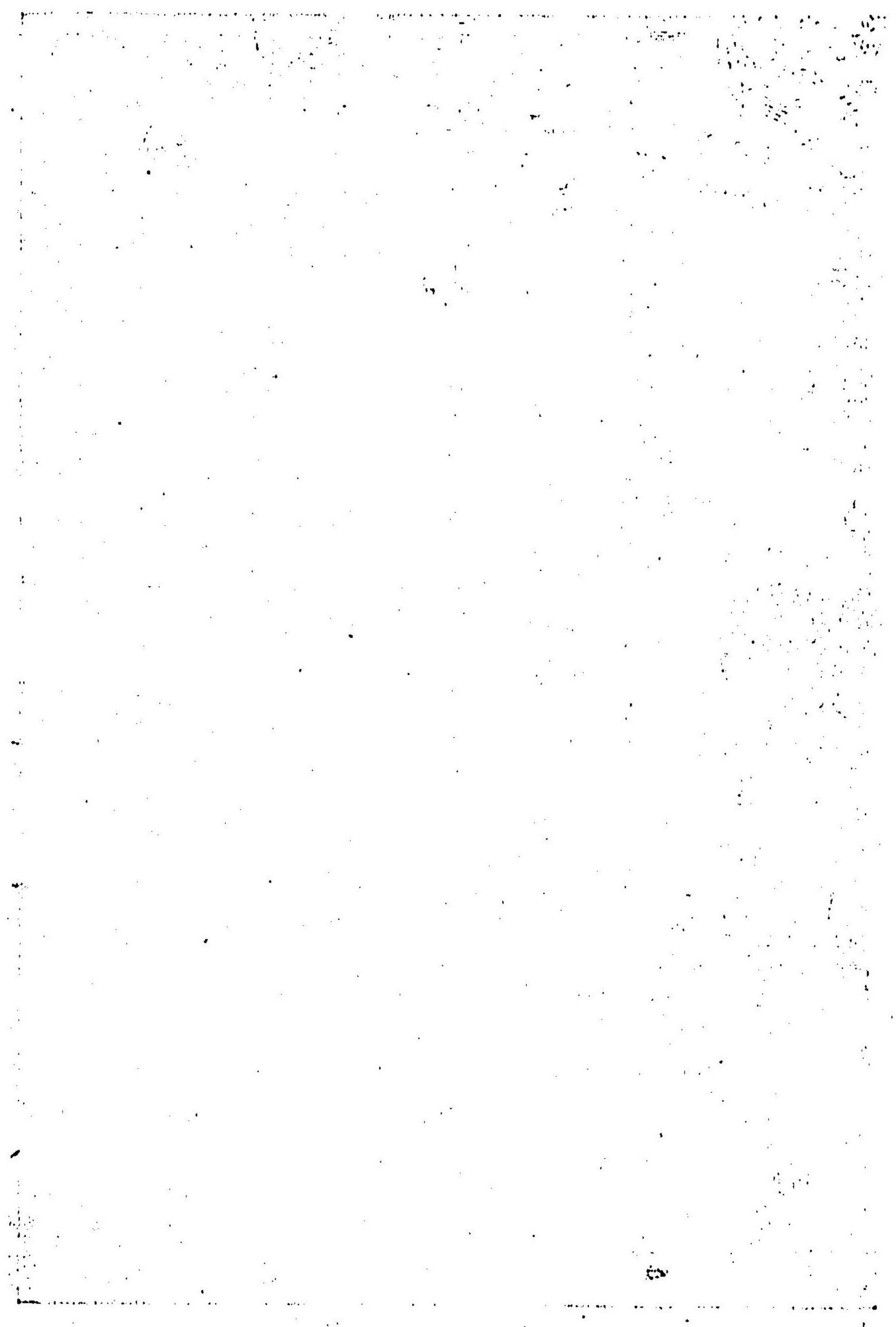
佛の像

[The right page of the book is mostly blank, with a faint rectangular border visible.]

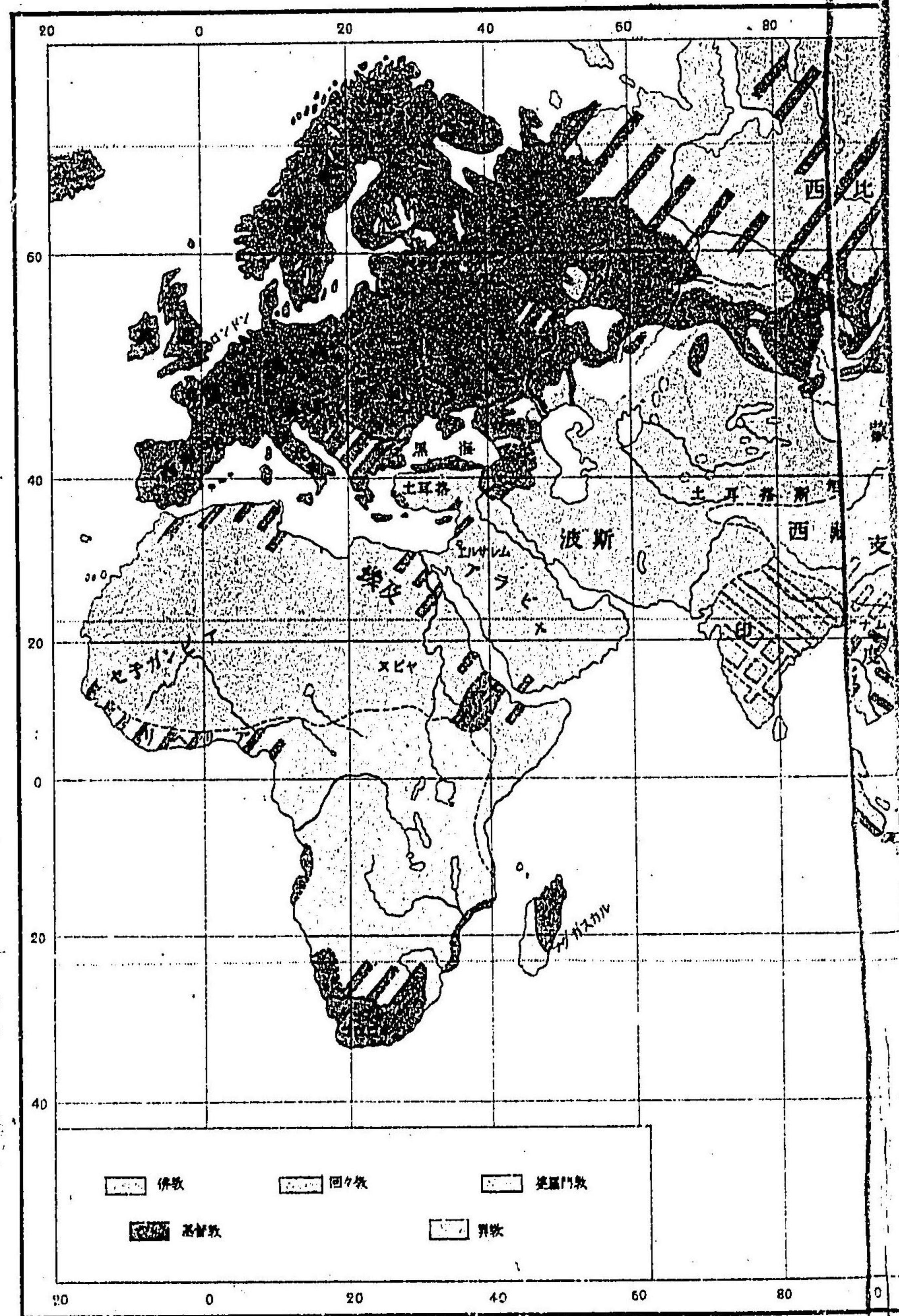




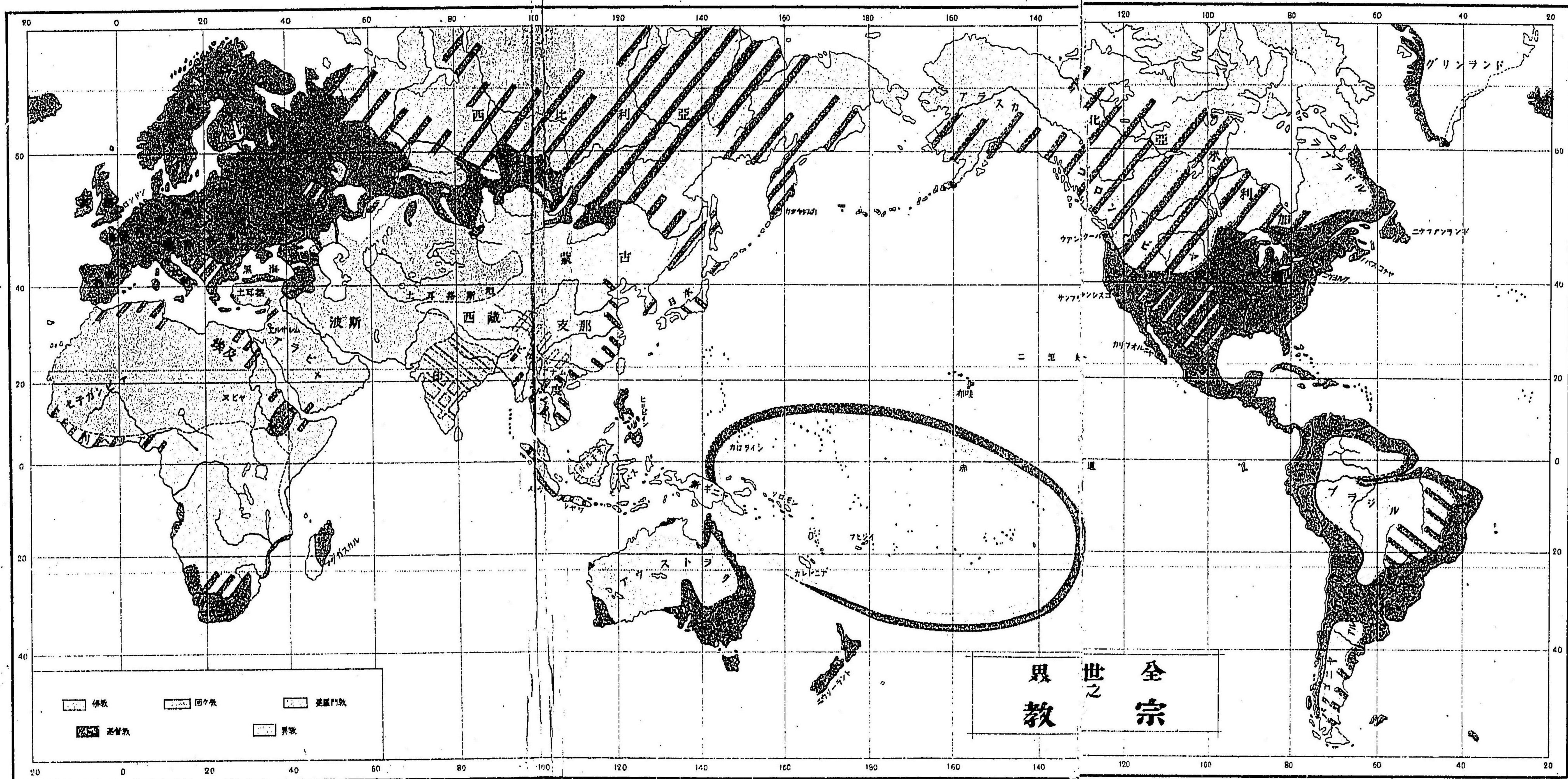
孔子の像





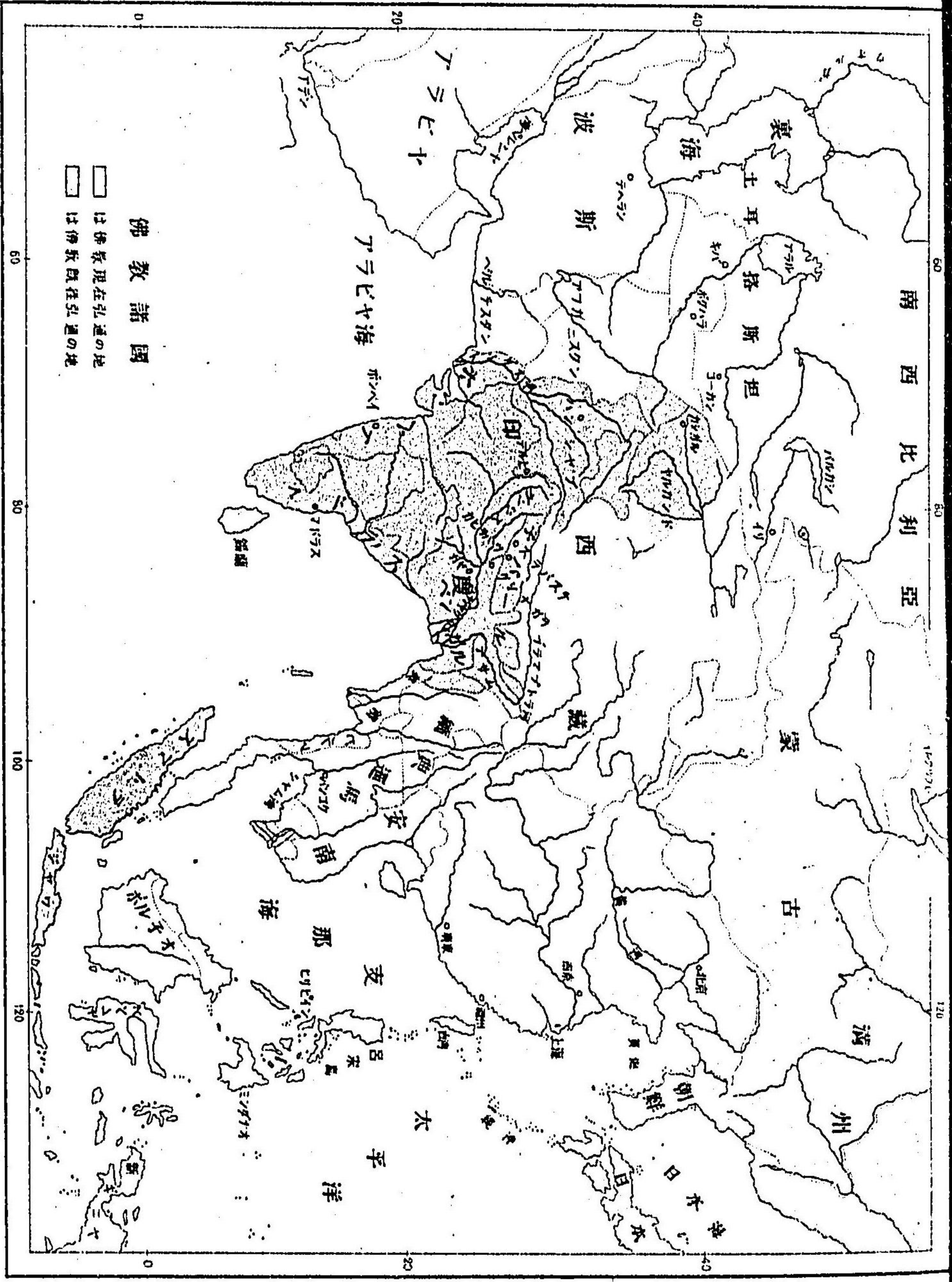






全宗世之界教





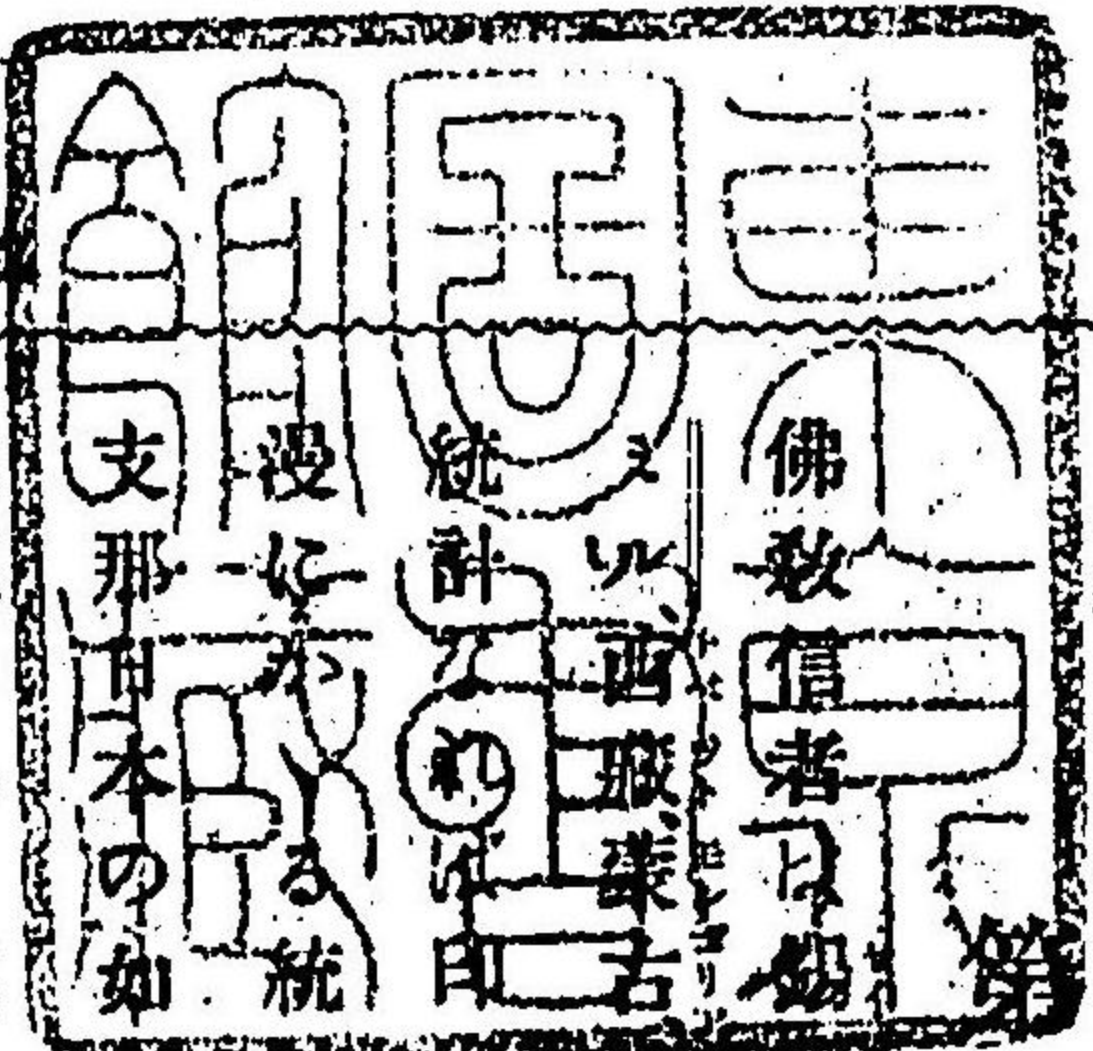


# 世界三大宗教

戸川 殘花 著

## 佛 教

### 第一章 總 論



佛敎信者、英國、緬甸、暹羅、安南の南部にて凡三千万人あり。支那、日本、朝鮮、カシ  
 ミア、西、亞、東、古、滿、州、チ、バ、ー、ル、等、の、北、部、に、て、凡、四、億、七、千、万、人、あ、り、と、云、ふ。元より歐洲人の  
 統計、な、ら、ば、印、度、地、方、を、少、し、く、精、確、な、れ、他、は、其、國、の、人、口、と、信、者、と、を、混、同、せ、し、者、な、ら、ば、  
 漫、に、考、へ、る、統、計、の、み、を、以、て、信、徒、と、い、定、む、可、か、ら、ず。況んや佛敎の衰退せし朝鮮あり、又  
 支那、日、本、の、如、き、は、儒、道、道、敎、神、道、と、共、に、佛、敎、を、信、ず、る、國、民、ゆ、ゑ、若、し、も、歐、米、の、基、督、敎、徒、が、  
 宗、派、さ、へ、も、固、く、守、る、者、よ、り、見、る、時、は、誰、を、佛、敎、信、徒、と、呼、び、誰、を、儒、道、の、弟、子、と、稱、す、可、か、か。  
 特に神儒佛をば鼎の足の如く又三角形の三隅の如くに信じて以て宗教道義の觀念を養ひ  
 來りし我が國民の如きは歐米人の觀察點も時に過誤なきにあらず。抑佛敎が亞細亞に  
 起りて亞細亞を感化し印度支那の如き古代の開化を導き今も尙ほ人心の底に潜む所の

(一)



勢力より考ふる時は優に四億万人余を信者と爲すの力あるものなり。(他には新舊の基督教にて凡三億万人あるのみ)回教、印度教の如きは肩を比す可き同日の論にわらず。佛教は釋迦牟尼出世より起り、年時には數説ありと雖も今を距ること二千八百年より二千三百年の間に在り。この佛教の本土の人種は、アリアンにして白哲人の部なり、太古に印度の原人種、ドラウイアンを追ひ、パンジヤフ地方の五大河を越し、恆河の沿岸をば漸次に繁殖して終に五天の全部をば占めしなり。かの韋陀經の聖語聖歌を誦むじたる人種なれば、ドラウイアンとは到底社會を同じふすること能はざるなり、茲に至りて印度人四種の階級の立ちぬ。曰く婆羅門、曰く刹帝利、曰く吠舍、曰く輪達羅なり。法教師、武士、商工、農民に似たるものなれども、刹帝利が輪達羅を見るは殆んど人類を以て伍せず。又邦國は割據の姿となり、十六大國の五侯を立て、宗教も初は自然を崇拜せしが次第に下劣の神を建て、終に多神偶像の惡む可きものとはかりしなり。然れども開明の今日の如き社會に競争なき時代なれば、如何に族制(カスト)は頑梗にして個人の自由なく、職業は世襲にして變易なく、頗る專治抑壓の社會の如くなれども、其實際は反て悠々たる葛天氏の民たるに近し。芭蕉陰は涼くして葛衣だも必ず要せず、洞窟冬暖なれば一裘にて足れり、菓實は採るに従ひて熟し、粳米と勞せずして收め得べし。婆羅

門族の子は婆羅門なり、刹帝利の子は刹帝利なり、吠舍も、輪多羅も亦同じ。靈魂の不滅を信じ、輪廻の教を信じ、今の禍福は昔の業因より成れりと信じ、星卜、禁呪、夢想、百千の迷信一ツとして具らざることなく、この濁惡の世より救はれむとは全く婆羅門族の祭司の力にのみ由れり。

この婆羅門も多くは無識無學迷信の中に世を送る者なれども、其少數には頗る高遠の哲理を味ひ、辯難考究に日を送る者ありき、或は冥想沈思の中に形骸をかへりみず己を神と同じく爲さむと欲する大仙もありき、これを評すれば、祭司あり、哲學者あり、隱者あり、仙人あり、最下等の修多羅族が卑くしく世を離れたるが如く、婆羅門族は高くして世より隔たりしが如き觀ありき。故に社會の動機を發するは、中間の刹帝利と吠舍の(士、工商に似たり)三族なりき、宗教哲學の異論新說の行はるは、此二族なりき。一時哲學の隆盛を極めしをりには九十餘種の分派あり、僧法論師、毗世論師、毘陀論師、裸形外道論師、苦行論師等の如し。神理、性理、物理、心理の諸學の奥を究むると共に、修學鍊行の極は斷食捨命を常と爲す者すらありしとぞ。

斯くの如く印度に於て宗教哲學の開發せしことは太古に溯り得べし、支那に於て未だ老子も孔子も世に出でず、希臘にては古聖人も未だ生れず、況んや獨逸をや、英國をや、森林蒼



鬱として狼群の徘徊するのみ、野狐の白日に往來するのみ、萊因河畔月無人の境を照し、テ  
 イムス河岸芦葦の秋風に戦々あるのみなりき。此國に佛教は起りたれども、佛日は永く  
 西を照さずして東に移り、摩河衍(大乘)の真理も和漢の人は味ひ得たれど、印度に於ては後  
 僅に南部佛法即小乗の法味のみを錫蘭其他の小部分に留めしのみ。故に斯かる古教も  
 歐洲人の知り得たるは實に五十餘年前よりなり、即基督紀元千八百三十七年六月に古物  
 學者ジェームス・プリンシプ氏が阿育王(アソカ)の岩石に彫りおきたる聖傳を發見せしよ  
 り、トルノール氏の「パトリ」語の錫蘭島史の英譯あり、チパール錫蘭の諸寺院に於て經卷の  
 寫本を發見し、これより佛日は西方の天をも照すに至りぬ。これより幾かに歐洲の人は  
 釋迦牟尼の事跡に暗く、釋尊を以て埃及の「アビス」(神牛)なり或はスカンデナヴィヤの、オーデ  
 ン神なりと臆説のみ紛々たりしなり。又近時に至りては、理想派のビシブ、ベルケレーの  
 説よりも深し、佛國の實驗理學派と同じ、否々、釋迦は印度の不可思議論派の  
 哲學者なり。佛教は一神論なり。シヨールベンハフの厭世説と同じ、フヒテの凡神論と  
 同一なり。一元論なり。衆説紛として未だ其奥に達せざるものゝ如し。以上は教授ハ  
 クスレー、ビュヒネル、パトリ語の博士ライスマグビズ、佛教學者アーサー・リリー、ボックル  
 氏等の學士の説なりき。二千餘年の往古にわたり、恰も宗教哲學の論師が戰國割據の姿

に亂れし時に當りて、釋迦牟尼が一神教を覆へし祭司の擅横を破り、論師の衆説を綜合し  
 所傳の宗教の上に凌駕せしめし哲學的宗教は即佛教なりき。  
 佛教は最高の倫理學、心理學をも含み頗る超然的の形而上學に屬する所あれど、然れども  
 普通の道徳に於ては淺近の戒律を與ふ。しかしながら佛教の究竟地は到底己を清淨に  
 爲すと云ふ言にありて存す、詳細は章を重ねて説くと雖も、聊か大綱を茲に擧ぐ可し。  
 釋尊は三乘の法輪を轉じたり、三乗とい聲聞緣覺菩薩の爲に三時期に説かれたるあり。  
 乗と云ひ輪と云ふ舟車に縁ある意にして此方より彼方へ導き或は達せしむるものと思  
 へば可なり。釋尊は其根機に従ひ、應病與藥の理に由りて衆生を化せしむるものと思  
 ありと雖も畢竟佛教ては法海より流れ出でし三大河なれば、衆生を嚮せし後は再び一味  
 の法海に入るなり。釋尊は先づ鹿野にて、人天の爲に小乗を教しへられたり。小乗は四  
 阿含經を見る可し。比丘比丘尼には二百五十戒、俗には五戒を授け、苦集滅道の四諦を説  
 き、濁惡の世より離れて涅槃(ニルバナ)清淨の地に達するを以て願とす、南部佛教と稱する  
 錫蘭、チパール、暹羅、安南、カシ米尔等に行なはるゝは、この小乗に屬す。涅槃も大乘宗より  
 は小乘涅槃と稱して究竟とは爲さず。大乘は法華經、大般若經等に就んで看る可し。大  
 乘にては空しく世より離れむとて涅槃を求むるには非ず、娑婆即淨土の理にて圓滿具足



の相を現在の世よりして得るが願なり、故に二百五十戒又は十戒の戒律も、空しく戒律に拘泥せずして何事も一心の上にありと観するなり。涅槃も戒律も心に在りと悟するが大乗門の究竟地あり。これを北部佛教と爲す、特に東部の日本の佛教は大乗のみにて小乗の行人はなしと雖も、大小顯密の理は悉く備はれりと云ふ。然しながら大小の名は必竟大乘家より小乗とは稱するなれば、小乗家に大乘と稱するものは無しと知る可し、故に南部佛教家は自稱して正統の佛教なりと唱道す。又歐洲人の佛教と云ふは小乗のみを以て論じ、大乘に屬する經論の反譯は僅に一二あるのみ。約して言へば、小乗は形に歸し、大乘は心の圓滿に調和せし相なり、眞善美を全く具足して、即心即佛の妙境に達せしなり、小乗は相對にして大乘は絶對なり、然りと雖も、大乘家は小乗を捨てず、共に之を一乘と稱す。又佛教には造物主として見る可き神はなし、毘盧遮那(ペイロシヤナ)の如き煩る造化主に近く見ゆるありと雖も、萬物を無始無終と説く所の佛法には動かす可からざる一乘の眞理あるのみ、始と云ひ終と云ふは假定したるなり、廻轉する輪に、何處に首尾ありむやと是れ佛家の所説なり。

又草木國土一切佛性ありと説き、萬物が慧日の光を被ひり、佛陀となるを求むるなり。又眞諦俗諦の二門あり、一ツは絶對にして一ツは相對なり。宇宙の本體は絶對即眞諦なり、

其體中にある者は皆な相對なり、俗諦なり、此の眞俗二諦の外に超然たるが佛教なり。又佛教の重むする所の慈悲忍辱なり、觀無量壽經にも佛心者大慈悲是なりとあり。忍辱の徳は諸徳よりもまされりと教し、母が子を愛するが如き忍辱を以て衆生を愛するを勸む。佛教道德は慈悲忍辱の二ツにあり。次に因果の大法則は佛教の楔子なり、佛陀さへも此因果の法則は犯すと能はず、眞如の海水は湛然として澄めども、因果の風浪は常に動けり、絶對の本體は海なり、相對の作用は風なりと知る可し。又善惡を二ツに分ちて論じ、一は時と所に關はらざるものとし、二は時と所に係りて判するものとす。十善十惡の如きは常に變易なきものなり。苦樂も加護する神のごときものなし、人に苦樂あるは恰も蠶の自ら繭を作るが如く己より吐きしものなりとす、善惡も苦樂も心海の波荒くして生ずる所の相と觀するのみ。又佛教に於て尊重する事は觀法なり、實に觀法に由りて宇宙に磅礴する眞理と感通することを得て、終には絶對の清淨法身と一致和合するを得べければなり、この一致和合する時を以て正覺を得るとも、阿耨多羅三藐三菩提を得しとも、無生法忍を得るとも云ふなり。又祈禱禮拜等の儀式は指月の比喻と全一にして、天上の月を示すが爲のみ、月を見し以上示す所の指は用なし、必竟祈禱禮拜は大悟せざる者が對觀して覺位に到る可き形式上の方便のみ、其人によりて主觀的に觀るも客觀的に觀



るも妨碍なし、彼我の二人稱を用ひるも亦た可なり、主客も彼我も本來不二と悟るがゆゑなり、到底禮拜祈禱の形式は根機の淺深高下より生ぜし必然の結果なればなり、他の偶像教と同視す可からずと云ふ。又一切の生物には靈ありとす、この靈も無始無終なれば、其物以外に制裁する能力の存することなし、故に輪廻は善惡の業報に従がひて三世に流轉するのみなり。靈魂或は精靈に於ける見解も人に似たる質を具へ或は觸知す可き體を有するには非ず、始も亦く終もなく幻像的の精靈にして能力を其中に有する者なりとす。最後に來る問題は涅槃なり、涅槃の義は深く高し、小乗宗の涅槃と云ふは心身共に寂滅するを以て本義とす、大乘宗は斯くの如き解釋を以て未だ涅槃の初步を説くものなりとす、大乘の涅槃は無住を以て本義とし、大自由を得たる相なれば唯だに心身の寂靜を求めず、佛陀の上級より聲聞の下級、上天下地、天部地獄、人間鬼畜に至るまで漏らすことなく慈悲の法雨に霑はさむと爲す大悲の理體を以て大乘の究竟地と爲すなり。なほ教義の條下に於て述べむ。

### 第一章

#### 釋迦牟尼降生より樹下成道に至る

日本紀元前三百六十八年、支那周昭王二十六年、甲寅、基督紀元前千〇廿八年の昔は印度國

迦毘羅瞿曇都城に於て釋迦牟尼は生れ給ひぬ。父は淨飯大王(ストダナ)母は摩耶夫人なり。降生の日は四月八日なり。藍毘尼と稱する宮苑を摩耶は逍遙し、無憂樹下に來り右手を擧げて枝を折らむと爲す時に降誕せしなりと云ふ。綠樹の色濃にして禽鳥の彩衣を披きて歌舞する夏の晨諸根寂定にして園林に處らむことを樂しみ、世の喧嘩を避けて殆どひび仙女の相を具足たる摩耶夫人が朝露の草踏み分けて來り遊びし時は世界の歴史に特筆して佛陀生れたりと云ふの日なり、吾人仰敬す可き日にはあらずや。教祖の生誕は何れも皆な千年の昔に溯ることなれば異説の多をまぬかれず、釋迦牟尼の如きも亦然り。西洋紀元前千〇廿八年、周昭王二十六年は舊來相傳の説なれば、かのパトリ語に精通せるライス、デビズ氏は基督紀元前凡五百年と定め、千八百九十三年シカゴ博覽會の時の宗教大會に於てセイロンのダンマバラ師の演說中には基督紀元前五百四十三年と公言せり、相傳の説とは凡五百年の差ありと知る可し。降誕の日も村上專精師は印度第二吠舍月の後半の八日なりとの説もあり。古今東西の異説數十種あり、生誕の考證は茲に論せず。

抑釋迦牟尼の家は印度四姓の刹帝利種に屬し、釋迦族の瞿曇姓なり。其祖先は甘蔗と稱せり、釋迦牟尼生れて七日の後に母摩耶は死せり。幼名を悉達多と云ふ。父淨飯王は掌



中の珠と愛し摩耶の妹鉢羅闍底を母として養育せしめたり、光陰梭のごとしとかや太子悉達多是年七歳となりてより一婆羅門を師として六十四種の書を學び、技藝典籍議論天文地理算數射御知らざることなきに至りぬ。されども性沈鬱にして外見勇武の相を示さず、族人皆な其文弱に流かるゝを惜めり、或時其師小弓を太子に授く、太子見て微笑して云く、この弓をもつて何事を爲す可きかど。師曰く、この鐵鼓を射たまふ可しと、太子莞爾として此弓あまりに弱し、七弓を携へ來れと命じ、七弓を一ツとなして引きしほり、七個の鐵鼓を射透したり。文は既に人の知る所なれど、武も亦た人の知る所となり、父王の愛すること益々深し。當時迦毘羅幡萃都城の北の山地には蒙古人の獍猛なるあり、南には摩訶陀國王頻婆沙羅ありて國威日に隆むなり、加るに又リヒシヤビスの同盟諸國あり、西には般富の聞高きスラバヌチ國(舍衛)あり、コハナ川緩く流れ(古名ロヒーニー)千秋白雪の峯高き雪山は琉瑠の天を摩するの美觀ありと雖も、印度の東隅にありてベナールス(波羅奈國)より北東百里余の所に在りし都城なれば隣邦の敵は少なからざりしならむ、太子悉達多の武が父王と國民の敬崇を博し得たるも宜なりと云ふ可し。

釋迦牟尼の出家も亦異説多し、十九出家、三十成道、五十年間を説法の時と爲し、共に八十歳の壽と爲せど、これも亦廿九出家、三十五成道、四十五年説法、七十九入滅と云ふ説あり。十

九か廿九か出家せし時までは特に擧ぐ可き事少なし、日に益々深きは沈思冥想のみなり、恒に斷ゆることなく胸間に集り來るは宗教と哲學の問題なりき。父淨飯王は悉達多の舉動を見て心を痛め、其意を慰め禪心を止めむと太子の妃に適せし女を索めたり、時に釋迦婆羅門に摩訶那摩と云ふあり、其女の耶輸陀羅容貌頗る美麗ありと王に奏する者あり、王大に喜悅び迎へて悉達多の妃となせり。或は云ふ、コリ王スブラダの女にして悉達多の從兄弟にあたる耶輸陀羅姫なりと、コリと云ふは迦毘羅幡萃都城の傍を繞れるコハナ川の對岸に住せし釋種にして常に水田牧畜の爲に水論を起し屢次戦ひしてありと雖も、又玉帛の禮を以て親しみたる一族なりとの説あり、ライヌダビス氏の、ブディズ(書名)も掲載し系譜に由れば淨飯王の妹アマリタアとコリ王スブラダとの間に生れしを耶輸陀羅姫と爲せり。或説には太子の妃に他に二女あり、瞿曇と鹿野と稱せりと云ふ。父王は三時の宮殿を造り、第一を冬の爲に、第二を夏の爲に、第三は春秋の爲に、温涼宜に適ひ、後園を造り、池臺を營み、花果を栽へ、數千の美女を侍らしめ、歌舞遊宴日として催さるることなし、淨飯王は賢なりと雖も、子ゆゑの間に心の安き時もなく、唯ひたすらに悉達多が厭世の心を息め、王位を嗣ぎ賢王と云はれ、仁君と稱せられよと望みたり、されど太子は美人を愛せず、舞樂を好まず、五感の欲は心を動かすことなかりき、父王は益々愁



ひ婆羅門の子の愛陀夷と云ふ辯才ある者を常に其傍に侍らしめて其友と爲し、五欲の樂む可きを知らしめむと欲せり。

悉達多が欲界を離れ禪地を得むと欲する心は愈々強し、間暇あれば園中の鬱蒼たる樹下に坐を占め觀念することのみ好めり、然れども未だ其心を決して宮殿を出でむとは爲さざりしが、或時城門を出で、野外に遊ぶことあり、東門を出づる時群集道の左右にあり、車駕の麗しきを見る、中に一老人あり降り積む雪の髪を亂し杖にすがり梓の弓の腰うちたゝき辛ふじて歩み行けり、太子は侍臣に問ふて曰く渠何者なるぞ侍臣答へて曰く渠は老人なり、太子再び問ふて曰く老とは如何なる意ぞ、侍臣の曰く老とは昔は嬰兒少年なりしに年月を積み重ねて、遂に形容枯稿し顔色焦衰し起居意の如くならず、餘命幾何もわらず故に老と云ふなり、太子復も問ふ、唯にこの一人のみかど、否人は皆斯くなる者なりと、太子愁然として歎じ日月は流水のごとく歳時は電の如し、我が身恃むに足らず富貴なりと雖も免るゝことを得むやと、車を廻して城に歸へり、郊遊は反て悲感の情を盛むに爲すの機となりぬ。

太子倍々憂惱を生ず、父淨飯王悔いて曰く渠出遊を求しがゆゑに園林を整治し道路を清淨になし厭世の心を轉せしめむと爲し、に、郊遊は更に悲感の媒とありぬ、惡む可きは老者なり、道側に在らしむ可からずと之を追ひ、迦毘羅城の内外は益々園池花

木の巧を盡して其光景恰も切利天上にある歡喜園に異ならざりしとかや。今は厭ふ可き者あらざる可し、南門より出で、遊ぶ可しと、父王の勅ありしにぞ、太子は車をさしらせ出でたり。

門を出づるや又も一人の病者あり路傍に倒れ伏しぬ、其形狀を見るに身は瘦せ枯れ腹のみ大にして氣息喘々となし骨高く肉落ち、既に此世の人にあらず、太子亦も眼をとめ是れ何人乎と問ふ、侍臣は答へざるを得ず、病者なりと云へり、太子は亦も病とはど其意を問ふ、侍臣も亦た病とは肉欲により飲食に節度なく四大の調ひざるが爲に遂に病を爲せり、今は食ふに味なく眠るに安からず、起臥意に隨ひがたく他の助を待つのみなりと答へたり。

太子愁然として路傍の病者に眼をとめ、侍臣を顧みて此人獨のみに病はわりや、復答へて曰く貴賤貧富を問はず一切の人皆一樣なりと、太子は倍々鬱々として樂まず、病苦のある可きを忘れ、世人は五欲を樂むで畏れずと一念茲に及び忽ち車を廻らして城に歸れり。

淨飯王は其日の事を聞き給ふや、諸臣を召して如何なれば嚴勅をも奉せず、病者の如き厭ふ可き者をば太子の行啓の道にあらしめしやと責めたり、諸臣は行啓の朝より道路に臭穢は更なり少しく厭ふ可きものは皆な拂ひ除かしめしに、何方より來りしやを知らずと惶惑して言ふし。

王はますく心を痛め愛陀夷に命じて出離の心を止めしめむと計りたれども、太子豈愛陀夷等に動かさるゝ人ならむや、藕絲を以て須彌山



を懸けむと欲する如しとや云はむ、されど勅命なれば背くに道なく、憂陀夷は常に太子の側に在りて俗界を厭はざらしめむと勤めたり。王は少しく心を安むと近侍に明智の憂陀夷あり出遊するも害あらざる可しと、太子に郊遊を許せり、やがて車を装ひて西門より出でけり。またも不祥の事を生せり、沿道の警衛嚴重にして忌む可き者も厭ふ可き者も盡く除き去りしに、不思議なるかな、路傍に死人を送る者あり、太子と憂陀夷の外には見し人あらず、太子は疾く此の忌む可き者を見て憂陀夷に問へり、憂陀夷は胸を刺さるゝ如く勅命の重きは茲に在りと教て答へず、太子問ふこと三度に及び、覺ゆずして死者を送る人なりと答ふ。太子は例のごとくに其意を問ふ、憂陀夷も今は餘方なく死とは神識去り四體既に覺知の力なく定業の盡きし者なり、故に其親戚哭して之を送るにて候と。太子之を聞きて四肢を顛はし此人のみに死ありや、答へて曰ふ人皆な免るゝとなし、太子いよいよ容を斂め形を正しふし肅然として憂陀夷に云へるやう、この死苦を知らず世人は浪りに逸樂を行ひ心を木石の如くに爲して怖畏せずと嘆息し、車を廻して歸らむと御者に命せり、御者は唯々として命を奉ずるが如くなりしが、恐るゝ申すやう先に東南二門より出てさせ給ひ半途にして還御となりたれば諸臣等が父君の御叱責を蒙ること強しと、憂陀夷も傍より御者の諫を賛して強て園中に至らしめたり。園に入れば其莊觀眼を驚か

し、絲竹歌舞の艶容妙音天上の快樂に似たり。されども太子は死の一事念頭に在りて去らず、静に樹下に座して心を他に移さず、憂陀夷諫むれども聞かず、妓女侍臣等の留むるを聽かず、駕を命じて去れり。太子城に歸りてより老病死の三苦をのがれむと欲する念ますます堅し、王は憂陀夷を召して當日の事をさしをばり、浩歎して曰く、衛士道路を守り預じめ不淨汚穢の物を除かしめしに、太子と汝とのみに死人の見わたるは全く天神の所爲なり、渠生まれし時に相人あり相好を觀て若し出家ならば一切種智を成し家に在りては轉輪聖王とならむと云ひ、又香山ガンダマダナの阿私陀仙も亦同じく一切種智を成さむと云へり、人事に非ず天力なりと愛ふること倍々強し。他日太子はまた北門を出で、遊び老樹の下に座して息へり、時に一比丘あり法服を着て鉢を持ち錫杖をつきて來るあり、太子自問ふて曰く、汝は何人乎と、比丘歩を止め我は比丘なりと、比丘とはと問ふに、能く結賊を破り後身を受けず故に比丘と稱す、世は無常なりと雖も我が修學する所は無漏の聖道にして色聲香味觸法に著せず無爲を得て解脱の彼岸に到ることを得るなりと、さなきだに出離の念ある太子なれば比丘の教を聽き、心を決して斯道に従がひ宿懷厭欲の情をばらさむと思ひ定めぬ。城に歸りて後、王は憂陀夷を速に召し道路に於て亦もや不祥の事ありやと問ふ、憂陀夷答へて曰く、太子獨り樹下に息ひ給ひし時比丘ありて共に語りし



事ありと。王も憂陀夷も比丘の太子に教へしことは知らざりしが故に西東南の三門より出でし時にありし事の如くには憂へざりしと雖も、太子が出家學道の念はますく深きものゝ如し。(或は云ふ太子が老病死の解釋を聽きしは御者車匿なりと、又太子は耶輸陀羅を娶りて後十年にして羅睺羅は生れ、侍臣羅睺羅の生れしを奏せし時は太子は比丘に別れて後河岸の園林にあり、鼓を聞きて靜に獨り云へらく、亦も新に強き絆を得たるか、<sup>な</sup>こは何如にして斷ち得べきかと、嗟嘆しつゝ、城に歸りしに衆皆な鐘鼓を鳴らし詠歌して迎へぬ。されど其夜太子は城を出で、出家の志を遂げしなりと云ふ、こは南部佛徒の古傳説なりとぞ。)後に太子は心を決して父淨飯王に出家の許を願ひたり、父王豈許可したまはむや、歎歎嗚咽して出家の念を息めよ、國に未だ嗣子なしと宣給へり。太子も父の歎には強ひて求ること能はず、快々として日を送りぬ、時に耶輸陀羅は身の重きを覺え、さだかに娘みしなりと知れり、太子は茲に及びて斷然出離の志を決しぬ。以上を四門の出遊と云ふ。抑、太子は四門より出遊して生老病死の四ツを侍臣より聽きたりと傳ふれども、婆羅門六十四種の書に通じ、射御算數にまで達したる人が豈老病死の世にあり身にありことを知らざらむや、こは全く常に宮殿の中に起臥し富貴にのみ日を送り園林の花泉池の鳥綿繡をまどひたる采女のみを眼に観る人が偶次野外に出で自然に接し或は村

民野人の居を看て情緒に觸るゝ事の多きが如し、悉達多太子の莊麗の宮中に在りてさへも、やゝもすれば園林の樹下に端坐して世の無常を觀する人なり、この人にして郊外に遊び庶民の動作を見むには病老死のときき大事にあらずとも、出離の念を促すものは多かる可し、況んや病者、老人、死者を觀むには感情は新たに胸間に溢れ來り侍臣に問ふことなしと云ふ可からず。塵世百般の事物何をか舊と云ひ新と云はむ、少童が虹霓の美なるを見て躍るは情緒に觸るゝの新なるが爲なりと雖も、老翁も亦た時に七色の光彩を見て快然たること少童に異ならざる事あり。老病死の事、人の熟知する所なりと雖も、其身に接し來りて生來曾て知らざりしが如き感あるは、人の皆な知る所なり、後に佛陀と仰がるる悉達多なれば生老病死の感も如何ばかりに深かりしならむ、この感あるに比丘に逢ひ解脱の道を示されたるは神機と云ふの外なかる可し。比丘、老者、病人、死人を(生老病死)太子と觀せけるは淨居天の化して導きしと云ふ説あるも宜なりと云ふ可し。

二月七日の夜なりと云ふや、太子は耶輸陀羅の熟睡するを窺ひ宮殿を出で御者車匿の眠を攪まし愛馬毘沙を牽けと命せり、車匿は深夜遊觀の時にあらず將た怨敵の寄せしにもあらずと疑ひしに、太子は我今一切衆生の爲に煩惱の賊を討たむが爲に城を出づるなりと云ふ。かねてより車匿は太子が出家の念あるを知れば聲を揚げて號泣せしが主命拒む



に由なく馬の轡をとりて北門より出で太子の命する道に進みたり。悉達多は夜間に馬を馳せてコーリの地を過ぎアノマー河に達し馬より下りて身の瓔珞を脱し寶冠を捨て鬚髪を剃りて通行せし獵師の衣を請ひて寶衣と易へ涕泣する車匿を諭して歸らしめ父淨飯王、妃耶輸陀羅に出家せしことを告げ我が爲に辨せよと命じ瓔珞或は莊嚴具を養育の大神ある姨の摩訶波闍波提と耶輸陀羅とに遺れり。

悉達多は徐々として摩伽陀國をさして行き先づ跋伽仙を訪へり、跋伽仙の行ふ所を見るに木皮木葉を着し、二三日に一食し自餓の法を行ひ或は一腳を翹て又は荆棘に臥す、太子この苦行を見て商人は寶の爲に大海に入り王者は國土の爲に師を興す、仙人は生天の爲に苦行す、苦因を増長するのみと其所を去りて、摩訶陀國王舍城(ラジャグリーハ)の北にわたれる般荼婆の山脈の洞窟に任する阿羅遜と迦蘭(或ハ醜曇藍弗)を訪へり、二仙は數論派の婆羅門なりき、太子兩師に生死の根本は何如なる方便を以て斷つ可きやと問ふに、仙の答る所は生死の根を斷つは持戒行忍を以て先とし禪定を習ひて惡不善を離れ遂に非想非非想處に入るなりと、太子は再問して我思ふに非想非非想の處に我ありと爲すか、我なく眞究竟の處は我と我想を除き盡く捨て、眞解脱と名づく可しと論す。阿羅遜仙は十六にて出家し其時百四歳の高齡なりと雖も我の一事も付て太子に答ふると能はず、迦蘭も亦

然り、太子此處を去りて苦行林(ウルバナ)に入りぬ、今日ブダガヤの伽藍の在る所に近し。尼連禪河に近き林中の苦行六年は南北兩部の佛教の所傳に異説なし。林中には憍陳如等の五人の住するあり、太子に供奉して共に苦行を修めけり。この五人と云ふは太子が出家せし後に車匿の報を聞きて父淨飯王と他の宗族等が命じて太子の跡を追はしめける侍臣にて、憍陳如、跋提、婆敷、摩訶男、阿説示と稱せりとぞ。

太子は婆羅門の大哲人亞羅遜等の説に満足せず、淨心守戒に日を送り一日に一麻一米を食ふのみにて端坐して思惟苦行せり、時に迦毘羅城にては太子が尼連河より遠からざる林中に在りと聞、車千乘に資具を積み車匿を苦行の所に送りたり、車匿は苦行林にをりて太子を見るに、形相恰も枯木のごとく皮骨相ひ連り血脉悉く現れぬ。太子ハ斯くの如くに苦行すると雖も勇猛精進増々怠らず、都城より携へ來りし物は斥けて受けず、車匿は止むことを得ず密に太子の傍に在りて奉侍せしとぞ。六年の星霜は苦行の中に送りぬ、或時太子は思へらく法は離欲寂靜を以て眞正とす、我もし此枯木に似たる身を以て道を得むには、外道等は自餓を涅槃の因と云ふなる可し、食を受けて道を成さむにはしかずと、座を起ちて尼連禪河に至り水に入りて身を洗ひ岸に上らむと爲し、に四肢力あくして出づること能はず、辛ふじて岸上に攀上りて歩みしが終に地上に倒れぬ。時に牧牛女あ



り難陀波羅と云ふ、太子を憐みて乳酪を献ず、太子之を受けて体力を養ひ得たり。  
 憐陳如の五人等は太子が食を受くるを見て苦行を厭ひて熱誠の退きしやを疑ひ、悉達多  
 を捨てて皆波羅奈國へ去れり、今は全く孤居獨棲の人となり、畢波羅樹菩提樹下に坐し發  
 願して曰く我道不成、要不起と、草を以て座と爲し結跏趺坐して觀念せり。清涼の好風吹  
 き來り天地澄みわたり天龍鬼神も歡喜す可く見たりとぞ。以上を出家、苦行、食糜、草座  
 と云ふ。

太子は樹下に端坐して無上正覺の道を得むと爲すにあたり魔王は己の降伏せられむと  
 するを怒り諸鬼を下して太子を襲ひ試みしと云ふ説あり、印度人の詩想とミルトンの詩  
 と同一の趣あれば左に抄出す、魔王の事は觀佛三昧經にあり、ミルトンの詩は有名なる、パ  
 ラダイスロスト、リゲインの第四卷にあり。

「魔王言曰、瞿曇善人能知呪當起四兵、即化作四兵、如林甚可怖畏、直空下至道樹所、魔復念言  
 不能降伏、瞿曇脱寶冠、擬地當閻羅王宮、上告諸鬼言、汝等獄卒及閻羅王、阿鼻地獄、刀輪劍戟  
 火車爐炭、一切都舉向閻浮提、魔王震吼、救兵衆速害瞿曇、上震大雷雨、熱鐵丸、刀輪武器交橫  
 空中、然其火箭不近、菩薩此時菩薩徐舉眉、問毫擬阿鼻地獄、令罪人見、白毫流水注如車輪、猛  
 火暫滅、自憶念前世諸罪、心得清淨、稱南無佛」

釋迦牟尼降生より樹下成道に至る

..... And either tropic now  
 'Gan thunder, and both ends of heaven; the  
 clouds.  
 From many a horrid rift abortive pour'd  
 Fierce rain with lightning mix'd, water with  
 fire  
 In ruin reconciled: nor sleft the winds  
 Within their stony caves, but rush'd abroad  
 From the four hinges of the world, and fell  
 On the vex'd wildness; whose tallest pines  
 Tho' rooted deep as high, and sturdiest oaks,  
 Bow'd their stiff necks, loaden with stormy  
 blasts  
 Or torn up sheer. Ill was thou shrouded then,  
 O patient Son of God, yet stood'st alone  
 Unshaken! nor yet staid the terror there;  
 Infernal ghosts and hellish furies round  
 Environ' d thee; some howl'd some yell'd,  
 some shriek'd,  
 Some bent at thee; their fiery darts' while  
 thou  
 Sat'st unappall'd in calm and sinless peace!

Par. Reg., bk, IV.

菩提樹下の釋尊はカルパリの山の十字架の基督を仰ぐがとき觀ありき。魔軍の事は共  
 に一篇の古詩ありと雖も、字句の間に隠現して埋没す可からざる大真理のあることを視  
 る可きなり。嗚呼十字架よりは生命の泉を溢らしめ、菩提樹よりは涼風を起し來りて罪  
 障の苦熱を洗へり。  
 釋尊は惡魔に勝ちし後、日夜眞諦を思惟せり、一切衆生が五道に輪廻して迷へるさまを觀



諸天にも五衰のあることを觀じ、一夜二夜三夜に及び、老死の因縁を思ふに、生あるが故なり、生は天よりも生せず自よりも生せず、因縁より生ず、即ち欲、色、無色の三有なり、三有はた何より生ず、四取、愛、受、觸、六入、名、色、識、行、無明より生ず、若し無明滅せむには他は皆な滅す可しと十二因縁を順逆に觀じ、無明を破せし時に明星の光天上に輝きわたり、正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正念、正命の八正道により、大悟して阿耨多羅三藐三菩提を成せり。釋尊は斯く廓然と觀破し給ひて涅槃に趣く正道を踐み給へり。天鼓自然に鳴り香風徐に來り曼陀羅華摩訶曼陀羅華を雨せしとあるが如く清淨の晨なりしなる可し。

### 第三章 鹿野苑の説法より迦毘羅城に

#### 還るに至る

成道を爲し、後、一七日の間は樹下に座して容易に起たず。熟々考ふるに我が得たる所の法は深奥にして解しがたし、たとひ説法なすとも衆生の耳に入らず、徒らに誹謗せしめて惡道に墮せしめむ、止ぬるかな歎して涅槃に入らむと、時に大梵天王を初として諸天の天神は樹下に來り釋尊が法輪を轉じて説法を爲し給はむことを請へり、釋尊は默して請を受けたりと云ふ、諸天の來降は奇異なること、雖も釋尊が一七日の間の思念はこの傳

説によりて窺ひ知ることを得む。又曰くこの七日間に大乘方廣華嚴經を十方の菩薩に對して説かれたるなりとぞ。釋尊は坐を立ちて波羅奈國の鹿野苑に趣きたり、阿羅邏訶蘭の二仙に法を説かひと思ひしに渠等は既に世を近りぬ。道に隊商に遇ひ其長者跋陀羅期那と跋陀羅梨の二人を度し、又禪那教の優婆伽に逢ひしが優婆伽は釋尊の相好を見て讚歎して去れり。終に鹿野苑に至り曩に師を捨て去りし憍陳如等を説かひと爲せり、時に憍陳如等は遠くより釋尊の來り給ふを見て互に約して曰く苦行を捨て飲食の樂を取る人來れり迎ふること敬禮することをも爲すまじと、然れども釋尊の近づき來るや覺ゆるして禮拜し又衣鉢盥漱の事を執れり、釋尊は教ふるに苦集滅道の四諦の眞理を以てし、我々と貪瞋癡とを水を以て火を消すが如くにある可し、苦を知りて集を斷ち滅を談し道を修めて無上正等正覺を得むと、憍陳如は第一に悟れり、釋尊は大悟を得しことを嘉し、阿若憍陳如と稱し給へり、阿若とは解き得たりと云ふ意ありとす。此日より五人は鬚髮を剃り袈裟を著して沙門となり、六阿羅漢あり即釋尊とこの五人なりき。佛法僧の三寶は具りしなり。又富者耶舎と其父を度せり、此時耶舎の母と妻も佛弟子となりしと云ふ説もあり、其友五十人も耶舎の行爲を見て共に比丘となり、父は其日より優婆塞とはありぬ、實に優婆塞の嚆矢なりとぞ。釋尊は鹿野苑を去りて摩伽陀國に趣むきぬ。



當時摩伽陀國には火教の婆羅門優樓頻螺迦葉あり、釋尊の爲に説破せられ其二弟那提迦葉、伽闍迦葉と二百五十人の弟子も佛弟子となり、日々佛弟子となる者多く比丘衆一千人となれり。摩伽陀國中に釋尊の法威は轟きわたりぬ、君民ともに大仙と仰ぎし、三迦葉さへも佛弟子となりたりと聞ゆしかば驚くのみにて、或は百二十歳の迦葉豈年少の瞿曇に從がはむや恐らくは瞿曇が迦葉の弟子たりしならむと評せり。釋尊は成道の前より國王頻婆娑羅と約せしとなれば先づ大悟せし眞理を傳へむと迦葉等と一千の比丘を從かへて王舍城に往きぬ。風評は實なりき、釋尊は三迦葉を弟子として王舍城外の杖林に來りしにぞ、頻婆娑羅王は大臣を從へ衆民と共に出て迎へり。釋尊は王の起居を問ひ國中の泰平なるを賀したり。當時摩訶陀國は恒河の東谿に在りて河南百英里と、ソナ河の東百英里を領じたる一王國なりき、此大王に大仙と仰がれたる迦葉の耳を傾けて新宗教を唱道する瞿曇の教を聴けり、釋尊は大王を初として大臣等が迦葉の已に從がへるを疑ふ念あるとを知り、特に問を設けて迦葉に答を求めたり。迦葉汝は我が法に於て如何なる利ありて火具を棄て、アグニ神に事へしなり、出家せしや、其時迦葉は偈に以て答へぬ、偈の意は聖火に事へて天人中に生るゝとも五欲の樂は輪轉して生死の海に没せむ、聖火に事ふるも貪患癡を増長す、聖火に事ふるも將來の生命を求る爲なり既に生あらむには老

病死あり、聖火を奉ずるは究竟の事に非ず、如來(タ、ガタ)の法は生老病死を離るゝ究竟解脱の處なりと。大王も衆人も理解せしが如し。釋尊は更に口を開きて説法せり、其大意は五蘊の身は識を以て本とす、識より意、意より色、この色法(心身)が生滅して暫くも住せず、かく觀じれば身に於て無常の理を知り得べし、身を觀するも身相を取らず、我と我所を離る可し、色を觀するにも亦同じからむには是を解脱と名づく、解脱せざれば未だ縛せられたるなり、法本と我と我所なし、顛倒して我あり我所ありと爲す、この顛倒の惑を斷する時に是れ解脱なりと、頻婆娑羅は思へらく我あるを以て縛となさむに、一切の衆生に我なく、我なくむば來報なけむ、釋尊其念を知りて、こゝに燈石あらむ、火は燈石より生ずるに非ず、燈石を持つ手より生ずるにもあらず、斯くの如く情塵識の三が合して境に於て染を生じ、次第に想を累ね來るなり、染より縁、縁より苦、報を生ず、故に想を息むる時は情塵識には善もなし、惡もなし、王また思へらく情塵識の三が和合して善惡あり、果報あらむには三者は常合にして離絶せず、しからずむば斷なりと、釋尊亦も其意を知りて、情塵識の因縁ハ斷と云ふ可からず、常とも云ふ可からず、地水を縁として種子より芽葉を生ずるが如し、斷ならず常ならず、故に中道と名づく。頻婆娑羅は廓然として悟り得たりとぞ。大王は釋尊を宮殿に迎へて午餐を獻じ、迦闍陀竹園に於て伽藍を建立して釋尊に奉れり、これを



寺院の權輿とす。竹園はウエヌウアナと稱す前の杖林と同じ、印度古代地誌の著者ジエチラル、カンニングナム氏は今日のヤシチウアナと同處なる可しとの説あり。釋尊の法を説くや、一年間の好季節は市街村落を巡錫し、雨月と稱する六月より十月までは或所に錫を留めて衆僧に法を説きたり、これを安居の始となす今日に至るまで南部佛教の錫蘭島の僧は芭蕉林の陰に坐して經を寫し法を談じ或は月光の下に冥想する者もありとぞ、我が國に於ても遺風を存せり。釋尊は多く摩訶陀國に於て安居の時を過せり。この間に法徳ますます四方に聞え、二人の婆羅門舍利弗(シヤリブトラ)目犍連(モドカラブトラ)も佛弟子とはなりぬ。舍利弗の得度せし縁は阿捨婆耆比丘が鉢を持ちて食を乞ひし時の威儀に感じて、師の瞿曇たるを聞き、隨喜渴仰の念を發し目犍連にも所感をかたり共に竹園に往きて佛弟子とはなりしなり、共に百人の弟子ありしとぞ。この二人こそ最勝の十哲中の錚々たる者にして舍利弗の智慧、目連の神通は數千載の末世にも知らざる者なし。最勝十哲とす。

大迦葉上行。阿難陀多聞。舍利弗智慧。須菩提解空。富樓那說法。目犍連神通。迦旃延論議。阿那律天眼。優婆塞持戒。羅睺羅密行。(この迦葉は三迦葉に非ず)なり。又釋尊の聰明利根の弟子を度せり、即上行の大迦葉(カシヤバ)なりき。迦葉は婆羅

門にて學頗る富み、四毗陀經に通じ其他一切の書論を知らざることをなし、其婦また端正にして欲想に着せざりしとぞ。出家の念ありて山林に入り道を修め居たりしに竹園の風説を聞き來りて佛弟子とはなりしなり。佛滅後三藏と結集して法化を末代に傳へしは實に大迦葉の力なり。當時釋尊の法徳ますます盛むなるに従ひ摩伽陀國には瞿曇の教しふる所は家族斷絶の法なり或は又渠は我が國に衆人の心を服せむとて來れり、次て來る者は誰ぞと誹謗の聲も發りしが、いつか其聲も止み竹園には千二百五十の阿羅漢を見るに至りぬ。時に迦毘羅城にて父淨飯王は釋尊が摩訶陀國に至り人民を化度するを聞き、別れしより久し、相ひ見て多年の愁思を慰め、其法理をも聽かむと優陀夷を使として竹園に送りぬ。釋尊は家を出で、より十有二年の後、初て故土伽毘羅城に歸れり。

#### 第四章 迦毘羅城の説法より涅槃に至る

淨飯王は愛子悉達多が佛道を得て歸ると聞き、其喜悅嘗るにもなし、道路を治め香汁を地に灑ぎ我が子なれども今は佛陀なり如來なり覺者なりと恭敬至らざる所なし。七日の後に釋尊は城に歸りしと雖も、例に由りて城外の靜閑なる森林を選みて錫を留めたり、父子親戚群臣の欣喜擧げて云ふ可からず、當時佛弟子と爲りし者五百人あり、又佛弟阿難



陀、難陀の剃頭師優婆離、佛子羅睺羅、從弟提婆達兜、從弟阿那律跋提、從弟孫陀羅難陀、姨母鉢羅闍鉢底等は特に意を注む可き人なり。優婆離は婆羅門に非ず刹帝利の貴種にあらずして他の貴種の人々と肩を比して僧となりしは釋尊が印度人四種の階級制度を破りし故なり。羅睺羅は九歳にて得度して沙彌の始となり、鉢羅闍鉢底は比丘尼の初となれり、耶輸陀羅も比丘尼になりしと云ふ説あり。かく釋尊は迦毘羅城に於て有縁の人々を度せり、これより前に舍衛國に須達長者と云へる富人あり或は云ふ波斯匿王の大臣なりと。渠慈善の心厚く貧困の者、孤獨の人を憐みしかば時の人長者に名をつけて給孤獨(アタナピンジカ)と云ひて崇尊せり。長者は釋尊を摩訶陀國の竹園にて拜し歸依の念を生じ、舍衛國にも來らむとを請ひ、爲に精舍(ウイハラ)を建立せむと欲して舍利弗を伴ひて國に歸れり。舍衛國は當時婆羅門中邪見を信ずる人多く尋常の僧にては須達と共に舍衛國には入りがたかりしなりと云ふ。地を相して樹木の鬱茂せし所を得たり、されど其地は太子祇陀の逍遙する園林なれば長者如何に請へども吝みて與へず、終に黄金を以て地に布きて空地あらざらむには與ふ可しと須達長者大に悦び、大象に黄金を負はせて地に布きたり、太子も其行爲に感じ樹木は我れ獻す可し、汝は園地を奉れと、長者大に喜び十二の浮圖七十二の講堂三千六百の房舍、五百の樓閣を建てたり、これを祇園精舍と云ふ、祇樹給孤獨

園なり。却説、迦毘羅城にては淨飯王は積る齡に四大和を失ふ病苦日に逼りぬ。時に釋尊は王舍城の耆闍崛山(靈鷲山)に父の死に頻するを聞きて迦毘羅城に來り、生前に父に謁し、手を父の額上に著けぬ。大王は釋尊の手を捉りて自の心上に着け安らかに氣絶ぬ命終りぬ。釋尊は他の王子と共に父淨飯王の遺骸をば香汁を以て洗ひ、寶衣珍寶を以て纏ひ、寶棺に斂めたり。釋尊は自ら父王の棺を擔ひ難陀、羅睺羅、阿難と前後に立ちて送り、香薪を積むで火をかけ、荼毘一片の烟となしぬ、やがて骨は金函に收め塔を起て、供養せり。又傳説に従がへば釋尊は切利天に昇り、生母摩耶に法を説き、乳汁を吸ひしと云ふことあり、姨母鉢羅闍鉢底も正道を得て寂せり。釋尊は成道後五年より次第に戒律を制し、遂に比丘二百五十戒、比丘尼五百戒あるに及びぬ。説法も成道後ハ小乗を説き成道二十年の後より大乘を説き、方等般若は此間にして四十餘年の後より靈鷲山にて法華經を説き、涅槃に先立ちて涅槃經を説き、觀無量壽經ハ法華の次に韋提希夫人(キディヒ)の爲に説かれたりと云ふ。釋尊が俗縁より得度せし人々は皆戒行堅固ありき。阿難、羅睺羅のごときは十哲中に數へられたる者なりしが不幸にして提婆達兜のみは敵し奉り、一宗派を開き、苦行を以て神聖を得む、釋尊が竹林精舍に於て教ふる所は寛慢なりと、旗幟を一方に飄し、嫉妬の念を以



て釋尊の法を嘗り、父頻婆娑羅を害せし惡王阿闍世(アジャータタール)と結托し屢次釋尊を害せむと爲し、が事終に成らず、世を逝る前には悔誤して釋尊の前に出でむとを欲せしが精舎に往くこと能はず、病床にて悲歎しつゝ死せしと云ふ、又阿闍世王は父頻婆娑羅王の位を奪ひ、陽には佛法外護の名を取りしが陰には佛法を嘗り釋尊を害せむと爲し、人なり、涅槃の年に舍衛國を奪ひ、訶毘羅城をも取れり。

釋尊は波跋に往かむと爲し、道にて金工純陀の供養を受け給へり、食せしは糲糧なりとも、或は粳糧と豚肉なりとも云ふ。供養を受けて拘尸那揭羅城に赴かむと爲し、跋提河邊に到りて病を發し進むこと能はず、樹下に坐し阿難陀に水を請ひて渴を醫やし、辛ふじて拘尸那城外に來り沙羅雙樹下に休みぬ。拘尸那揭羅はベナールスより北、北東にて凡百二十英里あり、訶毘羅城よりは東にあたりて八十英里あり。釋尊は阿難陀に告げて曰く、如來の正化を願はば、貪欲憍慢の心を棄て、佛教に遵ふ可し、精進受を以て道行を思ふ可し。この後一億四千餘歳にて彌勒佛(マイトレア)世に現る可し。我は聖師となりて七十九年、作す應き所は究めたり、汝其れ勉よ、夜已半矣。又曰く比丘は放逸と爲るなかれ、我は放逸ならざるが爲に正覺を爲せり、無量の衆善も亦放逸ならざるに由りて得たり、一切萬物無常存者、云々と語りをはりて、牀座を敷き頭を北になし、面を西に向け、右脇にして獅

子王の如く足を累ねて臥し、般涅槃に入り給ひぬ、實に二月十五日なりき。入滅の後、大迦葉は靈鷲山より來り、阿難陀、阿那律等と拘尸那城の末羅人と共に天冠寺へ遺體を移し、佛身を洗浴し、新切貝、五百張氈等を以て纏ひ、金棺に收め、香油を灌ぎ、香木を積み、大迦葉薪を繞ること三匝して、偈文を誦し、火を然やせり。後、佛骨(舍利)は四方に分與して、寶塔を建て、供養せり。この舍利を受けむが爲には、拘尸那城に向ひ、諸國王は兵を擧げて争ひしと云ふ。

釋尊の説法年數は五十年か四十五年なるかは、茲に判し難しと雖も、ライス、ダビズ氏は左の如くに年代を區別せり、掲げて參考に供するのみ。

成道の後第一年安居

波羅奈國(ベナールス)に在り

第二第三年

摩訶陀國王舍城に在り

第四年

毗舍離のマハウツナ林中に在り(當時迦毘羅城の人とコーリ人と争闘あり)

第五年



父淨飯王九十七の高齡にて八月十五日の曙に世を遊れり、この歳に釋氏の門葉一族に僧尼となりし人多し、アラハバッドに近きコサムビのマクラ山に在り。

第六年

王舎城に在り、忉利天に昇り摩耶夫人に逢ふ、又舍衛國に往きて神變不可思議の力を示す。

第七年

祇園精舎に在り。

第八年

迦毘羅城外サンスマラーの洞窟に在り

第九年

佛弟子に爭論あり黨を樹て、憂ふ可き事多し。

第十年

舍衛國或は摩訶陀國に在り。

第十一年

王舎城に在り。

第十二年

ウエランジャ府の近方の一村に在り、王舎城に歸りて後に十八歳にありし佛子羅睺羅に摩阿羅睺羅經を説く。

第十三年

シャールヤにて安居を送り、舍衛國に在り。

第十四年

祇園精舎に在り、當年羅睺羅僧伽となる。

第十五年

從弟マハナーマに道を説く、マハナーマは淨飯王の位を嗣ぎしバドラカに嗣ぎて釋氏の王なる人なり、耶輸陀羅の父コーリ王スプラブダ釋尊を嘗り地に吞れて死す。祇園精舎に居り給へり。

第十六年

釋尊アラウイにて小兒を喰ふ人鬼を度す。

第十七年

王舎城に在り。



第十八年  
シヤリヤ或は王舍城に在り。

第十九年

摩訶陀國竹園精舎に在り。

第廿年

舍衛國に在り、大賊アングリマーラを度して僧となせり。

以下は分明ならざるにや、氏も掲載せず、廿年間とても三藏記載に符合するや否やは、氏も明言せず、釋尊はもとより安居(ウアス)の間のみ一定の地に在りて法を説き、他は周遊して教化せしと見る可し。されど足跡は北東の地にて今のベンガル部の北邊に多し。聖地と稱す可きはベナール(波羅奈國)の四方百英里に過ぎず。

### 第五章 教義

三藏(經、律、論)の結集は、佛滅後少なくとも百三十年の後、阿育王の第三結集以前にありたりと雖も、溯りて其實證を探り得べきは阿育王以後とす。然りと雖も結集は釋尊滅後直ちに爲されたるなり。第一の結集は小乗にて大阿羅漢、摩訶迦葉これが首座となり、五百人

の聖僧を集め、阿難陀をして經(スダラ)優婆離をして律(ピナヤ)を集めしめ、己は論(アピダルマ)を集めぬ。これを上座部の結集と稱す。迦葉は僧中の上座なれば斯くは名づけしなり。所は難閱祇城(ラジャグリハ)の洞中なり、同時に阿羅漢、婆師迦は大衆を集め、畢波羅(ツエー)ハラの洞外に於て結集せり、これは三藏の外に雜集、禁咒の二藏を加へて五藏と爲せり。上座大衆の結集も共に安居の時なり。南部佛徒の用ふる所は當時の三藏なりと云ひ傳ふ。大乘は當時洞中にて結集されしとも、彌勒菩薩が阿難を將ひて鐵圍山の間に於て結集せしなりとも云ふ。彌勒と云ふは末世に現る可き佛なり、鐵圍山と云ふは世界になき所なり。第二の結集は滅後百年なり、當時は律のみの結集なりき、比丘中に戒律の異説ありしにより、長老耶舎陀之を憂ひ、七百の聖僧を請し、吠舍釐國にて重ねて結集せしなり。第三を阿育王の結集とす、阿育王は頻婆沙羅王の曾孫にして、恰も基督教に於るコンスタンチン大帝の如き外護の帝王なりき。第四の結集は健駄羅國王(印度の北隅に在りし古國なり)迦膩色迦が脇尊者の説を聞き、カシミール國にて小乗の分派有部宗の三藏を結集せしむ。佛滅四百年の頃なり。この第四結集を以て結集の終りとなす、第一第三の外は三藏の結集にあらず、又大乘は聲臭頗る微にして世に現はれしことなし、四五百年間は全く小乗佛教のみと知る可し。滅後六百年の頃に馬鳴菩薩は世に出でたり、馬鳴は大迦葉より附



法藏第十一祖にして殆んど大乘の唱首とも見る可き人なり、著書に起信論あり、以後次第に小乗衰へ來り、龍樹、無著世親の三菩薩躍ぎて起り、智度論、瑜伽論、成實、具舍、涅槃、淨土の諸論を著し、大乘空宗、大乘有宗の權輿とされり、茲に至りて小乗の万物皆有(上座部)諸法皆空(大衆部)の勢炎も衰へ、佛滅千年にして大乘の世とはなりぬ、當時既に大乘、非佛教の説は小乗宗より起りしとぞ。大小乗の何れが如來の金口より出でしや、或は諸論師大哲學者の層又層と祖述し來りし説なるや、非佛教の批評辨難も數千年の昔よりしてあることなれば實に容易に判し能ふ事ならむや、況んや根機によりて同聽異聞と云ふとのあればなり。この深遠奥妙ある大小乗に通ずる教理を簡易に説かむは頗る難事なれば、必ず知り置かざれば叶ふまじき要目をのみ少しく解く可し。

○五 濫 (スカンダース)

釋尊は世の存在を永遠とも永遠にあらずとも説かず、たゞ世は因果の大法に遵ひて恒に變遷するものなりと教し、この因果の法則は天部にも地獄にも行はれ、佛陀さへも此法則の外に出ること能はず。盛衰榮枯轉々して休む時なし、恰も意氣揚々と車を馳する人を高さ處より望に似たり、車上の人こそ二頭の肥馬に鞭し塵を揚げて疾驅するの思ひあれ、高さ所より俯して觀れば、益爾たる虫の肥ふが如し、人も亦た幼若の昨日より老年の

今日に至るまで日々夜々追ふ物は何ぞ、偶次獲たりとも真正の幸福にはあらずる虚無の幻影のみ、走馬燈のみ、新たなる企望と計畫は終に盡くことあらじと。かく觀じ來りて次に輪廻の説は發るなり。輪廻説は佛教のみに非ず、エチプトにもあり、婆羅門教にもありし説なれど、佛教にも亦た用ひらる。抑、因果の大法ありて誰にても爲し、業報は免かれず必ず輪廻して、天人、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道に生れ轉々して、悲哀苦痛の中に在るあり、この悲苦をまぬかれ救の道を求めむには、先づ我を知らざる可からず。我といふ五濫のみ。五濫(五陰とも譯す)は色、受、想、行、識なり。

色とは地水火風の四大、眼耳鼻舌身の五根、色聲香味觸の五境等なり、情欲、五彩等に非ず、形質ありて障礙になるものを色とは云ふなり。

受とは苦樂捨の三を心に受付るなり、捨は苦樂の判然せざるを云ふ。

想とは男女、怨親、赤黃、辛酸等の想にて心に像を取るなり。

行とは造作なり、行爲なり、念々遷流の義にもわたる。

識とは了別なり、耳の聲を了し、意は法を了するが如し。

この五濫を二ツにすれば、色濫と四濫なり、色とは形質あるものを云ふ、故に四大(元素)、五根、五境(塵)より色は成りしなり。餘の四濫は心に屬す、所謂色心の法とは法律の法に非ず、心



をさす二ツが五蓋なり。恰も色は波濤受は飛沫、想は反射する光彩、行は根なくして浮遊する海草、識は幻像に似たるものなり、又椽柱棟梁等の材木に由りて造られたるが家の如く、五蓋に由りて假に相を爲したるが人なり、椽柱棟梁を別々に分てば家なるものなく、五蓋を散すれば人なく我あきなり。老子の車を數へて車なしと云ふ意に同じ、その車その用材、その波濤海草に五蓋は同じと見る可し。人はこの五蓋より成りしとあせば靈魂の存在を否定するも理ありと云ふ可し。然しながら輪廻の説は斥けられず、輪廻とは能く人の知る如く過去、現在、未來の三世にわたりにて、天道にも地獄に落つるも其行爲に由れりと云ふことなり。

○業因(カルマ)

靈魂の存在を否定して輪廻を説く、現世より未來世に關はる連鎖あかる可からず、茲に於て業因の説あり。業因とは人にては天部の鬼神にても禽獸にても一世より一世に移る時に、既に業因の理に由り次の世に生るゝ業を作るなり。この業は何事にても深く執し、執する所より其事を貪り愛し、自他の差別強くして我に我にと執るより、其事の我より失はるゝとか損するとか恐るゝ愚癡の情が増長して業因とはなるなり。されど業因のみ云ふ時は善惡に關はらざるものと知る可し、六道の因果を染と云ひ、四聖の因果を淨と

云ふなり。假令ば人死して暫くの間は他の母胎にやせらす、この間を中陰とは稱す、この中陰の間に其身の業に引かれて氣を稟け質を受け四大を具し諸根成り四蓋を具し、十月に満ちて人と名づくる者が生ずるなり、色蓋も行蓋もこの業に引かれて成るなれば貴賤貧富壽夭病健盛衰苦樂は前世になるなり、前生の敬慢が今生の貴賤、前の仁は今の壽、殺は天施は富と因果の報を受くると知れ。頌に曰く心境相乘して業結牽纏す、七識起發して、八識因縁して、三界に報を受け、六趣に遷延す、隨事起業し、觸處拘連すと、この業因の受報には四種あり、現報(即身に受くるなり)、生報(後身に受くるなり)、後報(後身にも受けず第二第三の身に受くるなり)、無報と云ふ、さりながら最も大切に説くは臨終に引く所の業あり。以上を考ふるに靈魂の存在を執りて我見の迷信に陥る者には五蓋を説き業因を教し、善惡の差別なく不徳の境に沈む者には輪廻を説き業因を教し、自業自得の語は業因受報を解釋し得て十分なり。かく前世も今世も來世も輾轉して限りなく、愚痴より罪惡、罪惡より悲哀を生み來り、人の世は無常にして常住ならず、我れと思ひしも果なく消ゆる芭蕉葉上の露、遺るは業のみ罪惡のみ行爲のみ。地獄もとより恐懼す、餓鬼畜生は淺間し、天上とても五衰ありと云ふ、六道の中の何處にか住す可き。釋尊は苦集滅道の四諦を説けり。

○苦集滅道(アルガニサチニ)



苦集滅道の四諦とは、成道正覺を得べき四道なり、諦とは紛れ易きを紛ぎれざるやうに爲す理なり、人は苦の中にありながら其苦を殆んど知らざるもの、如くに世を送るゆゑ、判然と是が苦なりと明亮になる所が諦なり。故に

苦諦とは生老病死の四觀に由りて、我も人も此身は四苦八苦の聚りしものなりと、分明に覺り得るが苦諦なり、凡夫には苦ありて諦なし、聲聞緣覺は苦あり苦諦あり、菩薩は苦あれども苦なしとかや、人より羅漢羅漢より菩薩と苦に對する觀念も進みゆくなり。

集諦とは業因に由りて此身は苦果の集る所なり、煩惱の因となるものなりと知るなり。滅諦とは以上の苦も業も滅すれば萬事休す、所詮苦集を離るゝは諸惑を永く斷ち、諸業を悉く休するにありと覺りしなり。

道諦とは滅諦を知り、さて其滅はと云ふ時に道諦は次に來るなり、道諦とは我空即小乘涅槃に到るの道路なり。

故に苦集の二ツは即ち苦の果によりて成りし此身現在の受くる所なり。滅道の二ツは諸惑を斷ち涅槃を得べき道路と知る可し。

十二因縁 (ニダナ)

また十二因縁と云ふことを知らざる可からず。十二因縁は緣覺乘の人の觀する所なれ

ば、緣覺をば十二因縁佛(辟支佛とも云ふ)とも稱す。即ち

無明。行。の過去の二因なり。

識。名色。六處。觸。受。は現在の五果なり。

愛。取。有。は現在の三因なり。

生。老。死。は未來の兩果なり。

無明とは愚痴の妄想なり、一旦この愚痴が發れば行と云へる欲が生じ、この欲より物の形を爲し、其形に識と稱する感覺が發り、名色の生命ある物が成り、六入或は六處と云ふ五官と一心の功用を生じ、受と愛の個體的の欲を生じ、取と云ふ差別的の念を發し、有と別の我を成し、我が成りて生老病死を生きるなり。過去に二因があればこそ識より受に至る五果は現在に結ぶなれ。次に現在の三因の愛等がありて未來に結ぶ可き生老死はあるなり。

四諦、十二因縁を明かに爲し、煩惱の魔を伏し、苦果も亡び、業惑も斷え、我空に達せし域をば涅槃と云ふなり。

〇涅槃 (ニルバナ)

五蘊も業因も四諦も解釋に苦しみ、容易には了解し難しと云ふ深奥なる問題には非ず。



人天乘、聲聞乘、緣覺乘と進みて最奥の難解なるは涅槃なり。象外を論せざる儒者にも、靈魂の存在をエキジユステンス、オプゾール確信する基督教徒にも恐らくは難解の問題の涅槃なる可し、佛教家さへも南北大小に淺深の解釋あればなり。先づ近世パリー語に通じ小乗を能く知りし歐洲人の見る所に由れば、涅槃を解すると以下の如し。涅槃の地に到りし人の心意は調馬師が馬を御するに似たり、寛急遲速已の意に従ひ住せむと欲すれば住し、去らんと欲すれば去り、貪嗔痴の三毒に害せらるゝとなく、鬼神さへも及び難きを歎する程なり。其威儀は大地に似て動かす、城門の柱に似て揺かす、湛然として碧潭の如し。寂靜は心なり、寂靜は言行なり、玲瓏として一點の塵をといゆず、大智を得て自在なる相なり。一旦こゝに到れば再び六道に生るゝとなく、輪廻も因縁も業も關するとなし、諸縁は恰も風前の燈火の熄えて跡なきに似たり。然れども斷滅には非ず、濁世の波に順流せず、逆流して罪業をのみ斷滅し心の無垢寂靜なる相なり、徳は聖善なる位に達せしなり。(聖善の字も他の宗教家が取る所の意とは異なり、佛教家の云ふ我、空の地なれば、猥りに揣摩の解釋は下す可からず)。涅槃には我てふ者はなし、儒基の教家の觀る所とは全く其原因を異に爲せば其結果も同じからざるは論をまたず。又涅槃の域に達せし者は阿羅漢果を得て覺位に昇り、生老病死の四苦を脱し再び六道に生まるゝとなく、寂靜の相なりと

云へば、かゝる羅漢が涅槃入滅は般涅槃(Parinirvana)にて無餘なり、斷滅して英語のコンフリート、エキスチンクションと同じ、然りと雖も絶滅には非ずと云ふ(アニヒレーション)歐洲の佛學者が解釋に苦しむは涅槃なり、されど北部佛教特には大乘佛教家は無餘涅槃を以て満足せざるなり、否、釋尊の説かせ給し最上乘の説に非ずとす。抑、小乘涅槃は聲聞縁覺の地なれば一切の諸法皆な心より生じ、因縁は虚假にして實ならず故に空と悟りしまでにて、佛國土を淨め衆生を教化せむとは思はず。無生無滅無爲を以て正位と爲す者なり、未だ三菩提心と云ふ眞性、實智、方便の心を發すること能はず。菩薩は一切の諸法を空のみと悟らず、緣對の時には假りに實と觀て六道の衆生を教化す、然れども未だ圓滿なる大覺の地には非ず、佛陀は假空の二相に著せずして中道に入り、智慧も定力も具へ眞性に住し、六度万行の諸波羅蜜を具定し、正覺を成じ、法輪を轉するなり。茲に至りて四涅槃の説あり、曰く一には本來自性清淨涅槃二には有餘涅槃三には無餘涅槃四には無住處涅槃なり。一は凡夫も具へ、二、三は聲聞、緣覺の地にして即小乘涅槃と稱するものなり、四の無住所を以て大乘涅槃となす、されど佛陀は四種の涅槃を具えしものなり。以上を以て考ふれば、聲聞、緣覺の小乗の地にては身も心も皆亡び失せ、又何處にも生せず、永く去り果つるを以て願とし、身心の失すると聞けば悲しき事なれど、其れは凡夫の心なり、寂滅爲



樂と云ふは貴重す可きものなりと云ふなり。大乘涅槃は前にも説明せし如く無住と稱し、假空の二相に着せず中道に入り大慈悲心を發し、大菩提心を以て我身は滅し世は絶ゆるも苦しからざれど身心都て滅せむには衆生利益の徳を闕くことの歎かばし故に無餘涅槃には入らず成佛を願ふなり、生死輪廻は願はざれど衆生濟度の爲には身を失ひ命を亡す事幾度ありとも厭はずかゝる地位に達せしが無住處涅槃とは云ふなり、三世の諸佛又は佛菩薩などは皆な此の位に在るなりとぞ。諸佛とは釋迦如來阿彌陀佛藥師如來大日如來阿閼佛燃燈佛この無量無數千万の佛あり菩薩には觀音菩薩文殊菩薩勢至菩薩等あり佛に三身あり曰く法身報身化身なり、法身は佛の自性にて法界に周遍し見ると能はず眞如又は大日如來の如し。報身は自受用身と名づけて衆生の爲に無爲より有爲となりし佛なり彌陀藥師等の如し、化身は一國一釋迦と説くが如く釋迦牟尼佛或は彌勒佛なり。法身は本體報身は現相化身は妙用なり。

さて斯く大乘涅槃の域に達し佛陀の大覺位に到らむと願はゞ三學六度と云ふとも知らざる可からず。三學とは戒定慧なり、六度とは六波羅蜜あり。

○六波羅蜜(バラミタ)

三學六度を括取して萬行と云ふなり。戒定慧の三學は儒の三綱と見て六度を五常と見

る時はやゝ近かる可し。六波羅蜜は施戒忍進定慧の六なり。

第一 檀波羅蜜とは布施なり、慈善の業は皆なこの波羅蜜にあり、布施は衆行の源なりとて孤獨を助け饑餓を救ふは元より論するまでもなく、何事なりとも慈悲の意を以て行ふことなり、故に法施と云ひて布教傳道は最も布施の大なるものとなし財施よりも重しとなす。偈に世多愚惑人守慳不布施、積財千萬億、稱言是我有、臨欲壽終時、眼見惡鬼神(中略)智者不積聚、爲破慳貪故とあり。

第二 尸羅波羅蜜とい持戒なり、戒は是れ人の師なりなぞ述べし所あり、實に心は業の主なれば其心意を制し意馬心猿の狂によりて罪の報を受けざるは戒によるなり。言行忠信なるは戦々競々として戒を守るに在るのみ、戒とは嚴正なる道徳の法律なり。

偈に怪哉臨命終、破我戒瓔珞、以戒莊嚴身、不用殮葬具、人身既難得、遭值戒復難、願捨百千命、不毀破禁戒、云々とあり。

第三 辱提波羅蜜とは忍辱なり、忍の徳たるは持戒苦行も及ぶ能はず、經に夫れ忿恚は百千大劫に集る所の善根を損害すとあり。

第四 毘離那波羅蜜とは精進なり、精進とは清きうへに潔きに進むの意なり、且より暮に至るまで言行を省み心意を考へ、放逸に流れず邪網に墮ちざるやうに勤めて怠らざ



るが精進なり。

第五 禪那波羅蜜とは禪定なり、禪定とは沈思靜座神を冥漠の内に栖して形を塵埃の外に遠るとも云ひ、世に云ふ座禪なり。六を藏すと龜の如く意を防ぐと城の如し、慧と魔と戦つて勝つときは患なしなど、云へる偈あり、龜の子が手足と首尾を縮むることくに禪定に入らば情魔も欲魔も奈何ともなすこと能はずと云ふ意なり。

第六 般若波羅蜜なり。般若を譯すれば慧なり、五度智なければ愚盲の若し、慈善も戒律も忍辱も精進も禪定も般若と云ふ智慧がなければ當を得ず度を失するなり。故に智を一切衆生の母と稱す。

佛法僧の三寶を尊み、六度萬行を身に具足し無住處涅槃に入る、即是佛なり。法性身の中に住せしなり。少しく法性の眞如を説かむ。

○眞如

「百法を談すれば一心自ら成立し、一心を觀すれば百法即ち宛然」と法相に曰へる如く、心王に入識あり眼耳鼻舌身意末那賴耶なり。心所有法五十一あり、色法十一あり、不相應廿四あり、合せて百法なりと雖も其法性は一眞如のみ、眞如とは身心の相にあらす、佛神にあらす一法則にあらす、眞理にあらす、又は賴耶識阿賴耶識と云ふ諸法の種子を持てる心相に

もあらす、眞如とは諸法一切の實性なり法性なり。抑阿羅耶識と云ふは色心の根本にて、その第八識は藏識とも譯し他の七識は是より生ずるなりと説けども、これは法の相の上のことにして、法の性即實性は眞如なり。されど眞如と名づくるも假の名にして有とも云ふ可からず空とも云ふ可からず元とより生死の相をはなれて言語道斷と云ふ可きのみ。されど法相破相の二教より進みて顯性教に達すれば常住清淨にして昧からざる本覺の眞心即眞如を明かにす、即大乘の法體なり、本來自性清淨涅槃と云ふも無住涅槃と云ふも眞如の月の明かになりて妄想執著の雲の消れたる時なり。般若佛性平等一切皆成佛と云へるも眞如の清淨身とありしを云ふなり。

眞如は以上論する如く言語にも名字にも眞如と云ふものは斯かる事なりとも物なりとも説き難し。變異も破壊もなしと云ふなり、宇宙の森羅萬象億万を以て計り難けれど、變異も破壊もなしと云へる事物は一つもなし、故に言説の及ぶ所にはあらず。眞如の自性は有相に非ず、無相に非ず、非有相に非ず、非無相に非ず、非無相に非ず、一相に非ず、異相に非ず、非一相に非ず、非異相に非ず、一異俱相に非ず、なぞ起信論にもあれば、先づ法性なり法體なり、生滅なぞ、云ふ差別のなきものと心得置く可し。生滅てふ心の上の差別が發ると最早藏識と云ふ名を付する事も出來るなり、藏識とは前に説きし阿羅耶識にして、こ



の識は色心の種子を含み居るが如き識の根本なり。かゝる法性の真如より如何にして識など云ふ名を付するやうにありしかと云へば無明てふ妄心が忽然と念を起し法性真如も大海の波の風に動かさるゝが如くに無明の風に動かされ動き始めてよりは相續して種子の相を生じ、色心さまゝの境界を發すと知る可し、故に三界は虚偽にして唯心の所作なり、心を離れぬれば六塵の境界なしなどと本文にあり、この無明妄心を滅すれば清淨自性の真如は現れ来るなり、この域に達せしが心原を覺りしとは云ふなり。

佛教々理は通觀して論ずること容易に非ず、特に涅槃の如き題目は小乗宗の説く所る大乘宗の教しよる所は大なる相違あり、大乘にても真如の説は法相破相、顯性の三教によりて多少解釋を異にせり、別けて真如は哲學的深遠の問題なれば、茲に十分に説明する餘地なし。

教義の末に必ず知りおかざる可き事を述べむ。阿彌陀佛、彌勒佛、普賢菩薩、觀音菩薩等なり。

阿彌陀佛は西方淨土に住すと云へり。淨きものゝ居る所なれば淨土とは稱するなり。五濁なく煩惱なく妙莊嚴を具へ珍寶を備ふる所なり。この淨土と稱する所に二義あり、一ツを報土二に化土或は應土と爲す、報土は純淨にして諸菩薩が阿彌陀を見る所なり、

即ち佛土なり。化土は染あり淨あり凡夫二乗の阿彌陀佛を見る所なりとぞ。されど華嚴經などには如來の淨土は如來の寶冠にあり耳璫に在り瓔珞にあり衣文毛孔に在りなど見ゆれば、因の識種成就して器世界を感得するものと知り置く可し、智度論にも釋迦牟尼佛更に清淨世界あり阿彌陀國の如し、其彌陀佛にも亦た嚴淨不嚴淨の世界あり釋迦佛の如しとあり。故に法華經の偈に

常在靈鷲山 及餘諸住處 衆生見劫盡 大火所燒時 我此土安隱 天人常充滿

園林諸堂閣 種々寶莊嚴」とあり、

阿彌陀經には光明無量にして十方の國を照すに障礙する所なし是の故に號して阿彌陀と爲す。彼の佛の壽命及び其人民も無量無邊阿僧祇劫なり故に阿彌陀と名づく。又是より西方十万億佛土を過ぎて世界あり名けて極樂と云ふ其土に佛あり阿彌陀と號す今現在說法し給ふともあり。以て阿彌陀佛と極樂の事を知る可し。彌勒菩薩は(マイトレ)末世に現はるゝと云ふ佛なり。阿難かつて佛に白して云く彌勒は法忍を得ること久しきに何故に速に無上正眞の道に入り最正覺をなさざるや、其時佛は答へ曰く彌勒には四大事あるが爲に正覺を爲さざるなり、一ツには國土を淨む、二ツには國土を護る三ツには一切を淨む四ツには一切を護る事なり、彌勒の發願は釋迦佛より先んずること四十二



切劫とは時期の義なりとも見ゆ。前佛後佛あり讀彌勒回禮文を讀まば彌勒の功德あることを知るに至らむ。

「至心歸命禮當來彌勒佛 諸佛同證無爲體 眞如理實本無緣 爲誘諸天現兜率 其猶幻士出衆形 元無人馬迷將有 達者知幻末會然 佛身本淨皆如是 愚夫不了謂同凡 知佛無來見眞佛 於茲必得永長歡 故我頂禮彌勒佛 唯願慈尊度有情 願共諸衆生 上生兜率天奉見彌勒佛」

又彌勒の當來の世は五十億七千六十万歳の後なりとも云ふ。其時には人眼四千里の遠きを視ることを得て、閻浮利内の地は六万里の廣にわたり山陵溪谷なく地平なること、砥の如し、彌勒の生るゝや身の長け十六丈、生れて城池に墮ち目萬里の内を徹視し、佛と爲る時に生ずる所の龍華樹は高四十里廣四十里ありなどゝあり廣大無邊なる事どもなり。此他に普賢、觀音、勢至、文珠、藥師等の諸佛諸菩薩あり、寺院の本尊の協立と稱するは此等の佛菩薩なり、特に觀世音の如きは佛敎々理の何如なるは知らざる者と雖も其靈驗に隨喜渴仰の涙を袖にしぼる者多し。勿論以上の佛菩薩の南方佛徒の知らざるもあり、宗派に由りては全く禮拜せざることゝ知る可し。佛菩薩の數は殆んど無量なり、茲には省畧して論せず。

又切量、三界六道、或は開闢論などは元來釋尊出世前より印度に在る説にして婆羅門敎の傳ふる所なり、事長ければ畧す經論に就きて見る可し。

○道徳

三學、六度等を既に擧げたれば、茲には五戒、八戒、又は十惡十善などゝ云へる道徳に關はりしとを説く。

五戒は第一不殺生、第二不偷盜、第三不邪淫、第四不妄語、第五不飲酒の五事なり。優婆塞即俗人の受く可きものなり。前の四戒は實なれど、後の一戒は遮なり、遮と云ふは他の事と關係を起し來りて罪業の根本となるなり、或人酒を飲みしが爲に隣の鶏を盗み、興に乗じて他の妻と奸淫し、本夫に見いだされしが爲に其男を殺し、他人に問はれて知らず作さずと妄語せしと云ふ事あり、飲酒の爲に四戒の殺、盜、淫、妄語を犯せり。故に飲酒を遮戒とは云ふなり。智度論などには飲酒より生ずる過失三十五をあげ之を戒むると頗る嚴正なり。この戒を受くる時は威儀を修め一定の式あり、一戒を受くることに優婆塞は戒師に對し諾すと云ふを法とす。されど必ずしも一時に五戒を受く可しとは限らず、一戒或は二戒を受くるも妨なし。

八戒は前の五戒に三戒を加ふるなり、曰く不坐高大牀上、曰く不著香華瓔珞、不香油塗身、



不自歌舞作樂亦不往觀聽曰不過中食の三事なり四戒の實は論ずるを待たず人の必ず守る可きものなれを酒を飲まず衣裝を美にせず歌舞をも看す溫柔の衾枕に夢を結ばず一日に盞食の外は何物をも口にせず全く出家人なりこれを信士信女と云ふ。他に十善の戒ありと雖も八戒以上は僧律にして既に在家の戒にわらず然しながら在家の者も必ずしも受け難きに非ず。

十善とは不殺不盜不邪淫は身の善業なり不妄言兩言不惡口綺語は口の善業なり不嫉妬嗔恚憍慢邪見は意の善業なり以上をば十善戒法と云ふ。

十悪とは十善に反し殺生偷盜邪淫妄語惡口兩舌綺語慳貪嗔恚邪見の身口意の十悪なりこの十悪を犯さざらむが爲に十善の戒を受くるなれば五戒八戒よりも飛行の守りかた嚴正にして直接間接に犯さざるは更なり其想をもゆるさず。故に綺語邪見などに就きては頗る嚴正なること秋霜に觸るゝの感なきに非ず綺語を論ずるに言正しからざるは綺語なり語は實なりと雖も時に非ずして説くは綺語なり綺語は放逸を増し不善を長じ死して三途に落つる時は焔銅口を撃きて灌ぎ焔鐵其舌を焼くなど説きし所あり。邪見を論ずるにも大乘般若經を謗らば阿鼻地獄に墮せむ因果を誹謗し聖人なしと云ひ聖道に迷ふも亦た邪見なり邪見の罪は牛羊の中に生じて後に地獄に墮すなぞあり。

十善十惡五戒八戒又は君主に教しへ子女に説き父の恩母の恩師の恩に報ふ可きことをも教しふ其他夫婦主従友朋に對する務を教しふることあり。然しながら特に五戒八戒等の上に重きを置きしことは云ふまでもなし。法苑珠林の君臣忠孝などの條下を見れば父子には地より珠寶を積み天に至り其實を人に施すとも父母に供養するには及ばず或は又其父を左肩に置き其母を右肩に置き衣食其他百般の事に満足せしむるとも未だ恩を報するに足らず人は賢哲を纏せむよりも父母に佛法を教ふるをよしとす天地鬼神に事へむよりは親に孝を爲さむにはしかず。不孝を戒ましむるや昔一婦あり姑と善からず其夫に勸めて野外に姑を殺さしめむと計る夫愚にして其計に従ひ己の母を殺さむと爲しゝに天神の怒を發し霹靂一聲其不孝兒を殺す後に其婦は死して地獄に墮と云へる説あり又君臣篇には君たる者は大府庫大輔佐大軍衆はあらずとも十徳あらば臣民は歸仰す可し何をか十徳となす曰く種姓尊高曰く大自在曰く暴惡ならず曰く憤怒ること少しく曰く恩惠を施すに遲疑せず曰く正直の言を受く曰く輕々しき所作なく禮儀に順ふ曰く善法を布くことを深く思ひ曰く分別あり曰く放縱ならず特に佛法を滅せむが爲に法令を出し塔寺を破却し沙門を獄屋に投じ或は遠俗せしめ生命を斷つを以て墮獄の大罪と爲せり。尤も佛法僧の三寶を尊むを以て君臣の大徳と爲せり。



## ○僧侶

佛法僧の三寶の一なる僧伽は佛教の師なり。僧にあらざれば戒行を全くすること能ず、假令優婆塞、優婆夷に道德の秀でたる者ありて圓頂方袍の人とならず、涅槃成道を得し者ありとも實に有数の人のみ。阿羅漢果を得て大覺の位に達せむには、持戒に清淨なる縁を具へて、三學を全ふし六度を具足せずんばならず、佛教に於る僧侶社會、寺院制は必然の道と云ふ可し。宗派に由りて寺法或は僧位等には多少の違ひありと雖も、通常の僧と稱する者の必ず履む可き教を説かむ。

抑釋迦牟尼は初て教を説きし時、末世に見るが如き寺院或は僧侶を集め、一大宗教を建てむと考へしには非ざるが如し。全く婆羅門教の謬見を斥け平等一味の教を説き、四種の階級を破り、慈悲愛憐を以て衆生を導きたり。然れども之に従ふ徒弟は月日に増し或は洞窟に或は精舎に群を爲すに至れり、元より佛教は神と人の存在を認め、その神人の間に立ちて祈禱懺悔の爲に祭司を設くるが如き宗教に非ず、假令僧正僧都の位階ありとも僧侶社會の吏員たるに過ぎず、故に寺院は修道者の居る所なり、僧伽とは修道者にて恰も國民中に一種の修行者の世界を生せしが如き者なり。されば佛法歸依の國君貴族は山林田野を寄附して僧伽の爲に清淨の地を設けたるなり。古今の史乘に由りて佛教の力

る所を窺へば世に及ぶ所の感化は三寶中にて法よりも僧の勢力を以て其隆替を卜して可なり、歸依佛、歸依法、歸依僧とは云へども尤も社會に勢力の大なりしは僧なりき。印度に於て婆羅門と衝突せしも僧尼なり、支那に於て法を禁せし時も沙門を坑殺し或は僧尼となるを禁せしなり。我が國に於ても武將と争ひて戦ひしは山僧なり。羅馬教の如きは僧侶に似たる者多しと雖も嘗て佛教に於る僧尼の盛んなるに似たるとはなし、崇峻天皇の三十二年初めて僧官を設けられし時に既に寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人ありしと云ふ、試みに僧尼を分つ時は一寺に三十人餘にわたれり。況んや佛教の隆盛を極めし時は僧侶と寺院にて衣食する男女は夥多しき事なりしならむ、實に僧侶社會は四民の外に一世界を設けしあり、この社會は方外に立ちて他の四民の宗教道德の需要に應じ、婆羅門の如く血統に由れるには非ざれば、自然と社會に一種族の形を設けしは論ず可し。僧侶が俗姓を捨て、釋氏を名乗りしも理ありと云ふ可し。

沙門といふ勤息の意なり、心を息めて本源に達す可きなり、されば修行も決して容易なること非ず。僧は戒を守り、威儀を正し、方外に心を用ひ世間を棄て、富貴にも其意を動すことなく、親戚にも其想を累さず、道を弘め、徳を育み、故に其貴きこと寶玉に過ぎ、其高きこと人天に超ゆ、僧は國君父母六親にも禮拜せられ鬼神にも敬事せらるゝ程の貴重なる者



なり、自在遊諸方、不計其行止、城邑國土色、不能累其心、不蓄資生具、一往無欲定、往則無所求、唯無爲爲樂、言則定善言、不言則寂定、諸天阿修羅各各共相違、人間自共諍、相違亦如是、唯有出家者、於諸諍無諍、於一切衆生、放捨於刀杖、於財離財色、不解亦不荒遠離、一切惡、是故敬禮彼。この偈を讀みて沙門の如何に清淨なる可きやを知る可し。佛法僧と三寶に數ふるも恥しからず、無欲、無爲、惡言、寂定、無諍、離財色、不荒、不荒、と一切の惡を離れしなり。故に僧を敬はざれば後世に惡道に墮つと、墮獄の罪も重きにあらざる、實に僧は恭敬す可し、僧は清淨なる者なりと云へばなり。住家(俗人)は塵垢の處、出家は塵垢を除く、住家は憂悲惱處、出家は觀意處、住家は下賤處、出家は高勝處、住家は煩惱の大海、出家は大舟航なりとぞ。俗間にて御出家様と稱するも宜なりと云はむ。出家の功德、四天下の羅漢に供養するよりも三十三天に達する七寶の塔を起つるよりも増さりて尊とく、一日夜出家して梵行を修むれば六千六百六十歳三塗の苦を離るゝとかや。出家せむと欲する人は先づ頭髮を剃り、父母尊親に辭し、白衣(俗服)を脱ぎ、僧衣を着し、和尚の前に來り跪ぎ、歸依佛、歸依法、歸依僧の三歸戒を受け、袈裟を着す、この時僧戒を受くるなり、儀式は宗派によりて相違ありと雖も、僧戒を授け法を説き、袈裟を着し、佛像を禮拜するを以て常とす。又法服と云ふは袈裟なり、袈裟は降邪の衣或は救龍の服など、稱し佛塔を敬ふが如く爲す可しと云ふ。一旦出家

して袈裟を着くるや、上は君親愛敬の重を捨て、下は妻子官榮の好を割く、禮誦の善を以て自ら父母を資け、行道の福を以て國恩の重に報すと云ひ、袈裟は僧の威儀に欠く可からざる物なり。又伽藍は道場と名づけ或は寺と名づく、道場は無生、延の義、寺とは公延の意なり。この道場に往くに七法あり、一には信を生ず、二には禮拜す、三には法を聴く、四には心を至らす、五には義を思ふ、六には如説に修行す、七には大乘に廻向して多人を利安すなど、説きて僧の居る所は實に福田地なり。以上の得度式、法衣、寺院は僧侶の爲め、貴重す可き事なりと雖も、特に僧侶の身に欠く可からず必ず守る可きは齋戒なり。齋日、在家の爲なれど、第一脂粉華香を着けず、第二歌舞伎樂裝飾せず、第三高牀の上に臥さず、第四正午を過ぎて後に食せず、第五金銀珠玉を持たず、第六車牛馬に乗らず、第七兒子奴婢畜生を捶たず、第八布施して福を得しむ、第九器中のものを盡く飲食せず、第十女人と笑て坐席を共にすることなし、一定せし齋日は正月十四日より十七日に至り、四月八日より十五日に至り、七月一日より十六日に至り、九月十四日より十六日に至る。齋に五福あり、一に少病、二に身安穩、三に少慾、四に少睡、臥、五に得生天上と云ふ。僧は元より常齋と知る可し。道徳の部に説きしが如く、在家にてさへも五戒のみならず八戒を受くる者あり、況んや僧侶は身律宗の人ならずとも持戒は嚴正なる可きなり。この他僧侶の上につき説く可き



と多く、又佛像燃燈懸幡華香唄讚等の寺院内の莊嚴法式等に屬すると枚舉にいとまわらず、又僧侶の日々の勤行式は供養追善の典禮につきては時代に由り宗派によりて相違すること多し、茲には其一班をも掲ぐることをあたはず。

酒肉五辛につきては禁戒多しと雖も、茲には頌を載せて僧侶は如何に酒肉五辛を厭へるかを示さむ。頌に曰く

財色與酒、名爲三惑、 臣耽喪家、 君重亡國、 肉障大慈、 辛遮淨德、 懷道君子、 斯穢不忒、

禁戒を説明せむには僕を更ふるも盡さじ、腥臊を去りて身口を淨め、蔬菜を噉ひ、心神を澄す、僧侶の道たる可し。

○傳説

この章には神異的の事跡を集む、凡て感瑞星祥神變の如きは猥りに眞偽は判定し難しと雖も傳記中に入れむには妥當ならざるものもあれば傳説の中におさむ。

菩薩降胎の事

護明菩薩が摩耶夫人の胎に入らむとなし、時は春初の季にして天氣澄みわたり涼風吹き來り花卉麗はましく心身おのづから快爽を覺えし日なり、摩耶は淨飯王に對し妾は今夜

より八禁清淨の齋戒を受けむと思ふなり、王は其願を嘉し給ひぬ。夫人は其夜より八戒を受けて守りぬ、いはゆる不殺生、不偷盜、不婬嫉、不妄語、不飲酒、不兩舌、不惡口、不無義語なり、かく正見を持ち慈心を起したれば、淨飯王も恭敬の心を起し、摩耶を見ること母の如く姉妹の如く欲情を發さざりしとぞ、時に摩耶は靈夢を見たり、六牙の白象其顔朱色にて七肢あるが金を以て牙を裝ひ空に乗じて下り、夫人の右脇に入る、其時の快樂なりしこと嘗て覺えざりしとなりとぞ。護明菩薩は下生して太子悉達多となりしなり。

出胎の事

十月に滿つるに及び、摩耶夫人は數千の美人を從へて藍毘尼園に遊べり、夫人は無憂樹下に來り手を舉げて之を摘んとす時、護明菩薩の悉達多は漸くに母の右脇より出づ、其時樹下に七寶の七蓮蓮華あり、大なること車輪の如し、菩薩は蓮華の上に墮ち自ら行くこと七步、其右手を舉げて師子吼して曰く我は一切天人の中に於て最尊最勝無量生死今に於て盡せり、時に四天王は天繪を以て太子の身に接し寶机の上に置き、釋提桓因は寶蓋を執り大梵天王は白拂を持ちて左右に持立し、難陀龍王、優波難陀龍王は虚空より清淨の水を吐きて悉達多の身に灌ぐ、身は黄金色にて三十二相を具へ、大光明を放ち、普く三千大世界を照せり、天に伎樂あり歌唄讚頌、燒香散華し、天衣瓔珞を雨し、樹下に於ては四井八功



徳水を生じたりと云ふ。

怪力の事

悉達多の父王淨飯は其子の勇武なること、萬人に勝れたることを見て第二章を見る可し。大に悦び、白象に瓔珞を飾り太子を乗せて城内に入らしめむと爲せり。時に提婆は莊嚴せる白象を見て何人の爲に飾れるやと問ひ、悉達多が乗る料と聞き、妬心禁じ難し左手を以て象の鼻を執り右手を以て額をつく、さすがの大象も提婆に敵し難く、三匝して地に倒れて死せり。巨象地に伏して死したると故、俄には動すと能はず、衆人城中へ入り難き。時に難陀は城門に來り衆の難儀を見るに忍びず右手を以て象尾を牽き門を離るゝと七歩ばかりの所に移せり。時にまた悉達多も亦た城門に來り、提婆と難陀の怪力を聞き、こゝに難陀が象を他へ移せしを嘉せり。然れどこの巨象もし此處に在りて腐爛せしならば臭氣は堪え難かる可し、我はこの象を他へ棄てむと左手を以て象の屍を起し右手を以て高く擧げ城外へ擲らしに七重の塹を越して擲げ落され、地に大なる坑を生ず、衆人贊歎して此處を象墮坑と爲せり。

耶輸陀羅姫の前世の事

悉達太子の耶輸陀羅姫を娶らむと爲すに當り、妃は侍女を従がへて太子の前に出で來り

ぬ。新女の恥らふは人の常なれども其時耶輸陀羅姫は少しも愧る色なく、恰も舊相識に似て、太子に對ひ寶を與へ給へと願ふ、太子曰く汝の來ること遅く寶器は悉く施し盡しぬ、こゝに一印環ありと指より脱して與へたり。耶輸陀羅頗る喜ばずして還り去れり。後に太子は成道し佛陀と仰がれ給ひし時に、優陀夷は當時の事を語り出で、何故に妃は舊識の如く寶器を與へられしも喜ばざりしぞ、願くば其仔細を説かせ給へと請ふ、釋尊は優陀夷に告げて云く、昔時迦尸羅國波羅奈城に一王あり邪見にして不徳なりき。王子に少しの罪あり父王は怒りて其王妃と、もに王子を國外に追へり。王子は夫婦にて或所に寄寓し遊獵して生活す、或時鼯蟲を獲たり皮を剥ぎて鍋中に投じて煮る、熟するに及び汁盡きたり、王子は妃に水を汲み來れと云ひ、妃の水を汲みにゆきし後、王子は飢にたえず鍋中の肉を食しをはりぬ。妃歸へり來りて聞けば、鼯蟲忽然として復活し走り去れりと云ふ、妃は王子が飢に堪えずして食したるを察し、心中憤懣にたぬす、後に王子は國に歸るとを得て父の位を襲げり。其時衆寶を取りて妃に與へしに悦ばず、反て偈を説きて、最勝大王聽、往昔遊獵時、執箭或持刀、射殺野豨已、剥皮煮欲熟、遣我取水添、食肉不留殘、而誑我言走、と云へり。かく語りをはりて、釋尊は優陀夷に告ぐるやう、その王子は前世の我が身なり、その妃は前世の耶輸陀羅なり、故に猶今も喜ばざりき、釋尊が前世を説くや斯くの如きこと多し。



離俗の時の事

悉達多の出宗せむと爲す時、四天王及天帝釋は百十萬の衆を率ひ、樂を奏して四方より來り、虚空に充ち塞がり、宮中の美人一人も眠より覺むる者なし、太子は馬にまたがりて出づ、時に身より光明を放ち十方を照す、釋尊其時師子吼して過去諸佛出家の法の如し、我亦た然り、聲に應じて諸天神は乗る所の馬の足を捧げ、或は天蓋を執りて隨ふ、城門音せずして開く、つひに摩迦陀國を離れ、髮を截らむと爲し、七寶の刀を執り螺髻の髮を切りしに、天帝釋は空中にて太子の髻を捧げて墮さしめず、天の妙衣を以て接取したり。又淨髮師利刀を以て頭を剃るや、天帝釋は落つる所の一毛も地に墜さず、また天衣を以て之を承けたり。

草座の時の事

釋尊は尼連河に於て身を洗ひ草の上に座せり、時に帝釋天王は草刈人に化して草座の爲に四邊の青草を刈る、其草の綠色にして美艷なること孔雀王の頂の如し、手に觸るゝに滑澤あり、微細の迦尸衣に似たり、忽にして百の青雀あり、五百の孔雀あり、五百の白鷺、鴻鶴、白鴈、迦羅頻伽鳥、大牙の白象あり、五百の童子、童女、天子、天女等は五百の寶瓶に香華香水を盛れり、この寶瓶は人の持つことなけれども、自然に空中を行きたりとあり。

說法の時の事

釋尊は草座より成道成道より說法と數十年間神異の傳説擧ぐるに遑あらず、或ハ魔軍を叱咤し、或は天上に昇りて母摩耶の爲に說法し、天上より下界へ七寶の階欄を造り、諸天は前後左右を擁護し、又父淨飯王の爲に故國に歸る時に空中をゆき、或は頻婆沙羅王が惡太子阿闍世の爲に獄舎にありし時遙に釋尊を禮し、大目犍は吾が親友なり、慈悲を興して八戒を授け給へと請ひければ、目連は鷹隼の飛ぶが如くに日々王の所に來り、富樓那も亦た來り、說法す、又夫人韋提希も幽閉せられしかば、獄中より佛を禮せしに、釋尊は其心を知り、目連と阿難を左右に従がへ、紫金色の身を以て百寶蓮華の上に坐し、耆闍窟山より空中に現れて法を説きしなど云ふことあり。

成道の時の事

釋尊は樹下に坐し、明星出る時に豁然として大悟す、時に十方諸佛は袈裟を送れり、佛は合して之れを一つと爲して着せり、又自在の神力を以て菩提樹下を離れず、須彌の頂に昇り、帝釋殿に向ふ、帝釋は偈を説きて曰く

「七佛定光諸佛等、諸吉祥中最無上、彼佛曾來入此處、是故此地最吉祥。」

又佛の威神力に由り十方一切の諸佛の世界、諸四天下一一の閻浮提に皆な如來ありて菩



提樹下に坐し顯現れ給はざるとなくと云ふ事もあり。  
 涅槃の時の事  
 釋尊は金棺に入りし後に、やがて金剛臂を出し、阿難と問答し再び金棺に入りて語らず、或は大梵天王は梵衆を率ひて右面に立ち、釋提桓因は初利の諸天を將ひて左面に立ち、彌勒菩薩と十方諸方の諸神通の菩薩は前に當て立ち、釋尊は金棺の中に在りて金剛三昧に入り、碎身の舍利を以て娑婆界に於て眞法を轉せむと思ひし時に十方世界六道震動せり等の説あり、皆是れ經文に載せられたる事なり、小冊子に、他の傳説は掲載すること能はず、涅槃經、菩提處胎經、普曜經、佛本行經等に就て見る可し。

### 第六章 教派

印度には佛教ありと雖も、錫蘭島にカシミルカシミル北部佛教の山麓に餘喘を保つのみ、特に盛んなりと云ふ錫蘭も南部佛教の小乘佛教なれば我が國に大乘の教の明かなるが如きと同日の比に非ず。西藏國は喇嘛教なれば名は佛教なり宗義は眞言密宗なりと雖も頗る異義多く祈禱禁呪のみ主となすものゝ如し。  
 支那は衰へたりと雖も未だ天台、華嚴、禪宗、眞言、法相、禪土の諸宗は典型を存せり、特に喇嘛

教は愛親覺羅氏の尊崇する所なれば決して衰へしものに非ず、この宗派の僧は黄衣を着し、舊來の佛教徒は青衣を着し、服色を以て黄衣派又は青衣派と稱す。  
 朝鮮は李氏の世とならざりし以前、即王氏の代には佛教頗る盛んにして、藏經も高麗本と稱し、良好の藏本のありし程なりしが、李氏の朝となりてより佛教衰退し、現存するは教宗と稱せり、持戒清淨、誦經禮拜を以て佛因を種ゆるを、心宗と稱して晝夜不斷一心念佛を唱へ淨土に生るゝを期するものなりと云ふ。

緬甸、暹羅、安南等の諸國ハ錫蘭と同じく小乘佛教即南部佛教に屬するなり。  
 以上を以て考ふるに今日佛教の盛んなるは、北部佛教中の東部と稱する日本國の大乗諸派なり。先づ我が國の十二宗の事をあげて聊か讀者に方針を示さむ。この書は通佛教を紹介せむと欲するが故に各宗に就きては仔細に述べず。

#### 俱舍宗

本邦の宗祖は沙門智通、智達と爲す、二師は入唐して玄奘三藏より法相宗を稟くる時に俱舍をも學び、歸朝して弘通せしなり。故に俱舍宗の寺として立てしはなく、法相宗に屬して相承せり。時は齋明天皇の四年なり。宗義は小乘に屬し、阿毘達磨俱舍論を以て宗乘とす、俱舍論は佛滅後九百年の時に世親菩薩の造る所なり、小乘二十部中にては薩婆多部



にして有宗なり。  
支那陳の代に眞諦三藏の反譯ありしが、亡滅して唐の玄奘三藏再び譯して三十卷となせり。論を分ちて九品とす、

- 一 界品
- 二 根品
- 三 世間品
- 四 業品
- 五 隨眠品
- 六 賢聖品
- 七 智品
- 八 定品
- 九 破我品

この宗は空を談ずるに生空を明かにし法空は説かず、即五蘊より成りし我は空と觀ずれども法體は實有なりとす、故に我空法有宗と他宗より云ふなり。法相宗と共に傳來したれば和州奈良の寺院に於て盛んに弘通せられしなり。今日も俱舍論は佛家必讀の書ゆゑ重むせらるゝと雖も宗派としては全く見る可きものなし。

成實宗

成實宗も亦た俱舍宗と同じく、他の宗に附屬して傳來し、別に成實宗の寺と云ふはあらず。傳來の宗祖は高麗の沙門惠觀なり、來朝せしは推古天皇の三十三年にして三論宗を和州元興寺にて弘め、當時より三論宗に屬して傳へられたり。宗義は小乘にある可きものなれども、殆んど大乘に説き及ぼしたれば大小乗の孰れに入る可きやと定め難たしと云ふ。宗乘は成實論なり、此論は佛滅後九百年薩婆陀宗の訶梨跋摩の修る所なり。翻譯は羅什

三藏なり、十六卷に分ち二百二品あり。此宗は前にも述べし如く我空法有の俱舍より進みて我法ともに空と談ず、假令ば俱舍は瓶中に水なしとのみ説くも、成實は瓶體さへも有に非すと談ずるなり、故に二空を明かに爲すなり。

律宗

律宗は大乘なりとも、小乘なりとも判ず、所判不同なりと知る可し。傳來せしは孝謙天皇六年唐僧鑑眞なり、我が國の宗祖と仰ぐ可し、戒律は夙に百濟より受けたれども全く完備せず、鑑眞和尚の來朝より、東大寺藥師寺觀音寺等に戒壇を建てたり。當時、孝謙、聖武の兩帝より以下百官に戒を受けし者四百餘人ありしと云ふ。後に戒律全く跡を斷ちしが如き時ありしが、鳥羽天皇の時に中川の實範上人奮て回復し、律宗と云ふ寺はあらずと雖も今日に至るまで諸宗に傳戒受律あり。律の佛滅後直ちに結集せられてより次第に分れ來り、終に二十部に至れり、然れども日本に傳はりしは曇無德部四分律宗なり。戒律の止惡、修善の二門に大別す可しと雖も、之を分てば二百五十戒あり、僧戒を具足戒と稱す。戒律は五戒、八戒、十戒等あれど皆な具足戒より抽きて比丘比丘尼、沙彌沙彌尼、優婆夷、優婆塞に授け、漸を追ひて戒行の具足することを求むるなり。今日の僧侶社界は戒律を殆んど棄て、顧みざるが如き觀あり、宜なる哉一二の戒相を守る人あれば燦然として光輝あ



るを覺ゆるなり。宗乘は四分律六十卷なり。

法相宗

法相宗は四傳して我が邦に弘まり平安朝の前は一時盛んに弘通せり。第一傳は孝徳天皇の四年元興寺の沙門道昭入唐して玄奘三藏より受け第二傳は齊明天皇の四年智通智達ちたつの兩和尚入唐して玄奘より再び學び俱舍宗と共に傳來す筑前國觀音寺に住して弘通せり。法相宗の傳來の祖は沙門道昭と爲す可し。此教は無著菩薩より世親菩薩せしんに傳はり玄奘三藏が渡天せし時に戒賢論師より相承せり宗乘は六經十一論なり六經は華嚴深密如來出現功德莊嚴阿毘達磨楞伽厚嚴りやうなり十一論は瑜伽顯揚莊嚴集量攝論十地分別瑜伽辨中邊二十唯識觀所緣雜集なり宗義は唯識宗とも名づくる如く特に唯識を明かになす。權大乘に入る可きものと雖も性相を説くこと義理分明なれば何の宗を論せず必ず學ぶなり。

三論宗

此宗の傳來せしは推古天皇の二十三年に高麗僧惠灌僧正が來朝して弘通せしに起る俱舍成實などと同じく奈良朝の頃に隆盛むなりし古き宗派なれば第一傳は惠灌なれど其後に第二第三と傳來して一時廣く弘通せられしなり。宗乘は三部論なり龍樹菩薩の中

論提婆菩薩の百論龍樹菩薩の十二門論なり宗義は三論の破邪顯正を旨とし大乘の深義を説す。此宗の祖師は遠く文殊師利菩薩と爲せども弘通せしは龍樹龍智提婆の三菩薩りゆうじゆあり支那へは羅什三藏之を傳へしのみならず大に經論を反譯せり。この宗も權大乘に入る可きものとす。

天台宗

天台宗は實大乘と稱し和漢にて尊崇する大宗派なり傳來せしは傳教大師なれど我が國の天台の教義は支那よりも進みしものなり。支那にては天台山の智者大師我が國にては傳教大師を祖師となすなり。法相三論等の宗派も一時は盛むなりしと雖も日本佛教史上に廣大なる觀を呈するは天台と眞言の二宗派なり宗乘は法華經を以て本經宗骨となし大智度論涅槃經般若經を以て指南扶疏となせり。天台の三大部と稱する書は止觀しくわん玄義文句なり。宗祖は智者大師されども智者を嗣ぎし章安大師に由りてこの宗の基礎は立ちしなりとぞ。宗義には一心三觀教觀二門四教五時等の事あり一心三觀とは一念三千と云ふに同じく空假中の三觀も一心に具ふるの理を云ふなり空と觀じ假と觀じ中と觀するも必竟は一心のみなればなり。又教觀の教は教相をさし觀は觀心をさす教相は經卷に由り自己の力を以て知る可しと雖も觀心は其人に智識と稱す先達の師なり由



りて口決を受くるを可と爲すとぞ。三大部は元より此宗の寶典なれど、先づ四書と稱する法界次第、教儀、戒疏、小止觀を讀まば教相も觀心も斯るものなりと云ふとを知り得べし。かの傳教大師が叡山を開きしよりこのかた王室の崇尊一ト方ならず歴史上に種々の事ありしは人の知る所なり。

華嚴宗

華嚴は法相などと同じく、奈良朝の頃より盛むに弘通せられたり。其本寺は東大寺なれば隆盛を極めしことは推し計りても知る可し。我が國に傳來せしは天平七年唐僧道璿なれど後に十二年に至り新羅の僧審祥法師この宗の章疏を講説し、聖武天皇の崇敬なさせ給ひしより大に興りしなり。宗乘は華嚴經なり、華嚴經六十卷あり、祖師は馬鳴より龍樹に傳はりしなれども香象大師を以て高祖となせり。此宗は釋尊一代の法門を五教十宗と立つるなり、五教とは小乘教、大乘教、始教、大乘終教、頓教、圓教なり。十宗とは我法俱有宗、法有我無宗、法無去來宗、現通假實宗、俗妄眞實宗、諸法俱名宗、一切皆空宗、眞德不空宗、相想俱絕宗、圓明具德宗なり。衆經上首、諸宗尊主なりなど古徳も讚歎する經宗なり。

眞言宗

傳教大師は叡山を開き、弘法大師は高野を開き、二大師の鴻業は中世を照して衆生を濟度

せり。眞言宗は如來滅後七百年の時に龍猛菩薩が南天の鐵塔を開き、金剛薩埵に遇ひ、受職灌頂せしより廣く世に流傳し、支那にも傳來し、延暦年間弘法大師が入唐せし時に惠果阿闍梨より傳へ來りしなり。宗乘は大日經、金剛頂經、蘇悉地經なり。大日如來を教主と立て、顯教は釋迦の説、密教は大日の説と差別すれども實義を得れば二佛無二と説き、一切の諸法は皆な是れ大日眞如は我身佛法は吾身なりと教しふ。智の金剛界、理の胎藏界この諸法を兩界兩部の大日と名づけ、一切衆生は毘盧遮那ありとす。また四種の曼荼羅あり、曼荼羅とは適意或は具足の意、大曼荼羅、三昧曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅と云ふ皆な具足せし相を表はせしとなり。宗義は十住心と云ふとを説き、大小顯密一切の諸教を窮盡せしものなりと云ふ、十住心とは世間乘の三、出世間乘の七あり、出世間にも聲聞、緣覺の小乘あり、唯識三論、天台華嚴の大乗あり、最尊最極の實教と云ふは金剛乘教なり、秘密莊嚴心なり、是れを即身成佛、大覺速證、毘盧覺王の位に登りしなりと云ふ。密教と稱し他の佛教の宗派よりは窺ひ知り難きと多し。古義、新義の分派あり、古義は高野山なり、新義は覺鑿の興せしものにして根來寺に於て一時隆盛を極めたり。

淨土宗

此宗は圓光大師(法然)を以て宗祖とす、もとより支那より淵源し來り、善導大師の流を汲む



と雖も、本邦にて一大宗派となりしは圓光大師を以て祖となす、宗乘は淨土三部經と稱する無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經及び淨土往生論を以て旨とす。宗義は聖道門と淨土門の二途に諸教を分ち、聖道門とは大小顯密の諸教の次第に凡より聖に進む難行道をさし、淨土門とは阿彌陀佛の本願にすがり念佛の一行を修し淨土に往生する易行道を教しふ。圓光大師の開宗は高倉天皇の承安四年なりき。派別ありと雖も京都知恩院を本所となし今もなほ盛んなる宗派なり。

眞宗

眞宗とは淨土眞宗のことなり。既に圓光大師の開宗せし淨土宗のあるに更に淨土を以て宗の名とす其故は宗義の上より分ちしなり。淨土宗にては念佛の往生に種々の説ありて、往生淨土にも種々の行業を修して回向して彌陀の淨土にゆくとか、或は阿彌陀の佛名を唱へて其稱名の功に由りて淨土にゆくとか、其説も様々あり。眞宗にては斯る事は皆な方便なりとし唯だ偏に阿彌陀佛の本願他力に乘じ、全く自力を抛つを以て眞實となす、故に眞の一字を加へしなりとぞ。されど淨土宗より更に一新宗派を建てしには非ず、旨として在家の衆生を濟度せむが爲より分れしなり。されば宗乘も淨土の三部經なり、特に無量壽經を尊み彌陀の四十八願中の第十八の願を以て此宗の所依と爲す。(十方

衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺の文なり、又見眞大師の著し、教行信證文類あり、此宗の法義は此書中にあり。教相を眞俗の二諦に分ち、眞諦は彌陀の願力を信じ淨土の往生を願ふことなり。俗諦は世間の法に順ひ人倫の道を踐むをさす。肉食妻帯して俗家と同じきは他の宗派に見ざる所なり、兎に角に印度支那日本の三國に於て一種特色ある一大宗なり、其勢力のある事も亦た他宗に超ゆ。宗祖は見眞大師即親鸞上人なり、同宗は後堀川天皇の元仁元年に常陸の稻田より起りしなり。中興の祖を蓮如上人と云ふ。この宗にも十派の別ありと雖も重なるは本願寺派と大谷派なり。血統世襲の法主あるも此宗の特色と云ふ可し。

禪宗

禪宗即佛心宗は三派に分れたり。臨濟、曹洞、黃蘗の三派なり。此宗は他宗と異なりて宗乘と特更に指す可き經論なし、不立文字、直指人心、見性成佛の法なれば、以心傳心、を以て相承するなり、然れども正法眼藏、碧岩集、或は諸語錄ありて指南の書と爲す可し。宗義は大迦葉が釋尊の拈華微笑によりて正法眼藏、涅槃妙心を得しより次第に傳はり來りて第二十八祖達磨大師に至る、達磨は梁武帝の時に支那に來りて弘通せり、後に南北二派に分れ、再び分れて曹洞、雲門、法眼、臨濟、僞仰の五派となり、更に楊岐、黃龍の二派を生じ合せて七派



ありと雖も我が國にては初に書せし三派あるのみ、黃蘗は臨濟に屬せしものゆゑ、實は二派あるのみ。傳來は天台宗の傳はりしと共に夙くより北嶺にはありたれど天台禪と稱して台宗の兼學なりき。故に建仁元年榮西禪師が建仁寺にて臨濟宗を開き、後堀河天皇の時に道元禪師が永平寺にて曹洞宗を弘め、後光明天皇の代に明の黃蘗山の隱元禪師は宇治の萬福寺にて弘められたれば、この三禪師を以て我が國の宗祖と爲す可し。此宗と淨土宗、眞宗、日蓮宗は中世以後隆盛を極め今も頗る盛むなるものなり。

日蓮宗

日蓮宗といふ宗祖の名を以て稱せしなり、又法華經を以て本宗所依の經となせば法華宗とも稱す。宗祖は日蓮上人なり、建長五年法華經に由りて此宗を開く。宗乘は法華經なり、宗義は南無妙法蓮華經の題目を唱へて本尊と念じ、身を以て戒壇となす也。題目とは妙法蓮華經が無量の功德を具ふるれば口に其名を唱ふるなり、本尊は妙法の五字なり、故に大曼荼羅には中央に題目の七字を書し左右に佛菩薩より俄鬼地獄に至るまでの十界を表したる圖を以て法界の萬法を攝したるものとす。戒壇とは妙法の五字を受持することとなり、身口意ともに妙法の五字に住すると思へばよし、之を本門壽量の三大秘法とは云ふなり。此宗は日蓮上人が法眼を開きて始めて弘通せしものなれば歴史的に傳説の由

る可きなし、然れど此宗の傳ふる所に由れば釋迦牟尼佛を教主となし、次に天台大師、傳教大師、終に日蓮大菩薩となす。立正安國論を以て天下に法説を唱て鎌倉の代より勢力を興し來りしは人の能く知る所なり。身延山久遠寺を以て本山とす。本末ともに八派あり。

普化宗

此宗は臨濟宗の中に入る可きものなれど、普化宗と稱し一派を爲したれば茲に掲ぐ。傳來の宗祖は永仁元年法燈國師(覺心)宋より歸朝して開く所なり。覺心は宋の普化禪師より傳へ來りしなり。この宗もとより禪の一派なれば宗乘と稱す可き經論なし、宗義は笛聲に禪心を寓して大悟せしむるなり、普化禪師は遊歩せし時に風吹き來りて携ふる竹杖に觸れて聲あり、一旦豁然として悟る所ありてより笛を吹きて佛事を修し、笛を吹て禪機を悟る、尤も特色ある宗派と云ふ可し。奏調の妙は理致相應し萬法皆空に歸し假空を打却し眞空に入らしむるものなり。暮露或は虛無僧と稱したるは此宗の僧なりき。

融通念佛宗

此宗の宗義は一切の功德と融通して彌陀の名號の中に攝在するの義あり、故に往生成佛は六字の名號を唱ふるに在りとす。淨土宗の念佛とは少しく異なり、聲明梵唄に由りて



明々然と稱名すること實に心耳を澄ますものなり。宗祖が此宗を開きしも下根の衆生を濟度せむが爲なれば、信徒に望む所も頗る容易なり、本宗に入り日課の念佛を唱へむと心を決せし時が自他融通の願行を成就せりと安心し、其名を帳簿に記入し日課の稱名を修む、百萬遍或は千萬遍と稱すれど要は念々相續して念佛することなり。宗乘は華嚴經、法華經なれど旁に淨土三部經を用ふ。宗祖は良忍上人と云ふ、後鳥羽天皇の永久五年より開宗す。上人は定に入りて阿彌陀佛より面のあたり偈を授けられしより此宗を開立せしなりと云ふ、其偈は、十界一念融通念佛億百萬遍功德圓滿と云へるなり。上人は頗る音曲に達したりとぞ

時宗

時宗も亦た是れ念佛宗の一流なり。宗祖は一遍上人あり、淨土專念の教に心を傾け建治二年より此宗を開く。時宗とは正しくは六時往生宗と云ふ義なり、晝夜六時に善導大師の往生禮讃を修して其業因と爲すが爲なり。宗乘は三部經中の阿彌陀經を以て第一とす。宗義は彌陀の本願を正行とし、晝夜六時の往生禮讃を助行とす。故に念佛を勧め稱名を以て淨土往生の正因となす、信不信を問はず淨不淨を問はず一切衆生の往生は南無阿彌陀佛と決定するなりと教しふ。此宗の通則ハ住職たらむと爲す者は諸國を遍歴し、

現住の入寂するに及びて寺に歸り其後を嗣ぐなり、住職を遊行上人と稱す、又他阿彌陀佛と號す、俗に上人を遊行様と呼び、寺を遊行寺と云ふ、即ち相州藤澤の清淨光寺これなり。

以上を日本の各宗と爲す、俱舍、成實、三論は今日は一宗として別に寺を建てて所謂附屬宗なり。華嚴は衰微して他に屬せしが寶永四年より再興し明治十九年に至り本寺を再興し末寺を統轄し一宗となれり。律は諸宗の傳戒受律あり、別に宗は立てず。普化宗は明治四年に廢せられたり。故に本朝の十二宗と稱するは

- 法相宗。華嚴宗。天台宗。眞言宗。淨土宗。臨濟宗。曹洞宗。黃蘗宗。眞宗。日蓮宗。時宗。融通念佛宗。

なり。又淨土宗の祖法然上人、圓光大師、眞宗の祖の親鸞上人、見眞大師、日蓮宗の祖の日蓮上人、時宗の祖の一遍上人、融通念佛宗の良忍上人、皆な台宗に學び一見地を開きて開宗せし人々なり。台教の我が佛界に力あるや大なりと言ふ可し。

若し時代を以て論すれば

第一時代

法相華嚴兩宗

聖德太子の以後、最澄、空海の世に出づるまでと爲す可し。高僧には、道昭、義淵、玄昉、泰澄、良



辯善珠等あり。寺には四天王寺、法隆寺、善光寺、園城寺、當麻寺、興福寺、東大寺、長谷寺、園分寺、西大寺、神護寺、東寺、鞍馬寺、清水寺等成る。奈良朝の代なり。

第二時代

天台眞言兩宗

桓武天皇の以後法然、親鸞、日蓮、榮西等の世に出づるまでと爲す可し。高僧には最澄、空海、守敏、空也、法然、性空、源信、實範、良忍、覺驥、西行、文覺等あり。寺には延暦寺、高野、金剛峰寺、泉涌寺、仁和寺、平等院、根來寺等成る。平安朝の代なり。

第三時代

淨土禪法華四宗

後鳥羽天皇の以後天海、源譽、澤庵等の世に出づるまでとす。高僧には法然、親鸞、日蓮、榮西、俊芿、明惠、聖光、證空、道元、一暹、圓爾、寂尊、無關、覺心、寧一、山虎、關兼好、疎石、西譽、關山、宗峯、授翁、一休、蓮如等あり。寺には建仁寺、建長寺、永平寺、東福寺、南禪寺、大徳寺、妙心寺、天龍寺、増上寺、清淨光寺、圓覺寺等成る。鎌倉室町の代なり。

第四時代

各宗

後水尾天皇の以後より明治の王政維新に至る。高僧には天海、源譽、澤庵、隱元、元政、鐵眼、公慶、運徹、契沖、鳳潭、祐天、白隱、普寂、慈雲、普門等あり。寺は方廣寺、本願寺、高臺寺、寛永寺、東海寺、萬福寺、護國寺、知恩院、祐天寺等成る。江戸の代なり。

以上の時代は假に設けしものなれども、各宗の盛衰は少しく窺ふに足る可きか、大別すれば法相、華嚴、天台眞言は王朝に隆盛を極め、淨土禪法華は中世武士の世に榮え、近世封建の代となりては各宗皆な勢威ありたれど、佛敎の最も全盛なりしは鎌倉までと爲す可きか、室町の代は乱世なり、江戸の代には昇平の極反つて佛敎徒の敗徳も少なからざればあり。今や我が國は世界の新舞臺に登りたれば世は刮目して後日の隆替を窺ふなり。次に印度支那の各宗を少しく掲載せむ。

印度

印度は佛滅後第三の結集に至るまでも律藏より於ては分れなきにあらざれど、阿育王の時滅後百年に大天が異義を唱ふるまでは派別なかりき。

—

上座部

舊義を保守する者、万物皆有の義を取るなり。

—

大衆部

新義を主張する者、万法皆空の義を取るあり。

この大衆部再び分れて九派となり、上座部も分れて十一派となり、合せて二十部あり。大衆部一説部、説出世部、鷄胤部、多聞部、説假部、制多山部、西山住部、北山住部、(大衆部の



分派

說一切有部、雪山部、犢子部、法上部、賢胃部、正量部、寒林山部、化地部、法藏部、飲光部、經量部、(上座部の分派)

滅後六百年より馬鳴菩薩起信論を造り大乘を興す、菩薩は大乘中興の祖なり。馬鳴前後の論師と後世大乘宗派の分れし源由を列ねれば凡そ次の如し。

迦多衍尼子 有部宗之鼻祖 毗曇宗(滅後三百年)

曇無德 四分律之著者 律宗

馬鳴論師 附法藏第十二祖 華嚴宗(滅後六百年)

龍樹論師 附法藏第十四祖 華嚴、天台、三論、真言宗(滅後七百年) 各宗等

提婆論師 三論宗(龍樹の法弟)

龍智論師 真言宗

達磨和尚 附法藏第二十八祖 禪宗

無着論師 法相、地論、攝論、耶麻起

世親論師 附法藏第三十一祖 法相、地論、攝論、淨土等

師子鎧 成實宗(滅後九百年)

佛滅後一千百年に護法、清辨の二論師あり、護法は大乘有宗を唱へ、清辨は大乘空宗を説けり、茲に及びて大乘に二派を生ぜり曰く

中觀宗(空宗) 瑜伽宗(有宗)

印度の大乘は唯だ以上の兩派あるのみなりと云ふ。

滅後千五百年より後は唐の時代なり、次第に衰退し、二千年に至りては回教徒の亂入するあり、元の帖木兒の爲に犯され、終に蒙古人の朝廷となり、一ツは北方の僻地に遷り、一ツは南方の孤島より安南、暹羅等に移つるに至れり、終に北部、南部の佛教と稱することとなりぬ。近世は歐洲人の政權を占め、婆羅門教、火教、回教、基督教等流行し、佛教は殆んど餘喘を存するのみなり。

支那は後漢の明帝の時に佛教始て支那に入る、即佛滅後千〇十六年なり。(秦、前漢の代に既に佛教は入りしなれど明帝以後を以て普通の説とす)有名の迦葉摩騰、竺法蘭の二師洛陽に來り經卷の反譯ありたれど小乘經なりき。

爾來後漢ハ三國となり、三國は西晋となり、五胡の亂となり、東晋となるに及びて佛教ます、支那に勢威あり、この間に大乘經中二三の反譯あり、特に無量壽經は印度僧康僧鎧の



手によりて魏の嘉平四年に洛陽にて譯せられたり。十二遊經、正法華經等の反譯もなれり。東晋にハ惠遠、法顯、鳩摩羅什等あり、或は蓮社を結び、或は渡天し、或は反譯し大乘佛教は當時より弘通せしなり、羅什は印度僧なり其宗は龍樹の空宗なれど、三論宗及成實宗をも弘めたり。後に法顯が五天を歴遊して歸るあり、蔚然として佛教隆盛の運に及びぬ。晋亡びて宋となり、曇無讖三藏は涅槃經を譯し涅槃宗を開く。當時の印度僧は迦濕彌羅國より來りしなり。梁の武帝に至りて愈々法運は隆盛に赴きぬ。地論宗興れり。終に梁の大通元年に南天竺より達磨大師は來れり、禪宗是より興る。東魏に曇鸞あり、北齊には惠文あり、印度よりは三藏真諦の來るありて起信論の譯なる天台、華嚴の諸宗興らむとす。又攝論宗あり、俱舍宗あり、陳の大建七年智顛天台山に入る天台宗を開く。隋に至りて佛教ますます盛んなり唐に至りて全盛を極む。貞觀七年太宗の世玄奘三藏渡天して前代の譯經を校訂す。唐に及びて律宗も亦た大に振ふ。淨土宗も興る、法相宗も起る、華嚴宗も興る開元年間玄宗印度僧三人あり、金剛智三藏、善無畏三藏、不空三藏と云ふ、この三師より眞言宗は弘通せられたり。禪宗も亦た江西に馬祖、湖南に石頭ありて盛んに振ふ。天台には荆溪ありて中興の法威轉た盛んなり。唐は初盛晩の三時期ともに佛法最盛の代なりき。五代に至りて衰運に赴きぬ。

五代梁の貞明二年に布袋和尚寂す、周の顯德四年に文益寂すこの人より法眼宗は興れり。宋に至りて佛法再興す、印度の交通や頻りになり梵僧の來ると多し、開寶四年大藏經の刊行あり。佛印あり尤も法徳の聞え高し、朝野の名士も皆な敬崇せり東坡も交遊せしと云ふ、南宋に至りては圓悟禪師あり碧巖集を著す、南北宗は唐に嗣いて佛教支那に隆むなり。元となりては耶律楚材佛法を信じ禪理に通じ、禪師にハ萬松あり海雲ありき。又發思入あり、發思入は喇嘛宗の人なりき。元亡び明となり、法運再び振ふ、神宗の代に明本大藏を刻す。清に及びて喇嘛教のみ朝家の保護ありと雖も舊來の諸宗ハ捨て、顧みず。以上の變遷を考ふれば支那の宗派は

天台、華嚴、禪宗、眞言、法相、淨土

の六宗にして加ふるに眞言密宗なる喇嘛教あり。唐朝以前の三論、成實、地論、攝論、涅槃、律、法眼等は他宗に附屬せり。特に盛むなりしは禪宗、天台等なりき。高僧名士は枚舉にいとまなしと雖も其二三をわぐれば高僧には摩騰、法蘭、梵僧、惠遠、法顯、鳩摩羅什、梵達、摩曇、慧智、顛、惠可、玄奘、道綽、善導、賢首、善無畏、梵僧、金剛智、全、不空、全、荆溪、百丈、烏窠、圭峰、僞山、洞山、雪峰、布袋、孤山、祖印、佛印、圓悟、發思入等なり。名士には



王羲之、顔真卿、杜鴻漸、王摩詰、柳子厚、白樂天、蘇老泉、蘇東坡、歐陽修、張商英、耶律楚材、宋濂等あり。

以上和漢の宗派を見れば、支那日本ともに天台、淨土、禪宗を尤も盛んなるものと爲す可し、眞言は和漢ともに一方に雄視して遜色なし、眞宗、日蓮宗は我が國にて開宗せしもの、特に眞宗は此間に存じて特色あるを見る。

### 第七章 傳道

傳道は法施の大なるものなれば、古來佛教徒の斯に力を用ふると少なからず。佛滅後直ちに經律論の三藏は結集せられ、佛教は婆羅門教を壓し、時に浮沈ありしと雖も歲月に愈々隆盛の運に赴きたり。滅後百年かの阿育王に至り、佛敎大に振ひ、王は摩訶迦陀國より傳道使を四方に派遣して法を異域にまで弘通せり。近世に至り、デルヒ、アラハバドの石柱、或はカプル、ダギリの巖石等に於て刻せし聖傳は皆なこれ王のなさしめたる所なり、實に王の勢名は西方ウオルガ河より東方日本に至り、北方は蒙古、西比利亞より南方錫蘭、暹羅に至る、大王の名はシャアレマン、或はシーザルよりも大且つ廣しと云ふ可きなり。元より當時の事なれば小乗敎なりと雖も、佛陀あるを世に知らしめたるは全く大王の力と云ふ

可きなり。其後凡三百年に健駄羅國に迦賦色迦王あり、今のブンジャブの北方に在りし國なり、王は廣大なる領地を有せり、カプルよりヒンヅクシに至り、ヤルカンド、コーカンの全地、カシミル、ラダーグ、中央ヒマラヤを貫き、ガンジスの上方よりアグラに達し、パンジャブを領し、阿育王の以後、モゴル朝の前に未だ王の如き版圖を有せし者はあらず。王は脇尊者と計り、第四の結集を爲せり。この結集は南方佛教徒は知らざる事なれど、未だ大乘の興らざる時なれば、有部宗の三藏のみなりき。王は銅鑿を造りて之に鏤寫せり。かくカシミル、チポール等の諸國は北東の地なれば、夙くより傳はりたれど、南部の錫蘭諸地の如きは他より開化の遅き所なれば、其弘通も從がつて遅かりき。錫蘭島に於て傳道上尤も力ありしはブダゴシヤ、阿育王の後凡六百年なり。然れど初て傳道せしは阿育王の時なりき。當時の傳敎使をマヒンダと稱せり。緬甸、暹羅は錫蘭より傳道し、緬甸は阿育王の傳道より凡六百年の後に、暹羅は凡八百年の後に弘通せられたり、佛滅后凡千年の後に知る可し。爪哇、スマトラは其後に傳へたるものと見ゆれど、正確なる證據を求め難しと云ふ。支那傳道は敎派の條下に記載せし如く、後漢明帝の代なり、西歷六十二年、其道路はヒマラヤ山麓の北面を巡り、東トルコスタンを横ぎりて、遠く支那に入りしものと覺ゆ。支那傳道は印度より傳へしのみならず、支那よりも渡天して道を求めしなり、特に名あるは



迦葉摩騰竺法蘭鳩摩羅什法顯三藏達摩真諦三藏玄奘義淨不空善無畏金剛智道圓建  
 益等なりこの他にも梵僧支那僧の來るあり往くあり或は往きて經卷佛像を求め或は來  
 りて經論を反譯し法を弘通し後漢より五代の後趙宋の初開寶四年建益が西竺より歸り  
 し時に至るまでを以て彼我の往復は絶たず此後も梵僧の支那に來る有りと雖も傳道と  
 して見る可きは宋の初を以て限と爲す可きか。法顯玄奘の渡天の記録の如きは以て印  
 度史の一斑を窺ふに足り佛教が印度に於ての盛衰を知る可き良書なり。玄奘の西域記  
 義淨の寄飯傳は印度を觀るの雙眼鏡と稱す。西域記に由れば當時カピサと稱する王あ  
 りアフガニスタンの十ヶ國を領し頗る熱心なる佛教信者なりしとぞ然れど迦賊尸迦王  
 の建てし大寺も頽敗し舍衛城も迦毗羅伐率堵も墟跡となりベナールに於ては僅に四ヶ  
 寺のみあり既に婆羅門の勢力は回復され佛教は衰運に赴しなり。又朝鮮日本へは支那  
 より傳へられたるあり日本よりは渡天の僧はなかりしが入唐して道を受け又來朝歸化  
 せし梵僧支那僧ありて盛んに弘通せられしなり。欽明天皇の時に百濟國より佛律經卷  
 を送り來りしを始として後光明天皇の代に明の隱元が歸化せしを以て終りと爲す可し。  
 然れど隱元は臨濟一派の禪僧なれば新に道を傳へしに非ず我が國に佛教の弘通せしは  
 支那より傳へしよりも寧ろわが高僧の彼に往きて求めしものなり。これも鎌倉の代に

榮西等が入宋して法を受けしを以て終りとす。兩國の高僧は惠觀道昭智通智達義淵玄  
 昉道瓊婆羅門僧正菩提鑑真最澄空海圓仁齋然榮西道元圓爾等とす。日本に於ては宋に  
 至るまで入宋の僧あり歸化の僧ありしなり。近くは印度より日本に來る僧ありと雖も  
 錫蘭等の小乗佛教なれば殆んど我が國には求むる所なし支那は喇嘛教の外は衰たれば  
 往きて受くるよりは我より彼に傳ふ可き勢あり朝鮮緬甸安南等は論ずるに足らず今は  
 西漸して日本より支那印度に傳道す可きのみなり。

錫蘭島の菩提樹はマヒンダが傳道せし時サンガシタ尼が携へ來りし一枝より長せしも  
 のなりと傳ふるなりこの樹は釋尊成道の時に其樹下に坐し給ひたる聖樹の記念なりサ  
 ーエメルソン、テンネント氏の説には基督紀元前二百八十八年に植ゑられたれば二千百  
 四十七年を歴たる老樹なりと定めたり世界にはセネガルのバラバブ樹タスマニヤのニ  
 ーカリプタス等の老樹ありて千年より四千年の間に算へらるゝと雖も確然たる證據な  
 しこの菩提樹の如きは歴史と共に傳へられたる者あれば信を置くに足ると云ふ世界に  
 稀有の老樹と云ふ可しこの老樹は生存して五天に再び佛教の盛むなるを見るや否や。  
 佛日は東天より再び昇るや否や。



# 基督教

## 第一章 惣論

基督教の起りし猶太國は、印度支那の如き大國に非ず。往古は以色列國と稱し今はパレスチナと云ふ。(土耳其領)南北の長サ僅に百三十九英里、東西の幅は廣き所にて四十英里なり。斯かる小邦なりと雖も、地形は様々に分れ北境のレバノン山は四季雪を戴き、東邊のヨルダン河の谷間は熱帶地の暑氣なり、西方は地中海に臨みて頗る溫和の季候なりとぞ。全く峯巒平野湖川と小部分の中に入り組みたるが爲なり。故に風景、動植等は殆んど寒熱兩帶の地に在るものを具へたり。太古はカナン人種の住したる所なりしが、地もカナンと稱せり、フェニシヤ人種と同じくハムの裔なり。後に以色列人が移り住し地を十二に分ち神政制度を建て、一國民となりしなり。

抑以色列人は其祖をアブラハムと稱し、カルデア國のウルに住しシエムの裔なりき。アブラハム思ふ所あり、其其家族と牛羊を率ひて水草を追ひカナンの地に來り天幕裡に住し牛羊を牧せり(凡三千七百年前)。齡百七十五にて死す。其子イザクも牧羊者なり、其子



ヤコブも牧羊者にして子十二人あり、第十一子ヨセフ其諸兄の爲にエジプトに奴となりしが、國王に知られ終に大臣の位に進み、祭司ボテバルの女を妻とし、實權は攝政の地に到り、時に大飢饉あり父ヨセフ兄弟十一人はヨセフの爲にエジプト國のゴセンに住するを得て子孫ゴセンの地に於て増殖せり、ヤコブの又の名を以色列と稱せしが故に自ら以色列人と云ふと雖も、他よりは之をヘブル人と稱せり(ヘブルとは對岸の意にしてユーフレイト河の東西に分れ住せしより此名ありとぞ)この人種はセミチツク族に屬し、其國語はカナン人フェニシア人と同じく中央語なり、セミチツク語を分つて三とす曰く北方アラマイク語、南方アラビヤ語、中央ヘブル語あり、カルデアヤシリヤはアラマイクに屬し、エチオピアはアラビヤに屬す、アブラハムの後に尤も名あるはモーセなり(凡三千四百年前)アブラハムは一神教の萌芽を己の信仰の中に保ち、カルデアを離れてカナンに掌大の地を得て以色列の國祖となり、基督教の胚子を懷きしなり。モーセは殆んど四百年の後にエジプト政府の壓制に苦しみたる同胞を救ひ出し、數十万の大軍を導き、四十年間アラビヤの沙漠を踏み、この間に宗教、政治、法律を立てぬ、人民は不羈獨立の氣象を養ひ、四肢強健にして其武四邊の國民を戰栗せしめたり、傳ふる所に因れば、摩西の五卷(創世記、出埃及記、利未記、申命記、民數記)は當時に成りしものなりと云ふ。ヌンの子ヨシユアはモー

セの後を襲ぎカナンの地を平げ終に以色列國は建てられたり。其後凡四百年間は士師の世と稱せり(士師とは國王、大統領の如き權なく、軍事には將となり、法律には審判官となりし者なり)士師の世は以色列の國運興廢常なく、メソポタミヤ王クシヤンリシヤタイムに屬し、モアブ王エグロンに従ひ、カナン王ヤビンに仕へ、ミデアン、ペリシテ人に服し、殆んど寧日なし、第十五代の士師豫言者サミエルがサウルを王と爲し、より國運隆盛におもひき、パリシテ人を追ひ、以色列王國を建てたり、サウル王陳没し、太閤王立つに及びて以色列國は其版圖を擴め、北東はユーフレイト河に達し、南はエジプトと接し、西はシリヤを領し、四圍の豪族モアブ、エドム、アンモン、ペリシテを制服せり、當時の王國の大を以て以色列國の空前絶後と爲せり。其子に智慧拔群の稱あるソロモン王あり、太閤王の死せしは凡三千年前なり、其子レハベアムに至り、國分れて二つとなれり、太閤王統の出でし猶太族とベンジヤミン族のみレハベアムに屬して猶太國を建て、他の十族はヤラベアムと云ふ者を戴きて以色列國を建て、以後再び合一せしとなし。當時以色列國の人口は三百五十萬あり、丁勇八十萬ありしと傳ふ、猶太は更に小なるものと知る可し。宗教上の事を觀れば、前にも述べし如くアブラハムの一神教はモーセに至りて宗教の形式を具へ、以色列の國教となり、猶太教は殆んど他人種の奉じ難きものなれば、基督降世までは不弘通の宗教な



りき)ダビデ、ソロモンに至りて神殿の大建築と、もに益々發達し、正統的の信仰及儀典は猶太國に傳はりしなり。以色列國は亡滅せしゆゑ斯かる國土人種なりと雖も、時に信仰の冷熱はまぬかれず、或時は外國の異教を奉じ、或時は暴君の爲に國家の事云ふに忍びざる事多かりき、爲に豫言者イザヤ、エレミヤ、オバデヤ、マイカ、ナナム、ハバコク、ゼパニヤは猶太國に現はれ、ホセア、アモス、ヨエル、ヨナは以色列國に出で敬神愛國の熱涙をふるひ王を憚からず民を恐れず、侃々諤々の辯を以て警醒し爲に國運を隆むに爲し國難を救ひしことも多かりしが、パレスチナは元と是れ大國競争の衝に當りし所なれば外寇常に斷えず、加ふるに君民の不信不徳の時多くして國礎かつて鞏固の事ありしと云ふも過言にはあらずりき。

猶太國はゼデキヤ王に至りてバビロン王チブカドネザルの爲に囚はれ、エルサレムを焼かれ、其民はバビロンに移され、以後猶太は獨立せしとなし。以色列國は猶太よりも早くアスリヤ王セナケリブの爲に亡ばされ、國再び立せず、其遺地は混合人種の長く住する所となれり。ゼデキヤの害せられし時は基督紀元前五百八十六年なり、以色列國王ホセアの囚虜となり、是は紀元前凡七百三十年なりき。

猶太人はバビロンに移されて後にも、豫言者エゼケル、ダニエルの如きありて亡國の民に

復興の望を抱かしめ、エズラ、ネヘミヤありて百方力を盡し、再び本土に放還せられたり、時にバビロンはメデアのダリユス王の爲に亡び、ペルシア王クロスの勅令によりてエルサレムの神殿は再建せられ、猶太人は其國土に歸るとを得たり(紀元前五百三十六年)。爾來猶太國は政治上に赫々の譽なかりしと雖も、決して卑屈の民には非ず、地勢の許さざると人種特有の性質にや、其國長く獨立せず、屢次叛しては破られ、希臘に屬し、エジプトに屬し、シリヤに屬し、終に羅馬の版圖に入れり。猶太教の完く成りしは猶太人がバビロンより歸りし後なり。猶太史を考ふれば、國初より神政制度を重んじたれば、にや、ダビデ、ソロモンの二王を除く時は權勢ある王者を見ず、著名なる人はと問へば、豫言者、士師、祭司の如き人のみなり、故にバビロンより歸へりし後は、全く祭司長に由りて其國は治められたるなり、特にマカベ家の如きは勢力ありき、基督降生の時は其國王はヘロデと稱し、羅馬より封せられたる者なり、十字架に懸りし時は、方伯ポンタス、ピラトが支配の下にありき、國勢頗る危急に望みし時ゆゑ祭司長の任免屢次ありき。教派と稱するものは非ざりしが、パリサイ、サドカイと稱する社あり、パリサイは猶太教の正統派とも云ふ可きものにして、頗る嚴正なる説を奉じ、特に來世の復活を信じたり、紀元前百五十六年より起りしなり。又、サドカイは重に摩西の五巻を用ふるのみにて來世を信せず、天使のあることを信せず、靈肉



ともに消滅する者と思ひしなり。他に「エッセネ」と云へる一社あり、頗る隠者の風ありて犠牲を献げず妻を娶らず死海の西岸の曠野の中に住せしとぞ。此他に「ヒロル」「シヤンマ」イなど、稱する者ありと雖も學説の異同より生ぜし黨にして宗派と云ふ可きものは更になし。茲に猶太人は往古より一ツの觀念あり即ち「メサヤ」救世主を望むことなり、地球上各國の古史を見るに太古に黄金世界ありしと云へる過去に樂土の在りしことは傳ふれども、猶太人は之に反して將來に救世主あり此世に降り給ふと信せり、此國人は世界に稀なる流離困憊を極めたる人民なれば敵國に囚虜となり、悲酸の逆境にのみ會ひしゆゑ國民の希望は不世出の英雄ありて猶太國を救ひ國威を盛むならしめ、黄金世界を見ることを得むと信せしなり。されど、猶太、以色列の二國にあらはれし豫言者は形體の上のみならず心靈上の榮光、道德の正義、愛憐が實行さるゝ世と信じたるなり。以「塞亞書」第十一章に

「惟由耶西之幹將苗一柔條由其根將發一枝矣。耶和華之靈將安居其上即智慧與明哲之靈謀略與才能之靈知識與畏耶和華之靈彼將通達於畏耶和華之畏必不循目之所見而鞠不循耳之所聞而擬彼必以義而鞠貧者以理而聽謙遜者之訟又將以口之杖擊地以唇之氣殺惡人公義必爲其腰之紳忠實爲其身之佩當時豺狼將與羔同居豹將同食其小子將共伏

獅將如牛而嚼草。哺乳之嬰將戲於毒蛇之穴斷乳之嬰將置其手於蝮之窟在我之聖山徧處必無所傷無所害蓋知耶和華之知識將充滿於地如水之掩蓋於海無異。」

茲に「エッセネ」「耶西」とあるは「ダビデ」王の父の名なり、基督は「ダビデ」王の裔なればなり。理想的の世界を寫し、救世主の現はるゝ時には「耶和華」を知らざる者なく、嬰兒も毒蛇の穴に戯むるゝ如く世に暗黒なく邪惡なき様を寫せしなり、「耶蘇」は豫言者の告げし「基督」なりと信するに由りて千八百九十五年の昔に世界の一大宗教の基督教は開創せられたるなり。この「メサヤ」を望む信仰は、其解釋を謬りて基督に背き、其解釋の非を知りて基督に従ひ基督が在世に猶太國民は二つに分れしものと云ふ可し。一ツは基督教なり、一ツは猶太教なりき。形體上より「メサヤ」を望みしゆゑに、内に圓滿の徳あれど外は寒村の民にして、猶太の爲に羅馬に對し反旗を擧ぐる様もあらざりしかば猶太人は終に基督を棄てたりしなり。猶太國は紀元七十年に羅馬の勇將「タイタス」に圍まれ、史上に稀有なる無慘の落城を爲し、丁壯は盡んと皆な殺戮せられ、城破れ國亡び、猶太人は萬國に散亂し、千八百年間己れの故國を立つると能はず、然れども行く處に舊慣故式を守り、他の人種を卑しむ、基督教國の人には、穢多非人の如くに扱はるゝと雖も、人民多くは勤儉にして、歐米にても富者は猶太人なりと云ふに至る、然して今日も未だ「メサヤ」の降臨を望みつゝ、あるなり、稀有ある



強項の人種と云ふ可し。猶太國は倒れたりと雖も基督の國は起り、十二使徒と稱する者及び保羅、雅各(基督の弟と云ふ説あり)等は死生を顧みず、白刃鼎鑊を恐れず、基督を神の獨子と信じ贖罪、更生、復活等を確信し、羅馬の偶像教に反對し、當時の社會の惡徳を戒しめ改々として傳道を勤めたり、特にペテロ、パウロの傳道並著述は基督教の基礎を置きし事と云ふ可し。新約全書もパウロが信徒に送りし書翰なければ完全せしものにあらざるなり。佛弟子も釋尊の滅後に三藏の結集あり、下りて阿育王に至りては傳教に力を盡し、此間に外道の反對、國王の壓仰のありしと雖も、基督教が異教と衝突し、大迫害を受けしが如きは世界の史上に稀なることなり。

第一 基督の世を去りしより數ヶ月の後、ペテロ、ヨハネ獄に入りぬ。

第二 執事ステパノ石に殺されたり。

第三 使徒ヤコブ死刑に處せられたり。

(以上は紀元四十四五年までの事なり、ペテロの傳道時代なり)

第四 ニーロ帝の爲にパウロ死す、紀元六十七八年頃なり。同時にペテロも害せられたりと云ふ説あり。

第五 ヨハネ追放せられてパトモス島に遣られたり。

第六 ヤコブ(主の兄弟と云ふ)害せらる

(以上は紀元四十五六年より百年に至るパウロ傳道の時代より後に及ぶ。)

第七 迫害時代と稱す紀元百年より三百十一年に至り、イグネシウス、ポーチナス、ジヨスタン、マルテル、シブリアン、ポーリカ、オーリゼン等は殉教者の重なる人々なりき。

使徒ペテロ、パウロが傳道の艱難は筆紙に盡し難し、他の使徒も亦傳説に由れば殆んど皆な教の爲に殉したりとぞ。然しながら、ニーロ帝以前の迫害は未だ猛惡の事少なかりしが、ニーロに至りては殆んど惡鬼の如く、信徒を縛して猛犬に喰はせ、チャンを塗りて火を點じたり、以後ドミシアン、ツレシアン、マークス、アウレリアス、セウイラス、デシウス、デオクリシアン等の諸帝あり、殆んど二百年間信徒を迫害すると甚しかりき。其の例を擧ぐれば、全身を倒にして焼き殺し、耳目鼻舌を斷ち、美婦人を裸体に爲して無情の兵卒に與へて獸慾を恣にせしめ、鐵鎖を燒きて縛り殺し、鉛を鎔解して全身に注ぎ、全く鬼畜の行狀なりき。此迫害を忍び、禁令を恐れず、水火を辭せず、神と基督を教し、悔改して不徳を棄て、相愛の道に進む可きことを宣べ傳へしなり、終に紀元三百年の後より天下靡然として基督教を奉じ、希臘羅馬の偶像教は地を拂ひて見る可からざるに至りぬ。嗚呼、基督教は外國の神



と争ひ、社會の不徳と戦ひ、世の悪風俗と軋轢して、白日晦冥、驚天動地の悲觀を過ぎて、終に  
晴朗たる樂園の春を迎へしなりき。

基督教は猶太教の包皮より發芽したれども、エルサレムの神殿は墟趾となり、祭司長なく、  
犠牲なく、香烟燈火等なく、外形全く變じぬ、然れど、アブラハム、モーセ、ダビデ及豫言者等が  
望し所は空しからず、メサヤは世に現れり。基督は神殿なり、基督は祭司長なり、基督は犧  
牲なり、教徒の祈禱は香烟なり、教徒の言行は燈火なり、實に基督の預害せし如く、神殿は三  
日にして建てられたるなり。(爾曹等の殿を毀て我三日にて之を建てんと云ひしとあり  
猶太國は亡び猶太人の散亂し、猶太教は振はずと雖も、神の國は立ち、神の民は集り、神の教  
會の興りしなり。ナポレオンも孤島に謫せらし後に一日侍臣に語りて曰く、アレキサン  
ドルも、シーザルも、シャルレマンも、余も力を以て大帝國を建てたりと雖も、獨り耶蘇のみ  
は愛を以て其國を立て、今日に至るまで數百万の人は彼が爲に死せんとすと嘆じたり。  
嗚呼耶蘇基督の傳記を熟讀せし者は假令神の子と信せざるも、其品性は超然として人類  
の上に在ることを認識す可し。教義に亘る事は其條下にありと雖も、其綱領をわけひに  
は左の如し。

神 耶和華と稱す、ヘブル語にして英語の God と同じく、自然而然まには有りて在る

者の意。

基督 神の獨子と信ず、ナザレの耶蘇なり。

聖靈 靈にして能力智慧を具へ已を知る者なり。

創造 天地萬物を六日にして造りしと云ふと創世記にあり、六日とは六時期の意なり  
とも解釋す。

罪 エデンの園中に於てアダム、エバが禁果を食ひしより起る之を原罪と稱す、人は  
皆な此原罪あり、罪人に墜落せり。

罰 人性敗壞し徳義を慕はず罪を犯すと好む故に死と歎難の罰あり。

地獄 來世には惡人自ら擇びたる惡に由りて永苦を受くる所なり。

拯救 人は罪あり罰を受く可き者なり故に拯救を要するなり。

贖罪 人は罪を犯さざる者なし、贖なはざれば赦され難し、故に贖ひ主を基督要す。

天國 基督を信じ罪を赦されし者が死後入る可き所なり。

この他に信望愛の教あり、十戒あり、祈禱、聖禮、典あり、天使、惡魔、惡天使の解説ありと雖も約  
言すれば始祖の罪により人は罪惡を犯す者なり、罪には罰あり、罪の赦を蒙り善とならむ  
に必ず贖はるゝとを要す故に基督あり、基督を信すれば更生して新人となるを得て、



聖靈の助を受け生きては神と偕に居り死しては樂園に入り、時來りて復活し永遠の生命を受くると云ふなり。天地の創造、アダムよりノアの洪水に及ぶ事は此書に畧す、舊約全書創世記或は普通の萬國史に就きて見る可し。

## 第二章 基督

### 降誕より「ヨハ子」の宣教に至る

凡神論の大家スピノーザは神聖なる智慧の表様なりと云ひ、哲學の大賢カントとヤコビは、理想的完全の表様なりと仰ふ、シエーリングとヘーゲルは、神人の一致せしものなりと評せしは誰をか指し。ガリレオか、ケプレルか、ベーコンか、ニウトンか、ミルトンか、否ナザレの耶穌なりき。

抑イエスキリストは今を距ること千八百九十五年にパレスチナの山村ベツレヘムに降誕せり。史家の説には紀元五百三十三年にデオニシアス、エキシガスと云ふ僧ありき、基督の降誕の年を歳暦の紀元と爲さむと計り、羅馬建立紀元七百五十四年を基督降誕の年と定めしが其計算には凡四年の誤ありと云ふ、之より推せば千八百九十九年前と知る可し。其降生の月も明白ならず、十二月廿五日を「クリスマス」と降誕節稱すれども、降誕の日

を祝することは紀元三百三十三年までは恒例には非ず、當年に羅馬の監督ジュアスが初めて十二月廿五日を降誕の祝日と定めしなり。到底精確の時日は知り得がたしと雖も、幾分か十二月廿五日は憑據ありと云ふ。

基督は猶太人にして其父をヨセフと稱し其母をマリヤと云へり。家系は遠く以色列國の太閤王より出で、血統連続として断せず、然れどもヨセフの時に至りては、人世滄桑の變により家門落魄してガリラヤの僻村ナザレにて木工を營みけり。母の家系も亦た太閤王より出でしものなり、然しながら基督教の傳ふる所は處女マリヤは聖靈の感化によりて未だ其夫ヨセフと偕ならざる前に懐妊せしと云ふなり、故に基督はヨセフの子と假に思はれけるにて實は神の愛子なれど我儕と同情の兄弟たらむが爲に人を母として此世に生れしなれば、人を父とは爲さざりけりと云ふ。天主教、希臘教の人々は童貞マリヤを崇め殆んど基督と同じ位に尊むは全く此事あるに歸するなり。馬太傳に由れば其夫ヨセフは義人にして舊約全書にある律法を嚴守する者なれば、マリヤの懐妊を發見せしより心を痛むる事一ト方ならず、公然の所置を取らず密に離別せむと思へり。摩西の律法申命記に由れば夫に適くの約を爲せる後に不義をなす者あらば邑門に曳き出し石を以て撃ち殺す可しとあればなり。然れども亦たマリヤには夢に天使の告げありしと聞



、信疑こもく、發りて決斷しがたく終に穩密に離縁せむと思ひしなり。これより先きに天使ガブリエルはマリヤの夢にあらはれて曰く「慶たし惠まるゝ者よ主汝と偕に在す、爾は女の中の福なる者なり又曰く、聖靈なんぢに懷る至上者の大能あんぢを庇はん、是故に爾が生む所の聖なる者は神の子と稱へらる可し」との告げありければ懷妊せし者は救世主たることを知り居りしなり、況んや親戚ザカリヤの妻エリサベツも年老いて孕み、其夫に天使の告げあり、メサヤ「救世主の義の先驅たらんとの事なり、斯るをりなればヨセフも其所置に苦しみたりしが、又夢に天使の告げあり、處女マリヤの孕みしは猶太人が昔時より待ちたる救世主にして其人性は聖靈の大能によりて成れることを知れり。以上の事は批評家に説なきに非ずと雖も基督の傳には欠く可からざるものなり、以て當時の人の救世主に對する觀念も、今日まで基督教の信仰の基礎を置きし所をも、其感化力をも窺ひ知る可し、ましてマリヤを崇拜する天主教、希臘教のあるあり、事容易に議す可からざるなり。このエリサベツより生れしをヨハネと稱し、後に「バプテスマ」のヨハネと世に云はれたる人にして祭司二十四班の中の「アピア」の班に屬したる祭司ザカリヤの子なり、親戚にも此人あり以て「ヨセフ」が家庭の虔敬なる熱信なることは推考するに難らざる可し。これより十ヶ月の間は如何なる事のありしか知り難し、ヨセフが郷里ナザレの様を考ふ

れば、海面より千二百尺の高地にして四方皆な小丘に包まれ、南北には峰高く秀たれども、村の在る所は俯して廣原をみる可し、羊腸たる細徑を下れば、麥秀で草青く、駱駝も驢馬も、驛馬も往來して旅人を其背に眠らしめ、春光に酔はしむる所なり。若し其れ陽和三月の候となれば、野花開き、禽鳥唱ひ、陶然として造化の美に我を忘れしむると、花には紅ひの「アネモン」、淡紅ひの「ピンク」、フロックスあり、白黄の薔薇、深紅の「チェーリップ」あり、植物學者をして此間を逍遙せしめ、なば、百合科、薔薇科、蘭科の數十の植物を發見す可し、平野は東西に亘りて廣く、蒼鬱たる樹木は乏しと雖も、無花果樹、檳榔樹の翠りなる枝に、囀する禽鳥も亦た其種類に乏しからず、雲雀あり、相思雀あり、燕あり、また彩翼をふるふ胡蝶あり、時にまた涸々たる泉流ありて、行人の渴をいやし、牛羊の群を養ふてありあり、雅歌に

「我之侶歎、我之美、艶者歎、請起而來、視哉、冬已逝、雨已息、而過、羣花發於地、羣鳥歌呼之時、已至、鳩聲已聞於我地、無花果樹升、香漿於其青、無花果吐芽之、葡萄樹出、其馨香、我之侶歎、我之美、艶者歎、起而來。」  
 と好時季の景を叙せしは、ソロモンの代のみならず、基督の時にも以てナザレの景にあつ可し。村は現今三千人余の大村なれど、其昔しは如何ありしか。扁平なる屋蓋にて白色の石灰石を以て家の四壁を築き、狭き道路を主なき犬の我が物顔に走りあるくなど、小亞



細亞より亞刺比亞地方の光景に同じ。今日は回教徒も少しは住せりと雖も多くは基督教徒の住する所なりとぞ。かく自然の景は美艶なりと雖も、當初よりナザレは中等以下の山里にして、基督の當時などは猶太人種の外に雑種の居民も多く、猶太より僻地の人なりと蔑視せられたる所なり、ナザレより善き者出でむやとは當時の酷評なれど一般の人氣よりは當を得たりし所もありしとぞ。

時に羅馬皇帝アウグストより天下の戸籍を調査するの詔あり、各地に散亂せし各種の民は其本貫に歸りて戸籍簿に登記を爲せり。ヨセフは前にも述べし如く一時落魄せしが爲に僻地ナザレの如き所に住すれども、元是れ以色列中興の賢王太閤の末裔なれば、太閤の郷里ベツレヘムに上りて、正統の猶太人たることを證せむ爲に歸國せり。ベツレヘムは猶太の京城エルサレムより距つること僅に六英里なり、今日は三千人余の戸口ある山村なれど昔も左のみ大なる村落にはあらず、然れど歴史上名邑の地なればにや戸籍に登ひて四方より歸り來る人夥多し。

ヨセフはマリヤと共にカリヤのナザレ村より來りて、ある旅宿に着くせり。かゝる時なれば旅人の多きに當時の事なれば廣き旅舎の設けも少なく、加ふるに家貧しきヨセフ夫婦の事なれば、旅宿の厩に一夜を明さむと爲せり。この旅宿は西刺比亞語にて、カンと

"It was the winter wild  
While the heaven-born child,  
All meanly wrapt, in the rude manger lies;  
Nature, in awe to him,  
Had doff'd her gaudy trim,  
With her great Master so to sympathize;  
It was no season then for her  
To wanton with the sun."

稱し此家のみは無代價にて何人にも貸す、慈善的に設けしものなれば早く着せし者が室を占め遲き者は止むとを得ず、中庭の隅なごに荷物と共に夜を守る有様なりとぞ、斯る所には洞窟を厩にあてしもの多し、ヨセフの宿りしは此の、カンには非ずやと云へる説あり、兎に角に雨露をだに防がばと思ひて宿せしならむ。その夜更けて後か、翌日か四五日を過ぎての後か、其日は定め難しと雖も、耶穌基督は實に此寒村の破窓の下に降誕せしなり、ミルトンは唱て曰く



傳説に従ひて詩聖は唱へり、神子の降誕せしは嚴冬にして、厩の内に臥し給ひ造化も爲に同情を表し、赫々たる日光の燦爛たるなしと、實に寒貧の父母の手をもて抱かれ給ひぬ。嗚呼、釋尊は淨飯王の宮中に生れたり、基督はベツレヘムの旅舎の厩に生れたり、人の辛酸を體恤するは宮中の王子に非ずして、旅泊の貧兒にありと知る可し、基督の愛はこの同情體恤に在りて存す。當時東方より博士は天上の異星を視て、基督の生れしを知りてベツレヘムに來り、基督を見て禮拜し、方物黄金等を獻じ、郭外の牧羊者は天使の告げに由りて基督を尋ね拜せりと云ふ事あり。其他異祥靈瑞の詳細なる様を知らむと欲せば、福音書に就きて見る可し。基督は摩西の律法に従ひて割禮と稱する禮を受け、敢て猶太人と異なることなかりき。當時有りしと云ふ祥瑞もヨセフ夫婦の外は誰も知る者あらず、基督は見る影もなき征衣の袂に暖められたる村夫の一兒のみ。

古代は何事も今とは異なる事多し、漫に史上の傳ふる所を笑ふまじきなり。國家の興廢に禎祥あれば一家一郷の盛衰にも瑞相あり、龜卜信せられ筮竹の示す所は疑ひなかりしなりき。基督の生れし時は羅馬帝國の全盛にして、猶太ガリラヤ、サマリヤの三國はヘロデ大王の藩屬なりしが、このヘロデは桀紂と同じき暴王なれば、今日西洋の謠に極めて殘忍なる人を評し、アウト、ヘロット、ヘロットと云ふ其意はヘロデに上こす人なりとの事なり。

れば以て如何に暴逆なるかを想ふに足るなり。斯る人も亦た迷信のなきに非ず、かねてより猶太國民が望み居りたるメサア即基督が生れ天上に異星あらはれしと、東方の博士(或云ふベルシャの星學者なり)より聞きしかば、若し其人長じて我が王位を覬覦することあらむかとの恐懼を抱き、終に無慘にも其兒を殺さむと思ひしが、何處あるやを知らず、唯だ祭司等の云ふ所に由れば、メサアはベツレヘムに生る可しとの傳説を聞き、博士等に聞きし時に従ひてベツレヘムより四方の地に住む二歳以下の小兒を屠殺せしめたり、羅馬歴代の暴主の逆行を以て考ふれば、敢て珍しからざる事と雖も、和漢には見る事なき殘忍の所業なりき。

基督は生れてまだ二ヶ月なり、夢に天使の告げあり、母マリヤは懷に抱きて、夫ヨセフと違くエヂプトの地に脱れゆきぬ。エヂプトには何ヶ月ありしか、何年住せしか、知り難し。ヘロデの死せし後猶太に歸りしが、嗣王アケラオも暴逆殘忍父に劣らぬ人なるを聞き、祖先の地なれどもベツレヘムに往くことを躊躇せし時に、亦も天使の告ぐるありて、ガリラヤのナザレに歸へれり。幼稚にして他郷に彷徨ひ、既に世の辛酸を嘗めしは、基督なりき、この間に渠を鞠養せしは、マリヤの纖手なり、新月の影冷かなる砂漠の夕暮、旭日の光眼を眩するナイル河畔の朝、優に聖詩を誦しては、心を慰め、靜に耶和華眞神に祈禱を獻げては、



我が子の前途に幸福あれと願ひしなり。宜なる哉、オルズオルスが「ソネット」に、マリヤをば大洋の蒼波の汚れなきに比し、東方の地の曙の美艶なるに較し、隈なき月光と讚し、薔薇の美と歎せしこと。たとひマリヤの家庭は賤が伏屋なりとも詩篇百二十八篇に「なんぢの妻は家の奥に居りて多くの實を結ぶ葡萄の樹の如く、汝の子輩は汝の筵に圓居して彼等の若樹の如し、視よ耶和華を恐るゝ者は斯く福祉を得ん」とある賢婦なる可し。烏兎匆々十二年は夢と過ぎ、基督は既に十二歳となれり、當時の定に遊へば男子十二となれば律法の子と稱せられ毎年三次は首都エルサレムに上り、踰越ユダヤ五旬ペンテコステ構ミナレットの三大饗筵に會す可き也。猶太ガリラヤは葦爾たる小邦なれば、この節筵には男子は擧りて四方より上り來りしなり。基督も父母と共に踰越節に上れり。(アビブの月の十四日より廿一日に至る「アビブ」或は「ニザン」と云へるは三月にあたり)この節筵は特にエルサレムに詣づる者多ければ都城の人は十萬を以て數ぞふるなり、故に父子或は夫婦の分れて群集に紛るゝこともありとぞ。基督も亦た群集に紛れて父母に分れ相ひ見ざること三日、父母は心を痛むること一ト方ならず、やうやくにして一ツの會堂にて基督が教法師等と摩西の律法を研學する人間答を爲しつゝありしを見かけたり。マリヤはさすが女氣の我が子を見るより覺えずも、爾の父と我と愛へて爾を尋ねたりと、かごとがましく戒めたり。時に十

二の少童基督は父母をかへりみ、成年アドルびたる聲音にて、何故我を尋ぬるか、我の我父の事を務むるを知らざるかと答へたりとぞ。此意は「聖書改正譯」に従へば、我父の事をと云ふに非ず、我父の家に在るべきを知らざるかとの義を正しと爲す、何故に我を尋ねるか我に遇んと思さば直ちに我父の家に來り給はざるか子は父の家に在るべき者にて候との義なり。父の家とは神殿をさし、言なり、この問答は基督が宗教的の智識の開發せし一進歩なりと説ける學者多し、然る可き事なる可し、此齡の時代は日々に見聞に由りて智識の進歩する者あれば、踰越ユダヤの大節筵に上り去年までは空しく聞きながし、律法の講述も群集の語りあふ教理の一斑も實にと思ふ所もあり、否と考ふるふしもあり、天稟の宗教的思想は會堂にゆきて、神殿の中に三ヶ所ありしとぞ、教法師の講述に耳を傾けしめ覺ゆず父母同郷の人々の傍より離れても、兎角して一日二日を送りて神殿の中にあらしめたるなり。神を父と知り神殿を父の家と識りしは一大真理の曉通と云ふ可きなり。約翰傳第十四章に我が父の家には第宅多しと云ひ或は我れ父に居り父の我に在ることを信せざる乎と教しへしも當時に於て父母に答へし眞理なりき。基督は其身前途の兆しを茲に少しく露し、と雖も、身は未だ父母の訓戒保護の下に在る可き者なれば父母と偕に郷里ナザレに歸へりぬ。以後十八年間は聖書に載する事なし、



恐らく父ヨセフは此年間に死せしものならむ、アボクリハと稱する書などには(聖書中に)は編入せざる書なり其幼時を記載して奇跡異能ありしと傳ふ其一例は基督は土を以て數羽の鳥を造り手を拍ちければ忽然として羽翼を振ひて飛び去りしなど云ふ事あり、若し斯る記事を聖書に挿入せば殆んぞ釋尊の幼時と異なる點を見出すに苦しむ可し、彼は大象の死體を手鞠の如くに抛ち、是は土の鳥に羽を振はしむ大小の差別ありと雖も共に奇跡と云はむのみ。斯る事は基督教徒の採らざる所なりと雖も、少年の間の事に就きては諸説あり、或は平生獨居して人と交際せず一切の智識は神より傳へられたりと云ひ、或は少年の時に當時の人の知り得たる學問は盡く修めたりと云ひ、結局は古代の預言者らしく、又は仙人らしく見做して人世より離れて天啓の教を受けたりと説き、又は哲學者らしく、或は教師らしく頗る當時の學識に通達せし者の如くに考ふるあり。近世に至りても未だ以上の如き説を唱ふる者なきに非ずと雖も、福音書に由りて考ふれば基督は凡俗の生活を爲し、當時一般の少年がうく可き教育を受け、會堂にて舊約全書の事實を聞き、例に由りて年の始にはエルサレムの逾越の節筵に上り、パリサイ、又ハ、サドカイなど、稱する諸派の人々の宗教上の意見を聴きしのみなる可し。基督が宣教の日に當り、渠は木匠の子にあらすやと云はれし事あるを以て高尚深遠の神學哲學などに日月を送りし人に

非ざることは、其郷里の人の証據する言と云ふ可し。然れば正確ある説に近きは渠は木匠の子なり、己れも亦た木匠の業を學びしこともある可し、當時の風俗にては貧富貴賤に關せず少年の時は必ず一ツの職業を習ひたればなり。又自然を愛し、祈禱を好み、天地に俯仰しては父の神の手に成りし森羅萬象に對して觀念し、嘻々として唱ふ林禽、騁々として舞ふ蜂蝶を見て造化の大能を讚歎せしは疑ふ可からず、基督は他の村民の如く父母あり兄弟あり、朋友あり、市民ありてナザレの白屋に木工の具を手にして通常の事を談笑せしなり。試みに村落の大工の家に齡三十には未だ遠き大工のありと假定せよ、其青年は舊約全書の記事を能く誦じ、頗る嚴正なる信者にして何となく鄙には珍らしき高尚なる氣品ある人なり、其家内の様も深くは他に知られずと雖も親しく往來する者は如何にも正統の猶太人にて律法に照されても恥かしからぬ所あり、其青年はをりく物靜なる所にて祈禱を爲し、朝夕あどは郭外にいで、景色を愛する癖あり、然れど無邪氣なる小兒を集めて餘念なく遊び戯るゝことなきもあり。この青年はヨセフの子のイエスなりしと思へば、基督が十八年間の生活を知り得らる可きか。兎に角に基督の品性は草木の生ひ立つが如く人の知らざる間に寸より尺、尺より丈と伸び給ひしなり。抑猶太人は其國史も其風俗慣習も盡く皆な宗教的の感化のあらざる事なし、其政府はへ



ロデ或はアンチパスなど、稱する國君ありとも、其國君の上に羅馬皇帝ありとも、深く猶太人の關する所には非ず、一般の國民の心の在る所は首府エルサレムの神殿と所々に設けられたる會堂のあるのみ。故に個々の家庭にても朝暮に祈禱する、手を洗ひ清むる、日々の些細の事にも律法舊約全書に在るに照して考へ、一舉一動殆んど皆な宗教に關係せざる事なし、實に猶太人の心身は宗教の爲に用ひられたるものなりき。

基督は斯る家庭に人と成り、斯くの如き自然に對し、人生の波瀾の中に春秋を送り給ひしなり、渠は神仙を學ばず、哲理を論せず、嚴正なる猶太教に養はれたる以色列人が理想せしメサアなりき。故に奇跡異能には信を置かざる人ありと雖も、能く基督の傳を讀み味ひし者は其品性の高傑優美なるに感せざるものなし、佛國のルーソーは基督教を辨難抗擊せし哲人なれども、福音書と比較する時は、たとひ誇大なる事ありとも、世の哲學者の書は如何に微少のものならずやと云ひしことあり、所詮實而實高大なる點は他の教祖の及ばざる所なるべし、しかもこの徳を養ひたるはナザレと稱する一山村なりき。奇跡よりも大かつ異なるは基督の品性なり。

猶太人は前にも記載せし如く、宗教には熱信なる者殆んど宇内に其比類を見ず、能く摩西の律法を實行せしと雖も、概論にも述べし如く、政治上の主權者も朝暮に改まり、バビロン

より故國に歸り一旦宗教上の興復を見る事ありしと雖も、基督の當時は國君ヘロデに阿附する黨あり、パリサイと稱せし一派は既に舊時の精神を失しなひ徒らに外禮に拘泥し、サドカイと云ふ一派は神學論に偏し、頗る異端の傾向あり。宗教の力に由りて團結の基礎を爲せし人民が以上の如く腐敗せしかば宗教界は語るに忍びざること多く、政治界は全く羅馬より封せられたる惡逆の王と、貪欲の官吏の左右する所なりき。偶次敬虔の心厚き人民は舊約の預言を信じ、あはれ此國を救ふメサアの速に降れとのみ望めり。基督が生れて四十日の後に母に抱れて神殿に上りし時にシメオンと云へる老翁とアンナと云へる老媪が神を讚美し、日夜に待ち望みし基督を見たりとて悦びしと云ふ事のあるも以て當時の人心を窺ひ得べし。時は既に熟せしなり、先づ宗教革新の聲を叫びし者は基督の親族中より現れしなり、即、バプテスマのヨハネ(基督より六ヶ月長せり)と稱する者に、其母は基督の母マリヤと從兄弟なりと云へば、基督とは再從兄弟にわたれるなり。釋尊の一族にも阿難等の如き賢哲あり、基督の肉身の親戚間に宗教の革新家を出す豈に偶然ならんや、ヨハネの基督の如く民間普通の生活を爲し、人に非ず、舊約の時代にありし豫言者に似たる人なりき、常にユダヤの曠野の中に住し、身に駱駝の毛皮を着し、革の帶をしめ、其食は蝗虫野蜜なりしとぞ、霞を吸ひ霧をのむ仙には非ずと雖も、人烟たえたる原野



に住み、唯一の伴侶、禽鳥の聲、天籟の響のみ、ヨハネは此間に神の默示を蒙り心性を練り、一旦豁然と知り得る所ありて世にあらはれしなり、時は安息の年にして七年毎に耕作を休む律法あり、猶太國民が耕作を休む年なればヨハネの説教を聞く者多し、野に来る者は猶太國を舉りヨルダン河の四方より群りたり。ヨハネの教ふる所は舊約の豫言に應じて、天國は近けり悔改めよと説き、ヨルダン河にて悔改者に洗禮を施し、パリサイ及びサドカイの輩を戒しめ、虚禮を捨て前非を悔い、曩祖の教に歸らむ事を求めたり、當時の光景は如何なりしか、蓬髮長髯の士が身に粗服をまとい曠原の中に立ちて説教し、群集に其罪を悔改する者あれば自ら河中に立ちて嚴肅なる洗禮（バプティスム）の式を授く、實にヨハネは昔時のルーラルと稱して可なり。其意は少しく異なりと雖も後に基督教會にて行ふ所の洗禮は當時より起りしものなり。端なくもヨハネの一叫は全國に響きわたり其教を聴くもの雲霞の如くあつまりたりと雖も、多くは皆な中流以下の輩のみにして國教を代表する祭司長老等は依然として動かず、亦以て猶太國運の前途を卜す可きなり。時に基督はナザレに在りて其風説を聞き、己も亦たヨハネに就きて洗禮を受けむ爲に、ヨルダンの河邊に來れり、此時聖靈（ハルカ）の如く基督の上に降りしとありと云ふ。ヨハネは當時よりしてナザレのイエスは、メッサなることを知り得たり。實にヨハネの宣教は、主の道を備へ其路線を直

くせよと野に呼べる人の聲ありと七百年前に豫言者イザヤが理想せし救世主の先驅となりしなりき。熟々當時の様を考ふるに、猶太サマリヤ、ガリラヤ（以色列國なり）等の諸國は外形決して衰頹せしものに非ず、物質的の開化は舊時に於ては視る可からざるものなりき。新市街は開かれて羅馬の開化を移し、特にカイザリヤには船渠あり大棧橋あり倉庫あり、廣區大路ありアウガスタスの爲めに造られたる殿堂ハ中天に聳え、エルサレムに於ては亦たヘロデ大王の作らしめたる神殿は四十年間の星霜を歴て落成し光彩陸離として眼を眩まし、加ふるに城樓あり、劇場あり、宮殿ありき。其他サマリヤのセバステ市あり、遠く北方にはヘルモン山の麓に都カイザリア、ピリビあり、ガリラヤの湖邊にはジュリヤ城あり、皆當時に開創せられし都府、或は再興せし市街にして舊時の態にあらざる繁榮なるものなりしとぞ。然れども宗教界の事を視れば、羅馬の壓抑の爲に國民の自由は奪はれ道義は廢壞し、パリサイ一派の人は儀文議論の中に縛せられて生氣なく、サドカイの一派は冷淡にして社會の隆替に關せず。國家の事又云ふに忍びず、凡七十年の後にエルサレムの落城ありて猶太國は全く亡び其人種は四方に散亂せり、噫、ヨハネの當日ハ宗教道德の腐敗推して知る可きなり。基督の受洗の後暫時にしてヨハネは獄舎に投せられたり、ヘロデ、アンチパス王（ヘロデ大王の子）が前妻を逐ひて異母の妹ヘロデアを娶り



しを諫めなければなり、ヨハネは後にヘロデアの爲に斬首せられぬ。基督の降誕より凡三十年後の事なりき。

### 第三章 試惑の時よりガリラヤの宣教に至る

基督はヨハネの教を聞き、悔改者の状態を見つゝ、衷心頗る感ずる所あり、既に摩西の律法は悔改の道に適せず、拯救の途は他にある可しと悟りぬ。況んや心裏の感覺も外界の現象も己の肩には拯救の大任ある事を示せり。茲に至りてナザレの私家を離れ、宣教の公道に進む可き事を知る。基督はヨルダン河邊の曠野に行き、沈思冥想の中に四十日間を送れり。この四十日間は全く斷食して、祈禱靜思其心を鍛煉したりと云ふ。此後凡三年の宣教を以て一大宗教を建設し、猶太人の信するメサアの聖職を全ふし、靈性より見れば神の子たることを現し、は此の四十日の斷食靜思の結果なりき。馬太傳に由れば、サタン「悪魔」は三大疑問を以て基督を試みたり。曰く

第一に「汝若し神の子ならば、命じて此石をパンと爲よ。基督は從容として答へ給へり。人はパンのみにて生るものに非ず、唯神の口より出る凡の言に因り、録されたり。」と、生命を保つが爲には食物は欠く可らざるものと雖も、生命よりも大なるものあり、神

の道を守るを以て更に大なるものとす、衣食住の爲に道を屈せず。

第二に「汝若し神の子ならば、己が身を下に投げよ、蓋汝が爲に神其使等に命せん、彼等手にて爾が足の石に觸ざるやうにす可し。」基督は悠然として答へ給へり。「主たる爾の神を試む可からず」と、赫々たる功名を世に示すことを斥けたり、高處より身を深淵に投じて、も身に傷害を受けず、實に此人は天使の守る者なりと、猶太人の歡心喝采を獲るが如きは、救世主の爲す可き事にあらず、假令天使は神に従ふ者を保護するとも、神に従ふ者は其保護に預ることを頼まず、唯だ神の道を守るの一のみ。

第三に「爾もし俯伏して我を拜せば、此等を皆な汝に與ふ可し。」サタンは此時基督を高山に携へゆき、萬國の榮華を示して試みたれども、基督は毅然として答へ給へり。「サタンよ退け、主たる爾の神を拜し、唯之にのみ事ふ可し。」サタンに従はば、世の金銀は得るに難らずとも、渠の擇ぶ所は地上の王に非ず、身の憂患愁苦の中に沈むとも、救靈の大事を取らむと言下さかに「サタン」を退けたり。

以上の試みは惡天使の「サタン」も教理に由り聖書の語を引用して誘惑し、基督は之に應ずるに又聖書の語と嚴正なる信仰を以て答へしなり、傳ふる所に由れば、高處と云ふはエルサレムの神殿のソロモンの廊上にて、下に百丈の谷ある所なり、又萬國の榮華とは遠きを



望み得らるゝ高山の嶺に導しなりとも、或は心識の上、サタンが示せし象なりとも解説は種々あり、又「サタン」は如何なる形状なりしかなど疑問多しと雖も、所詮試惑の要點は基督の心の鍛鍊なれば茲に詳細に辨する要なかる可し。

抑、基督の宣教は釋尊が鹿野苑にて阿含を説きてより四十年餘の後に法華を演せし如き長日月に非ず。僅に三年間の宣教なり、此三年間を分ちて六時限と爲す可し。

- 第一 預備の宣教の時。
- 第二 初の猶太の宣教。
- 第三 ガリヤ宣教。
- 第四 北ガリヤ宣教。
- 第五 後の猶太の宣教。
- 第六 最後の一週。

此書には六部と爲して記載せざれども、三年間は前記の如くに宣教せしなりと思ふ可し。基督は曠野より歸り來り、既に前日のナザレの村民イエスに非ず、メサアたる聖位に就きしなりけり。今は私の爲に村落に居る可からず、公に逾越節筵に上りて宣教せむと爲せり。其日に至るまでに數週日ありき。此時に在りしは五人の弟子の従ひし事なり、其名ハアンデレ、ヨハネ、バプテスマのヨハネに非ず、ペテロ、ピリポ、ナタナエルなりき。以上の五人は後に十二使徒と稱せられたる者なり、特にヨハネは福音傳の記者として重むせられ、ペテロは初代の傳道に當り教會の柱石と仰がれし人なり。然れども基督の弟子は殆んど皆な中等以下の社會の人にして教育の無き人なりと云ふ説あり、ペテロの如きは漁

夫なりしとぞ。兎に角にかの迦乗が火教を奉ずる大學者たりし如き法弟はあざりしなり。又カナにて基督が婚筵の席に臨み初て奇跡を行ひしとあり。今日のカナは叢林盡暗き所にして猛獸の咆哮するに任ずる墟趾なれば當時は人烟の簇る大村なりしか、カナオムに近き所なり、恐らくはこの村に基督の親戚のありしならむ。基督は母マリヤと偕に招かれし婚姻の饗應の席に於て水を葡萄酒に化したり、坐客はもとより同席者も之を知らざりしが、基督の命により四五斗入る可き石甕六ツに水を掘み入れし僕のみ其奇跡たることを知りしとぞ。この後より基督が奇跡を行ひしこと多し、奇跡は希臘語にて「テラタ」或は「ドウナマイス」と云ひ不思議或は異能と譯す可し。基督の僧侶等を除き奇跡と云ふ可きもの聖書中に三十五あり。

宣教の事を叙する前に略表を以て示す可し。

八ヶ月	第一 逾越節より猶太に於て宣教	羅馬曆 七百八十年
四ヶ月	ガリヤ宣教	
十二ヶ月	第二 逾越節ガリヤ同前	七百八十一年



六ヶ月	第三逾越節、北ガリラヤ宣教	七百八十二年
二ヶ月	構廬節、猶太の後の宣教	
四ヶ月	修殿節	
最後の週	第四逾越節	七百八十三年

教理の事は其人の信不信に關して容易に其眞偽を判し難しと雖も、基督敎の聖書が歴史的に判斷して他の宗教の經典若くは教祖の傳記よりも精確なるは疑ふ可からざる事實なり、特に歐洲人が精細なる特有の長所は、其本國の史傳地理よりも聖書と猶太地方の事に明らなり、前の略表の如く粗々其歳時に誤謬あしと云ふも可なり。

猶太に於て最初の宣教は略表の如く其時間は凡八ヶ月にて、地方は首府エルサレムと猶太の各地なり。この間に在りし事は第一に神殿を清めし事あり。前にも述べし如く逾越節の饗筵にはエルサレム城の雜間には實に非常の有様なり最も多き時には三百萬人に越すことありとぞ。然れば神殿内の群集は立錐の地なく、従つて商人等が利を占めむと祭祀に必要な物品を販賣し、殿内の異邦人の庭と稱する所は、犠牲の爲に牛、羊、鴿等を賣る

者あり、遠國より來りし者の爲に金を兩換する者ありて殆んど奸商等の族がる所となりぬ。基督は慨然として見るに忍びず、一條の繩を手になし、牛羊を逐ひ、兩替の案を倒し、鴿を賣る者に向ひては此物を取りてゆけ、我が父の家を貿易の家と爲す、勿れと戒しめたり。

元より基督のことあれば切齒扼腕して暴威をふるひしには非ず、堂々たる威風凛々たる容顏、其徳に畏服せしめたるなり、時に一猶太人あり、基督の所業を見て其權を何れの所より得たるやを怪しみ、休徴を見せよと求む、休徴とは「セマイア」と云ふ原語にて奇跡と少しく異にして、救世主たる能力あるとを顯す所に用と。時に基督は外形に見る可き休徴を與へず、汝等若しこの神殿を毀たば三日にして我は之を建てむと答へ、其身を神殿に比して死後三日に復活することを暗示せり。第二には或夜「サンヒドリム」の議員ニコデモに教を説きしことなり、「サンヒドリム」は猶太國最高等の議會にして其員數は七十一人あり、老練にして學殖ある長老等より成りしものなり、「バプテスマ」のヨハネの宣教より人心は動き初めし時なるに基督の聲名はや、エルサレムに聞えしに、正直ある老議員は神の國につきて眞理を聞かむと欲せり。基督はニコデモに教ふるに、左の數言を以てせり。

曰く、人もし新に生ずば神の國を見ること能はし、又曰く、人の水と靈とに由りて生れざれば神の國に入ること能ざる也、肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈に由りて生るゝ者は靈なり、



風は己がまゝに吹く、爾其聲を聞けども何處より來り何處へ往くを知らず、凡て靈に由りて生るゝ者も此の如しと信仰に由りて人は救はるゝなり、外禮には由らざる事を教へたり、基督教を理の大基礎なり。

第三にはサマリヤの一婦人、道を説きしことあり。これより前にエルサレムに於ては、基督の宣教に抵抗者を生ず可き傾向ありて大衝突の生ず可きは疑ひなき色あり、時機未だ熟せずと觀て基督は都を去り地方にゆき、バフテスマのヨハネ未だ世にありきと偕に宣教を勤めたり。其後道路をサマリヤに取りガリラヤに歸らむと爲せり。時正午にありたり弟子は食物を得むと近傍に去り基督のみ獨り井邊に在りし時に、水を汲みに來りし婦人に教へしことは、ニコデモに教へしと同しく大切なる教理なりき。曰く、凡て此水を(井は昔しヤコブの與へしものなりと稱し極て清冽なるものなり)飲む者はまた渴かん、然れども我が與ふる水を飲む者は永遠かはく事なし、又曰く、我を信せよ、唯に此山のみならず、亦エルサレムのみにも非ずして爾曹父を拜す可き時來らむ、眞の拜する者靈と眞を以て父を拜する時來らむ神は靈なれば拜する者も亦靈と眞を以て之を拜す可き也と。抑、サマリヤ人は元來雜種の民にして其宗教こそ猶太人と同じく摩西の律法を奉じ、メサアの降臨を望むと雖も、猶太人よりは非常に厭はれ、別にゲリゼム山に神殿を設けて崇拜せり、

故に基督は此山のみならずエルサレムに非ずと神を拜するは儀式にも處にも人種にも非ざることを教へ、靈と眞を以てす可しと説けり。

基督はサマリヤを過ぎてガリラヤに歸へれり。當時既に、バフテスマのヨハネは獄に投せられぬ、狀勢斯くの如くなれば基督若し猶太に在りしならんには祭司、長老、教法師の爲に如何なる所置を蒙むりしやを知らず。さてガリラヤに於て様々の事あり。第一にはカナにて大臣の子の死に瀕せしをば、爾の子は生るなりと言を以て愈し、第二には故郷ナザレにて説教せし時、反對者の爲に絶壁より投げ落されむと爲し、第三にはペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人が更に召されて偕に宣教に従事せし事、第四にはペテロの岳母の病を醫せし等の事あり、此他惡鬼を逐ひ病者を愈せしこと多しと福音傳に在り。當時既に基督はナザレの郷里に住し難く、此はヨセフの子に非ずやと呟きて基督を木匠の子とあなざりたり、カペナウムに移れり。この市街は當時羅馬の鎮臺のある所にして、ダマスコ等より物貨の輻湊する處なり、故に税關も設けられ人口稠密の一大市なりき。東南に一大湖ありガリラヤの湖水或はゲネサレの湖とも稱し、東西の岸には二千尺より千尺の峰巒蒼翠を滴らし、樹秀で水清く魚類に富みし湖水なり、かのヨハネの毒蛇、猛獸の住する曠野に住し、獨棲して豫言者の天職を勤め、基督は貿易農漁の大市場を巡み種々の人と接



して宣教の大任に従ひ給ひぬ。故に基督はベツレヘムに生れ、ナザレにて生長し、カペナウムに住み、エルサレム城邊に於て十字架に懸りしなり。カペナウムに住せしことは僅の日月なれど、宣教上には必ず記憶す可き處なり。この市を根據の地となし、ガリラヤの諸地を巡遊して宣教せり。この巡遊中にありし事は、基督の命に従ひて網を下せしに不思議に夥多の魚を獲しより、弟子ペテロが基督の神性を發明せし事。癩病の者の愈されし事等あり。この第一次の巡遊をはりてカペナウムに歸るや、聲名益々高く、或時は其家の周圍に群集夥しく、屋蓋を除きて病者を基督の前に絶下し、辛ふじて癒さるゝとを得しことあり、當時稅吏マタイ其職を捨て、弟子となりぬ。この人は十二使徒の一人にて、馬太傳を編集せし者なり。基督は又エルサレムに上り、ベツレヘムの池邊にて跛者を醫し、この日は安息日なりしに、予舊套を墨守する、パリサイ人の怒に觸れ、基督を殺さむと計れり、當時に於て安息日に此事ありしは、其勇其義驚歎す可きなり。パリサイ一派の人々は云ふも、更あり猶太人が安息日を頑守するは、今日の人の推察なし難き所なり、身を刺す所の蚊蚤さへも採りて殺さざりしと云ふ、この陋習に反して、基督は跛者を癒せしなり。亦ガリラヤに歸り道にて安息日に弟子と偕に麥壠を過ぎ、飢に迫りて穂を摘みて食したり、(穂を摘みて食するは律法の許す所なりき。これも安息日の

虚禮を破りしなりき。パリサイの人々とヘロデ黨は結托して基督を害せむと計ること急なり、然れども教を聽く者ますます多く、基督は舟に乗りて道を説き、或は避けて湖畔の村に退きしこともあり。此頃に弟子を选拔し、使徒の號を與へ福音の宣傳を任じたり、其人々は十二人ありき。

ペテロ。アンデレ。ヤコブ。ヨハネ。ピルポ。バルトロマイ。  
トマス。マタイ。ヤコブ。レツパイ。シモン。ユダ。

前のヤコブはゼベダイと云ふ者の子にして、後なるはアルバイの子なり。ユダはイスカリオテのユダと稱し、後に基督を敵手に賣りしものなり。此後に有名なる山上の説教あり、其處はテイボル山ありと云ふ説あり、確證はなし。山上の説教は神學及道徳學に關係すると甚だ大なり、詳細なる事は新約全書馬太傳第五章より第七章までを讀み味ふ可し。茲には其一斑を揚げ置くのみ。

心の貧しき者は福なり、天國は其人の有ければ也、哀む者は福なり、其人は安慰を得べければ也、柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐことを得べければ也、饑渴くことく我を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければ也、矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければ也、心の清き者は福なり、其人は神を見ることを得べければ也、和平を求る者は福なり



り其人は神の子と稱へらる可ければ也。義しきとの爲に責めらるゝ者は福あり天國は即ち其人の有なれば也。我がために人爾等を誦諱りまた迫害偽りて各様の悪言を云はん其時は爾等福なり喜び樂め天に於て爾曹の報賞おほければ也。そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき。

又敵を愛す可しとの教訓には

「惡に敵すること勿れ人汝の右の頬を批ば又ほかの頬をも轉じて向けよ。爾曹の敵を愛しみ爾曹を誚ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ。如此するは天に在す爾曹の父の子とならむ爲なり。夫れ天の父は其日を善き者にも惡しき者にも照し雨を義者にも義しからざる者にも降らせ給へり」

當時の猶太人わけてハ、パリサイ人の理想せし神の國と云へるは恰も稚兒の心を慰むる夜話の如き事なりしかば神の國とは公義聖善の行はるゝ國にして神と人とを愛する所なりと諄々と教へしなり。此後に亦も百夫長の僕を愆し、ナインの嫠婦の子を甦生らせし等の事あり。又ガリラヤを巡遊せり、有司學者の輩は益々基督を憎みたり、基督の家族すら狂氣せしかと疑ひ、之を止めむとて頗る苦心せしとあり。又譬喩を以て教訓せし事多し、譬喩には負債者、武具を着たる勇士、惡鬼、浪子、パリサイ人と、税吏、播種、芥種と、麴酵、藏れ

たる寶珠、網等の教訓あり、浪子の譬喩は法華經にあるものと頗る似たるものにして其理を異にす、この譬喩と播種の譬喩は頗る名高きものなれど事長ければ略す、馬太傳十三章、路加傳十五章を見る可し、當時風波を叱いて静めしとあり、惡鬼が群衆に憑るを許し斷崖に墜ち死しことあり。又カペナウムにて税吏レビ(マタイあり)の饗宴に招かれ飲食を共にせしが爲に、パリサイ或は、バプテスマのヨハネの弟子より批難を受けたり。抑猶太人の風習として異教の人或は他國の人と席を同じふするは身を汚すと思ひたれば殆んど死を以ても共に食せざることを望めり、然るに基督は苛酷に法を弄して税金を集め羅馬より派遣の官吏に媚ふる所の税吏(頗る惡風ありしものなり)又は、パリサイ人が卑しみし人と席を同じふしたるとなれば豈に批難をまぬかるゝとを得んや、又ヨハネの弟子は斷食等の儀式をも重んじ頗る自任するとの高きに基督にして斯る舉動あり、いかで駄す可きや、囂々として其失行を難じたり。されば基督は一語を以て其非を知らしめたり。

曰く

「康強なる者は醫者の助を需す唯病ある者之を需む、夫我が來るは義人を招くために非ず罪ある人を招きて悔改めさせんが爲なり。」

この饗宴の後にヤイロの女を復生せしめし奇跡あり。又ガリラヤを巡遊す、是れを第三



次のガリラヤ宣教と爲す、これより先に再びナザレに歸りて道を説きしが前日の如く、其奇跡異能には驚けども基督を信せざりき。基督は益々宣教を速に爲す可きことを知り、二人の使徒を二人づゝに分ち四方に派出して天國の教を宣べ傳へたり、當時基督の聲名は益々四方に響きわたり、或は魔力を以て奇跡を行ふと云ふ者あり、或は既にヘロデヤの爲に害せられたるヨハネが復活せしなりと云ふ者あり、ヘロデ王は探偵を以て其舉動を窺ひ、人民は推戴して王と爲さむと欲し、パリサイ人は使者を派して基督の失行を求め必ず害せむと欲したり。今は寒村の木匠の子に非ず猶太ガリラヤサマリヤの四方の地より視線はイエスと云へる預言者の身に集まりたり。嗚呼危哉。

基督も蹶踏はヨハネの如く獄舎に投せらる可きなり、機未だ熟せずガリラヤ湖の東岸ベツサイダに退き更にまた進みて曠野の中に入れり、然れども基督の跡を尾して慕ひ來る者は雲霞の如し、此時に麩麥のパン五ツと小魚二ツを以て五千人を飽かしめし事あり、又波を踏むで海上を歩みしとあり、カペナウムに歸りてより説教あり、其説教の爲に基督を厭ひて離れし弟子あり、其大意は、人々基督に、我儕如何なる事を行ば神の工に爲る可き乎と問ひし時、神の遣し、者を信するは即ち其工なりと答へたり。又、我は天より降りしパンなり、又若し人このパンを食はば、窮なく生く可し、我が與ふるパンは我が肉なり世の

生命の爲に我これを賜へん、又、人の子の肉を食はず其血を飲まざれば爾曹に生命なし、或が肉を食ひ我が血を飲む者は永生ありと説きしにぞ、血肉を飲食す可しとの言を聞て我弟子は其真意は基督と一致するに在ることを悟らず、或弟子は真意を解きて益々信を堅くしたり。斯く基督は歩を進めて天職のメサヤたることを明白に爲すに従ひ、反對する者も信仰歸依する者も益々盛むになるに至れり。

### 第四章 北ガリラヤの宣教より猶太の宣教に至る

北ガリラヤに着手せしは、既に宣教に着手せしより後二ヶ年を経たり。エルサレムに於ても物議を生じ、ナザレに於ては厭はれ、今はカペナウムも身を危うくするの恐れある地となりぬ。時未だ來らず一ツは其難を避け一ツは異邦の人に道を傳へ、又弟子等に猶も深く教理を知らしめむが爲にカペナウムを去りしは適當なる事ありしなり。當時基督は己の弑せらる可きことを弟子に告げたれど、弟子は半信半疑の中にあり、己が神の子たることをも叮嚀に教へ死後の準備を爲し、ものゝ如し。此行はフェニシア國のツロ、シドン等の地にゆき、デカポリス、マグダラ、ベツサイダ、カイザリア、ピリビ等諸地を巡り種々の



奇跡あり。特に或地の山上に於て使徒ペテロ、ヨハネ、ヤコブと偕に祈禱を爲し、時に其貌を變じ面は日の如く耀き衣は雪の如く白く光彩の雲中に入りモーセ、とエリヤも現れて語りしとありと云ふ(モーセは紀元前凡千五百年余の人、エリヤは凡九百年前の人なり)。モーセは律法者をエリヤは預言者を代表し、律法も預言も基督を望みし理想を形象に現し、ものど云ふ可し。これより數日前に大使徒ペテロは明白にナザレのイエスは、メシアなることを知り、爾は基督活ける神の子なりと公言せり、時に基督はペテロの信仰を善みし、ヨナの子シモン、爾は福なり、蓋血肉なんぢに示せるに非ず、天に在す吾父なり、我また爾に告ん、爾ハペテロなり、我が教會をこの磐の上に建つ可し、陰府の門ハ之に勝つ可からず、又われ天國の鑰を爾に與へん、爾が地に於て繫ぐことは、天に於ても繫ぎ汝が地に於て釋くことは、天に於ても釋く可し、と云ひしとあり。この數言は天主教徒が重きを其羅馬の教會に、ペテロより相續せし教會なりと云ふ、置く源由にして、基督は天國の鍵をペテロに與へしなり、教會はペテロの上に置く可しと宣給へりと、法皇の權を主張する所なり、新教徒の解する所は、磐とはペテロに非ず、ペテロが明言したる基督は神の子なりと云ふ言の上にありと論ず、天國の鑰も亦たペテロのみに非ず、福音を宣傳する使徒等の上にあるなり。この他にも奇跡異能ありしが別けて注意す可きは、弟子の爭論を爲し、となり、ペ

テロの如きは暫く論せず、他は皆な基督は王侯の如き權威を以て天國を治むるものと信せしゆゑ、十字架の極刑にて死する者とは思はざりき、誰か天國に於て大なる者ぞと争ひたり、基督の謙遜なる可きことを教へむと嬰兒を其中に立て、我まことに爾曹に告ん、若し改まりて嬰兒の若くならずば、天國に入るとを得じと論せり、斯る事を以ても弟子は其師の心を識らず、未だ微々たる信仰を以て従ひしなり、基督の衷心の苦を慰めし者は誰ぞ、唯だ中夜或は幽寂たる樹蔭などにて天父に禱りし時のみならむ、基督を知る者は父の神なりき、基督を慰むる者は天の父なりき。北ガリラヤの宣教をはりて後に亦も猶太の傳教となりぬ。以後殆んど六ヶ月はエルサレムに上り、ペリヤに避け、サマリヤに在りしともあれど、多くはエルサレムにて教を説かれたり。この時期は己のメサヤたることを揚言せずと雖も、堂々と公衆に教しふる言の中に、メサヤたることは露れたり、ナザレ、カペナウム、サマリヤ、猶太の諸地に於て誹謗する者、崇拜する者あり、國中騒然として容易ならざる形勢とはなりぬ。第一のエルサレム行は、構慮節なり、九月廿八日より十月六日にわたる、男子は皆な都へ上る可き規則あり、故に國人は片唾を呑むで名聲噴々たるイエスは此節會に上り來りて如何なる事を爲すかを待ち構へたり。節筵の日も半に達せし頃、果然基督は神殿の中に立ちて教を説けり、衆皆な驚きぬ。いよいよ進んで説けり、曰く、我が教ふる



所は我が教に非ず、我を遣し、者の教なり、又、モーセ爾曹に律法を與へしに非ずや、然れど爾曹の中には之を守る者なし、爾曹何故に我を殺さんと謀るやと凜然として演説せり。當時、パリサイの人々は基督を殺さむと計り居る事は衆の知る所なれば、先づ其勇氣のあつたことを驚きたり。人民は説教を聞き、イエスは望む所の「メサア」たらむとや、半信半疑の有様となりぬ。官吏は治安の妨害を恐れ、祭司等は神を瀆す者なり、又己等の非行を彈せらるゝに堪えず、下吏を遣はして捕へむと爲し、が未だ果さず、基督は敢て臆することなく更に説きて曰く、人もし渴かば我に來りて飲め、我を信する者は聖書に録し、如く其腹より活る水川の如くに流れ出づ可しと大聲に呼ばりたり、下吏はこの威風に壓せられ、其説に感化し手を空しくして廳に歸り、未だ斯の人の如く云ひし人あらずと復命せり。事終に「サンヒドリン」の議に上り人を戒す者なりとの説あり、ニコデモ一人は糺して後に罪を定む可しと拒めり。

この節筵はをはりたれども、基督はエルサレムを離れず、夜は橄欖山にゆき朝は夙くより神殿よりゆき周圍に群集する者に教を説けり、基督はますく憚ることなく、我は世の光なり、又、我れ獨あるに非ず、我を遣はし、父と同一にあればなり、又、誠に實に爾曹に告ん、我は「アブラハム」の有ざりし先より在者なりと宣言せり。さなきだに殺さむと思ふ者もある時

あれば、我が國祖とも仰ぐ「アブラハム」より先に在り、世の光なりと云ふに至りては、神を瀆す者なり、狂人なり、惡鬼に憑れたる者なりと罵りて石を以て撃たむと爲す、之を避けて都を去れり。情勢既に日一日と迫り來りぬ。既に天の一方には一點の雲ありて遂には電雷驟雨を起し來らむと爲すもの、如し。基督は時期の逼るを知り、七十人の弟子を諸方へ派遣して道を弘めたり。基督は再びエルサレムに上り、堂々譎々と教を説き、パリサイ人の偽善を責め、祈禱の眞理を教へ、其他様々の教訓あり、特に時俗の弊を戒め、パリサイ人を戒しむるに少しも假借せず、修殿節十二月の半頃にあたり、ソロモンの廊を歩みし時に猶太人等は其四邊を圍み、キリストならば明に告げよと求めたり、即ち「メサア」なるや否やを問ふなり、基督は之に對しては明言せざりしと雖も、我と父とは一ツなりと教へしにぞ、衆を怒を發し石を以て撃たむと爲す、實に基督たるも難ひかな、自ら基督なりと云へば猶太人が理想せし「メサア」は斯る寒素の人に非ず、帝王の尊位に居りて神愛の能力を有し、四海を掌握する者にて大猶太國を設立し世を仙境樂國の如くに爲す者と信じたればなり、基督にあらざる時は其説く所は盡く神を瀆すの言語なり、到底猶太人は來る可き「メサア」即基督を形而下的に觀念し形而上の道義より達し得べき國土とは思ひざりしなり。機逼ると雖も未だ熟せず、乱を避けて「ヨルダン」河の彼岸「ペリア」の地にゆきたり。ペリヤ



に於ても著名なる説教あり奇跡あり特に失なひたる羊、失なひたる金、失なひたる子不義なる撰會者の譬諭あり。この時エルサレムを距る一里に近き處にベタニヤと稱する村あり、村にラザロと稱する者ありて常より基督を信すること厚かりしが今や病に罹りて旦夕に逼まれり、其姉妹マルタ、マリヤは使を馳せてペリアの基督に報せり、當時の形勢は基督がエルサレムに近きベタニヤに往く可き時に非ず、既にサンヒドリムにも議決ありて「パリサイ」一派の者は機を窺ひて渠を縛せむと欲するなり、人民には又「メサア」と信する者多く、政教の當局に在るものは人民が何時に暴動するやも計り難く戰栗して基督の動靜を窺ふものゝ如し。然れど時は熟せり、其友を愛するの心は深し、四日の後にベタニヤにゆき、ラザロの死せしことを知りしが、其親戚と猶太人の見る所にて墓に葬られたる墓は洞穴の如き構造あり、ラザロを呼びて復活せしめたり。奇跡異能多しと雖も葬穴より死者を復活せしむるよりも大なることはあらじ、其風評のエルサレムに傳播するや滿城の人民は基督を信すること益々盛むなり、然れど此行も亦たベタニヤより退きエフライム村、エルサムレムより九里に留まりたり。此時に當りてエルサレムに於ては祭司、有司、學者等は會議を開きイエスの處置を計りぬ、事既に茲に及び等閑に爲し置かむには人民の「メサア」と信する基督を戴きて、羅馬政府に對し反旗を擧げむことは疑ひなし、一朝反

旗を擧げむには羅馬の爲に此國の滅亡せむこと疑ひなし、又渠等にはイエスを「メサア」と信し難く、且イエスと稱する者は人民の首領となりて猶太の獨立を全ふする人には非ず、徒らに國民の亡滅を招くのみにて終らむと殆んぞ其處置に苦しみたり。時に祭司長カヤパ動議を發して曰く、爾等何をも知らず、又民の爲に一人死て舉國亡びざるは我儕の益たることをも思はざる也と、衆議員皆な同じて基督を捕へて殺さむと決定せり。其歳も風説の中に終り翌年の逾越節となりぬ。人民は諸方よりエルサレムに集り、神殿内に來りて互に云けるは、如何に意ふや、彼は節筵に來ざる乎と耳語けり、祭司長よりは令を出してイエスの所在を知る者あらば速に告ぐ可しと、基督は如何に其身を所せしや。渠はエフライム村を出立しヨルダン河を渡りエリコの津を経て群衆と偕に上り來りぬ。しかも此行には奇跡あり説教あり、パリサイ人と税吏の譬諭、童子を説諭せし事等あり、此路次にも税吏ザアカイの家に行きし事ありき。

### 第五章 最終の一週日より昇天に至る

この最終の週間は過ぎし三年の日月よりも基督教に於て重要な事のみなれど、詳細には茲に述べ難し、又其時日に就きては四福音傳を和合する論者中には多少の相違する點



もありと雖も、先づ普通の説に従ひて述べむ。左の順序を記憶す可し。

金曜日 ベタニヤに着せり。

土曜日 ベタニヤに在り、晩飯を食する事あり。

日曜日 エルサレム城に入る。

月曜日 無花果樹を呪ひ再び神殿の商人を逐ふ事あり。

火曜日 「パリサイ」「サドカイ」の人々と論ずる事あり。

水曜日 使徒猶太の反逆あり。

木曜日 逾越節の食を爲す。

金曜日 審問並十字架の處刑をうく。

土曜日 墓中に在り。

日曜日 復活す。

基督は金曜日にベタニヤのシモン(癩病人の家なりと傳ふ)の家に着し、土曜日即ち猶太人の安息日を送り、其夕に會食あり、其席にてマリヤと稱する一女子基督の慈愛に感じ、ナルダと云ふ高價の香膏を携へ來りて、師の足に塗り、己が頭髮を以て其足を拭びたり、其席には復活せしラザロも陪し、其姉妹マルタもあり、マリヤはマルタの妹あり。此夜エルサレ

ムより來りてイエスとラザロを見むと欲せし人は家の内外に集りたりと知る可し。日曜日の朝となるや基督は群衆と偕に一里には近しと云ふ都へ上りぬ、人民は「メサア」と信せしことなれば、ベタニヤより従がふ者ありエルサレムより來り迎ふる者恰も織るに似たり、基督は驢馬に乗りて恭敬の中に威儀を存じ、歡迎する所の男女老少は聲を揚げて「タビテの裔、ホザナ」よ主の名に託て來る者は福なり、至上處に「ホザナ」と祝したり。「ホザナ」の意は救はせ給へ我儕は祈ると云ふに同じ、今日の人が萬歳を叫ぶに同じ場合と思ふ可し。一大行列は大路を練りゆき左右の衆民は櫻欄の枝を伐りて路上に布くあり、己の衣を脱ぎて道に布くあり、祭司も有司も啞然として施す可き術なかりしなり。基督は神殿に入り日暮に至りて又ベタニヤに歸れり、此日基督ハエルサレムを橄欖山上より望み慟哭せしことあり曰く、

「噫エルサレムよエルサレムよ豫言者を殺し爾に遣はさるゝ者を石にて撃つ者よ母鶏の雛を翼の下に集る如く我爾の赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然と爾曹は好ざりき視よ爾曹の家は荒地となりて遺されん」

と。此時基督の眼下にある光景は如何ん、神殿はヘロデが四十年餘を費して造營せしものなれば光彩燦爛として旭日に映じ、十万の莖は晴空に畫くが如く其他宮殿、長廊、城塞の



壯麗なる少しも亡國の姿はなし。然りと雖も此は俗眼の外形を見る所にして基督の如き智眼は遠く百年の後を觀破し涕淚袖を濡はして殆んど斷腸の感に堪えざりしなり。されば或弟子は基督に神殿の構造を觀せんと爲し、時に基督は此處に一ツの石も石の上には埋されずしては遣らじと云ひし事もありしなり。其神殿はと問へば六千方尺の建坪に四方皆な石壁を以て圍み四十尺の高き大理石の柱を列らねし大建築なりき。基督は又人民の崇敬をも意と爲さず、反つて其人々の爲に亦た慟哭せり、此の人民終に亡國の民となる可ければなり。次の月曜日の味爽神殿に往くの途次無花果樹を咀ひて忽ちに枯れしことあり、葉のみ鬱蒼と茂りたれど樹果なかりしかば偽善に似たりと咀ひしなり。復た後に神殿の不潔汚穢を清ふせむと、奸商猾奴を追ひ市場の如き殿内を改めしことあり、其時基督は叱咤して曰く、我が家は祈禱の家と稱へらる可しと録さる、然るに爾曹は之を盜賊の巢となせりと屢に殿内の商人を追ひし時よりも嚴然として斥けたり。此日は事なくして常の如くに奇跡を爲し給ひぬ。次の火曜日には神殿内に在りて終日教を説き、パリサイの人々と辨論すること烈しく、基督が破邪顯正としも云ひつ可き論議は此日の後はなかりしなり、宣ある哉日月火の三日は恰も權威ある者の如くに神殿を清め人民に教へ殆んどメサアと仰がれたれば反對黨の苦心焦慮は名狀す可からざるものありし

なり。使者を遣りて先づ問ふに何の權威ありて此等の事を行ふかを以てし、基督もし己は神たることを公言せんには、神を瀆す者ありと叫び羅馬政府派遣の吏の手を待たず、人民を激せしめて石を以て撃ち殺さむと計りしなり、基督は其意を知りて其偽計に欺かれず、百方手を盡せども爲す可き道なし、基督は尙も諄々と教を説きて二人の子の譬喩、惡農夫の譬喩、國王の子の婚姻の譬喩もあり、皆な國民の罪を譴責したるものなりき。「パリサイ」と「サドカイ」と兩派の人も常には反目疾視すれども基督と云ふ大敵の爲に終に同心一致して辯論せしかども、説破せられて「サドカイ」の人々は味方の「パリサイ」人に笑はれしともありき。特に驚く可きは教法師某が問に「師よ律法の中何れの誠か大なる」と云ふことありしに、基督は言下に明亮なる答を與へたり。曰く「爾心を盡し精神を盡し意を盡し主たる爾の神を愛す可し、これ第一にして大なる誠なり。第二も亦已れに同じ己の如く爾の隣を愛す可し、凡の律法と豫言者は此二ツの誠に因れり。」

又基督は「パリサイ」と學者の輩が實行一致せざることを辨倒して餘す所なし、偽善的の祈禱、貪欲を逞しふして、癡婦の家を呑む、東西に奔走して人を己の宗旨に入る、この八ヶ條の罪を鳴らし、一條毎に禍たる哉の言を冠らしめたり。英氣颯として犯し難かりしなり。



其夜は橄欖山に在りて四人の弟子に教ふるとあり。此時に未來の豫言あり、基督再降の教あり。世界大審別の事に就きて教ふる所ありき。翌水曜日には最早「パリサイ」人の難問もなしと雖も、渠等は決する所を實行せむと欲するのみとなりぬ、即ち唯だ基督を捕へむとの一途のみなるが人民の亂を恐れ、逾越の節筵の後に靜に縛せむと思へり、時に弟子「イスカリオテ」のユダは其師基督を賣らむと祭司の許に來りて計る所あり、ユダは銀三十枚を賞として後に受くるの約を爲せり。人心の頼み難きは古今同一轍なりと雖も、弟子として其師を敵手に賣らむとするは、實に虎狼の心と云ふ可し、聖書に「サタン」がユダの心に入るとあるも、虚妄に非ざるなり。次日は木曜なり、基督は此の兩日は人を避け、閑寂の處に居りて神と交通し、祈禱に心を專に爲し、なり。此夜例に由りて、逾越の饗筵の晩饗を守れり、この晩饗には丸焼の羔と除酵のパン、或種の苦き菜を食し、葡萄酒を飲むなり、この晩饗の式は後に教會の大禮に關する事なれば、其式の順序を擧げむ、なほ總論の條下を參看す可し。(この晩饗はモーセ以來の古式なれど、多少の變換ありしなり、必ず人民一般、逾越の饗筵には守りしなり)

第一 父或は其席の長たる者盃を取り祝謝して飲む、祝謝の盃と稱す。

第三 苦き野菜を携へ來る、前の父又は席の長たる者取りて食し、他の子女は其理由を

問ふ。(舊約全書出埃及記を見る可し)

第三 羔と汁と除酵パンを出だす、又祝謝す。

第四 其家の長子は父に向ひて饗筵の趣意を問ふ、父は懇ろに祖先がエジプトの苦役を語り國史を演ず。

第五 神に感謝して詩篇百十三並百十四を唱ふ。

第六 再び盃をわけて順次に廻す。

第七 パンを擘き祝謝して羔を食す。

第八 再三盃をわけて順次に廻す。

第九 百十五篇並百十八篇の詩を唱ふ。

第十 四度或五度の盃をわけるとあり。

第十一 第二百二十又百二十七篇の詩を唱ひて饗筵をはる。

以上を當時の猶太人の慣例と爲す。

基督は或人の家にて此の饗筵に坐せしが、其初に自ら盥に水を入れて弟子の足を洗ひたり。(足を洗ふは奴僕の役なりき)この洗足は弟子に謙遜ならむとを教へ、又日々足の塵を洗ふが如く、其心を清めむとを訓へしなり。この席にて己は敵の手に賣らるゝとを弟子



に語れり、未だユダは其禍心の端をもあらばすことなければ弟子は互に惑ひ愛ひしことあり。當時ペテロは頗る熱信にして其信仰を公言し師の一身に如何なることあらむとも、我は爾を離るゝ事なしと斷言せり。

基督ハ饗筵の席に於てパンを劈きて祝謝し、取りて食へこれは我が身なり、また杯を取り謝して、爾曹みな此杯より飲めこれ新約の我が血にして罪を赦さむとて衆くの人の爲に流す所のものなりと云ひて、偕に饗筵を守り、後世の聖晩餐式を設立せり。(教理の條下に論ずるが如し)この晩餐をばりて基督は弟子に長き教訓を爲せり事ハ新約全書約翰傳十、四章以下十七章に至る、聖の最も聖なるものと稱する章なり、十四章の冒頭には、爾曹心に愛ふることを勿れ神を信じ亦われを信す可し、又十七章の末には、爾の神をさす我を愛する愛かれらに(弟子等)在、また我かれらに在ん爲なり等の語あり、この教訓をばりて後詩篇を吟じて行けり。即木曜日の夜なり、猶太の風習によれば既に金曜日に入りしなり。吟せし歌は百十五或は百十八篇の詩なる可しと傳ふ。百十五篇の詩は

「エホバよ榮光を我れ等に歸する勿れ、我等に歸する勿れ、爾の怜恤と汝の眞理との故によりて、たい御名にのみ歸し給へ、(中略)爾等は天地をつくり給へるエホバに恵まるゝ者なり云々と、

をりしも満月に當れる夜なれば、樹間の霜をふみて、唐紅のキドロ河をわたり、神殿より犠牲の血の流れ落つる所なり、橄欖山の麓のゲッセマネと稱する所に入りぬ。(園と稱すれど樹木の茂れる處なり)林中に入りて祈禱せり、聖書に由れば血の汗の滴りしとあり、實に基督が十字架の痛苦を受けひと心を決し、心裏に相ひ争さふ試惑に勝ちし時なり、當時の人民の形勢なれば基督にして世の力を用ひひと欲せむには奇跡の力を施さず天使の加護なしとて、其命を全ふするのみならず或は國郡をも手に唾して得られつ可き時なり、然れど基督は曠野の試惑の時の如くに盡く皆な斥けたりき。故に此時の祈禱は生命を決する一大時期なり、教義より見れば十字架の上に罪の挽回の犠牲となり萬民の罪を負ひしなりけり。此時も従ひしはペテロ、ヤコブ、ヨハネの三弟子なりき。斯く基督は樹蔭に熱禱する時に、かのイスカリオテのユダは祭司のもとにゆき基督の所在を告げ、一隊の兵士どもに節筵のありし處にゆきしに、既に在らず、然れどユダは基督が常に人を避けて祈禱を爲し又は靜に弟子と共に語る處を知れり。月夜なれども松火を振りてらし兵器を携へて林中に進み來れり。基督は事の既に迫るを見て從容として自ら敵を迎へたり。ユダは進みて、ラビ、夫子の意安さかと云ひて接吻す、衆皆な基督は渠なりと知りて近づき來り、ナザレのイエスはと問ひしに基督が、我は其れなりと答ふるを聞き地に仆



ふれし者あり、ペテロ等は劔をふるひて戦はむと爲し、が禁じて争はしめず終に曳れて行き給ひぬ。時にマルコスなる者ペテロに耳を削られしことあり。其夜直ちに審問の席は開かれぬ。第一にアンナの家に曳れたり(現任にはあらずと雖も正當の祭司長の權ありしなり)されど直に祭司長カヤバの審問となり其教義或は弟子の事を問ひしに、其答は公衆の前に於て説きしことなれば、また云ふ可き事なし、聽る者に問ふ可しとの答なりき。第二にサンヒドリュムの公廳に移されたり。時にペテロは潜に其師に従ひて門内に入りしが、奴婢に疑がはれイエスを知らずと答へ、爲に痛悔して己の弱きを知りしとありき。公廳の審問は深夜と翌日の朝なり、種々の問答もありしが祭司長カヤバが爾キリスト神の子なるかとの間に應じて、基督は爾が云へる如しと云ひしかば、他は論せず神を褻瀆すと云へる罪に定められ、死罪に當れりと決しぬ、茲に於て面に唾し拳にて撃てり、然れど死刑を執行す可き權はサンヒドリュムにあり、羅馬より派遣の方伯プロキユレートルボントオ、ピラトの許にわたせり。

時は金曜日朝となり、基督は方伯の手にわたたり、今や猶太人が訴狀により國安を害する者として、サンヒドリュムの判決は神を褻瀆す者なりしが刑せられむと爲すに近く、又弟子ユダは昨夜よりの形勢を見て深く悔ゆる心を發し、賞與の銀をなげうち、自ら神殿の門前

にて縊死せり、滿城の士民は恟々として恰も風雨の天邊より襲ひかゝるが如し。ピラトは基督を糾問するに罪の見る可きなし。然れど祭司及パリサイ人等は更に告訴して曰く、イエスは羅馬政府に貢を納む可からずと教へたり、自ら王と號して人民を動搖せしめたりと。然れども基督が方伯の間に應じて辨する所は頗る明白にして猶太人が訴ふる所は誣告にあることを知れり。時に基督の言中、眞理について證と爲んため也すべて眞理に屬く者は我が聲を聴くと云ふことあり、ピラトは其時に眞理とは如何なる者ぞと問ひしまゝにて其答をまたず、我は此人に罪あるを見ずと判決せり、ピラトは基督をば宗教の熱心家と考へ決して危険なる政治家にはあらずと定めたり、方伯は斯く判決せしと雖も祭司長老等は服せず亦もや教唆謀叛罪を以て訴へたり、ピラトは基督がガリラヤ人なるを知りガリラヤを管するヘロデ王が京城に在りしを喜び、ヘロデにわたせり、王は兼てよりイエスの風説を聞きしかば奇として自ら様々なる問を發したれども、黙して答へず、ヘロデは部下の者に嘲弄せしめてピラトに遣へせり。史の傳ふる所に由ればピラトは元來輕薄の酷吏なるが如しと雖も、さすがに基督を刑することは爲すに忍びず、手を盡して祭司等の怒をなだめ輕罪に所せむと爲し、が事終に行なはれず、祭司長老等は益々人民を煽動し、ピラトが恒例に由り罪人を許すことあれば、故殺謀殺の罪人バラバと



云へる者を曳き出し、バラバを釋さむかイエスを釋す可きかと問ひしに、人民は叫びてバラバを釋す可しと云ひ、イエスを十字架につけよと絶叫せり。方伯ピラトは元より道を執るに大節のある人に非ず、必竟祭司、長老等の歡心を得て猶太國民を治めむと欲するの外なれば、祭司等の請求に應じて基督を鞭ちて十字架に釘することを許せり、此時兵卒等は荆冠を戴かせ、絳色の袍を着せ、手に芦を持たせ、亦も侮辱嘲弄いたらざる所なく、十字架を負せて刑場ゴルゴタに曳き、終に釘うちて木に懸けたり。左右には盜賊二人懸けられたりとあり。木に懸けられしは午前九時頃なりき。其場の景狀は如何に非慘苛酷の事のみなりしぞ、基督に藥酒を與へむと爲し、が斥どけて飲まず、後に渴して酢を飲みたり、上にかけて罪標に、希伯來、希臘、羅甸の三國語を以て、猶太人の王ナザレのイエス也と記載せり。兵卒等の基督の衣を褫ぎ、裏衣は縫ひ目なければとて圖して取らむが爲に博奕を爲せり。此時十字架上より、父よ、彼等を許し給へ、其の爲す所を知らざるが故なりと敵を愛する祈禱あり、又賊の一人が悔悟して、イエスよ、爾國に來らむ時我を懷ひ給へと云ひし時に、基督は今日汝我と共に、バラダイス、樂園の義に在らんと教へたり。又師のあとを慕ひ來りし使徒ヨハネと母のマリヤを見て、マリヤには、婦よ、此なんぢの子なりとヨハネを子とし、視よと勸め、ヨハネには、此なんぢの母なりとマリヤを母と見よと教へて母を

托したり。然れども亦た無情無智の群衆或は祭司長老等は十字架を仰ぶぎ視て嘲けりつ、今十字架より下る可し、然らば我等汝を信せんと云へり。時は十二時に達せり、天地忽ちに暗くして黒闇境と變じぬ、この黒闇裡より叫ばれたるは基督が最後の言なり、曰く「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」譯すれば我が神我が神何ぞ我を遺て給ふやとの事あり。終に大聲に「事竟りぬ」と一號呼ありて氣絶えたり。傍に在りし百夫長も其他の者も目撃する事に驚き、皆な胸を打ちて誠にこの人は義人なりと云ひしとぞ。同時に神殿の帳二に裂けしと云ふ。翌日の土曜日は聖日なれば基督の屍はピラトの許を受け、アリマタヤのヨセフと議員ニコデモの二人が架上より下して近傍の園中にあるヨセフの所有權ある新葬穴におきたり。(假りに没藥、蘆苔の藥種を屍と衣服の間に挿みて裹みたり)これより先きに兵卒は基督の脊を刺し、血と水と流れ出でたりとあり。因に云く基督の死は心臟の破裂より起りしなり、故に血は體中に在りて水分と分離し、血は心胞絡の中に流れ入りしが故に血と水の流れ出でしなりとの説あり。當時の十字架の刑は鎗を以て刺すには非ず、手足に釘うちて眠すものゆゑ二三日間は十字架上に於て生命を保つ者すらあるなり、然るに基督は僅に三時間にして絶息せしゆゑ心臟の破裂と云ふも理なきに非ず。嗚呼、弟子は散亂し、崇拜者の



聲もせず、此夜はエルサレム城頭に無情の月のみ皓々として中天に浮へ、わたり、いかり。土曜日は聖日なれば事なし、日曜日の曉天に大なる地震あり、基督を葬むりし墓の戸石を轉ばしたり、之より先に聖日にも關せず、祭司等は方伯ピラトに請ひ、イエスは生前に復活するとの説あり、弟子等來りて其屍を盗み復活せりと云は、前よりも恐る可き事變を生せむと兵卒を乞ひて墓門を守り、門の石に堅く封印を爲せしなり。

マグダラのマリヤ等の婦人は基督の屍をば更に叮嚀に埋葬せむと香料、香膏を携へ墓に來りて見れば、墓門の石は轉びてあり、マリヤは驚きてペテロ、ヨハネの弟子に告げむと惶惶として歸り去り、他の婦人等は墓門のほとりに立ちしが、やがて入りて見れば、天使の如き者二人あり、其婦人等に告げて曰く、恐るゝ勿れ、イエスは既に復活せり、豫て云ひしが如く、ガリラヤにて會はんと約束せしとを記憶す可し、早く往きて弟子に告げよと、この婦人等は驚きて城中に歸れり、報知を得てペテロもヨハネも馳せ來り復活せし跡を見て驚きて亦家に歸りぬ。マリヤは獨り墓門のあたりに涙に咽びてありしが、墓の中を俯して視しに、天使あり問ふて曰く、汝何ぞ哭くやと、マリヤは未だ復活せしことを知らず、何者が師の屍を携へ去れりやと答ふ。時にまた園丁のごとき者あり、何ぞ哭くやと問ふ、反顧して見れば、正しくイエスなりき、驚喜して、ラボニ、夫子の意と叫べり、マリヤは城中に歸りて基

督の復活を衆人に傳へたり。又祭司等は兵卒に金錢を與へて何者か夜盜めりと云ひ觸らしめたりと云ふ説あり。

後に二人の弟子あり、エマオに往く道にて基督を見たり。又十人の弟子に顯れ、刺されたる手足を示し、食物を求めて食し、弟子に教ふる可きことあり、命じて、ペンテコステの節會、逾越の後五十日まではエルサレムに留まる可しと云へり。以上は復活の日曜日なり。復活後の第一の日曜日に亦も弟子の居る中に現れ、トマスと稱する弟子が復活を疑ひしゆゑ、釘の跡に指をさし、トマスも我が主よ、我が神よと云ひて信するに至れり、前後ともに戸を閉ぢし室内へ忽然として現れ來りしなりと云ふ。此後に弟子に現はれし事二度あり、一ツはガリラヤの湖にて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、トマス、マタイ外に二人の弟子が漁獵を爲しつゝありし時に、基督は海岸に形をあらはし、弟子と共に食し、かつ命じて網を船の右にうたしめ、魚獲舟に滿ちしとあり、一ツはガリラヤの或山にて、五百餘の弟子に現れて救へし事あり、此間四十日なり。最終にベタニヤに近き橄欖山上にて、弟子等に現れ、萬國に福音を宣べ傳ふ可き事を命じ、雲につままれて天に昇りぬ。以上は基督一代の概畧なり、詳細なることを知らむと欲せむには、須らく新約全書四福音傳を讀む可きなり。



### 第六章 教 義

佛教には經律論の三義あり、其三義も唐宋明の三時代に由りて多少の増減あり、釋尊一代五十餘年所説の法門分れて八萬四千あり、或は顯密大小乘など、深妙の教義ありと雖も、基督教には斯る差別のあるとなし、宗派の條下に記載するが如く三大派の分れ又は新教派の下に幾多の分派ありと雖も、佛教に似たる多岐のものには非ず、其經典も一卷の聖書即舊新兩約書なり。其首卷にある創世記より最尾の黙示録に至れるまでの時代は凡千五百年間の長さ日月に記載せられたるなり。又書中には史傳、詩、豫言、諺、書翰等あり。然れど其部類は僅に舊約全書に於て三十九と新約全書に於て廿七あり。其一篇を分ちて多きは百五十章、少なきは一章あるのみ。卷名は左の如し。

- 創世記。出埃及記。利未記。民數記。申命記。約書亞記。士師記。路得記。
  - 撒母耳前書。撒母耳後書。列王記略上。列王記略下。歷代志略上。歷代志略下。
  - 以士喇書。尼希米亞書。以士帖記。約百記。詩篇。箴言。傳道之書。雅歌。
  - 以賽亞書。耶利米亞記。同哀歌。以西結書。但以理書。何西阿書。約耳書。
  - 亞麼士書。阿巴底亞書。約拿書。米迦書。拿翁書。哈巴谷書。西番雅書。
  - 哈基書。撒加利亞書。馬拉基書。
- (以上舊約全書)

- 馬太傳福音書。馬可傳福音書。路加傳福音書。約翰傳福音書。使徒行傳。
  - 達羅馬人書。達哥林多人前書。達哥林多人後書。達加拉太人書。達以弗所人書。
  - 達腓立比人書。達哥羅西人書。達帖撒羅尼迦人前書。達帖撒羅尼迦人後書。
  - 達提摩太前書。達提摩太後書。達提多書。達腓利門書。達希伯來人書。雅各書。
  - 彼得前書。彼得後書。約翰第一書。約翰第二書。約翰第三書。猶太書。
  - 約翰默示録。
- (以上新約全書)

以上の諸卷より成りし書を舊新約全書となす。舊約全書は基督降生前の書にして、新約全書は昇天以後なり。舊約の記者には經世愛國の士あり、王侯あり、豫言者あり、新約の記者は基督の弟子にして、村民、漁夫、或は醫の如き人のみなり。舊約は希伯來語を以て書し、新約は希臘語を以てす。

この舊新兩約書は神の黙示に由りて記載せられたるものと信するなり。元より三千年にも溯り得べき古書ゆゑ種々の考證的批評はありと雖も、敢て正統派の人は動かさず、殆んど學科に照すも誤謬なしと信じて疑はざる者あり。聖書は神の存在、本質、天地萬物の創造、保守、人の罪惡、義務、拯救、祈禱。



を教へて明白なれば、他の教を要する事なしと云ふ。何故に神の示現たるかと問ふ者あれば、此書中の教訓又は道徳は他の聖賢が教ふる所よりも勝れ、此書の力に由りて史上に幾多の善事を爲し、者あり、基督は種々の奇跡を以て神の愛子たることを示し、且復活て大奇跡を以て救世主たることを現し給へり、又千五百年間幾多の筆者(凡三十人)あれども、主義一貫し豫言相應して少しも矛盾の痕なきは天啓默示の書あるが故なりと云ふなり。昔時は舊約全書の希臘語譯と羅句譯の聖書のみなりしが今は殆んど全世界の語に譯せられたり。此書に記載せられたる教理を組織して基督教の神學はなりしあり。宗派の條下に述ぶる如く數回の宗教會議ありて教理を論斷し、又天主教、希臘教、新教の三派にて見る所を異にする事はありと雖も、大意には違へる事なし、細目枝葉にわたれる解釋のごときは神學書或は教會歴史に就きて見る可し。

### 神

神は靈なり、其性は眞善美を具足し、全智全能にて永遠不變の者なり。且能力ありて智慧、良心、自知あり、其性十分には知り得べからずと雖も、人の心靈にあて、推測らば稍や近かる可し。次に神は靈なり、天地の萬物の如き物質に非ず、物質にあらざれば偶像を造りて

之を拜す可からず。又其眞善美は和合して完全無缺なり、其量も其時も無量無限にて永遠なり不易なり。神は斯くの如き者なれば獨一無二なり、純全の者二ツはあらずと論斷す、故に神は數あるものならずと他の宗教の神を排斥するなり。眞の生活する神と云へる事は獨一の眞神に對して他を僞神と爲すより起りし言なり。之を舊約書には耶和華の神と稱す。

### 三位一體

三位一體(トリニチー)と云ふ譯語は適當ならずと云ふ説あれど、譯語の當否は茲に論じ難し。父と子と聖靈なり。この三は其性も其徳も其能も盡く皆な同一にして惟一の神なり。父と云ふは前に説明せし獨一の神にして神より萬物は生命と存在とを受け、且慈愛深ければ父の神と稱するなり。子とは耶蘇基督なり、基督を聖書又は神の愛子又は獅子と云へり、父子の關係に同じければ子とは名づけしなり、然りながら關係より子と稱するのみならず、聖書に由れば道とも神の榮の輝とも神の質の形なりともあり、其性は全く神に同じ。約翰傳第一章に「太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神なり」とあれば、其尊貴なること推して知る可し。基督は神なれば之に跪きて禮拜祈禱すると知る可し。聖



靈も神なり、子の如く形質を取りしことあらざれど、能力も智慧もありて自知する者なり、天地の創造、奇蹟の妙、基督の降誕、僧侶等は聖靈の動作なり、信者の爲には師となり力となり、新たに生るゝもこの聖靈の力なり、故に信者をば聖靈の宮殿みやと稱す。以上父子、聖靈の教理は大切なる事にしてこの三一の信仰なきものは正統の信者と認めざるなり。これを三「ペルソナ」と稱す。(ペルソナとは羅句語にして身の義なり又基督とは「油塗りし者」と云へる義にして「メッサヤ」と同じく救世主の意あり。

### 預定

預定とは神が己の旨に遵ひて、其榮光を顯さむが爲に、世の始より前に萬事を預じめ定め給ひしと云ふ事なり。天命と同じくして頗る異なる所あり。天命は必然の意なれども、神の預定は冷々たる必然説には非ず、天地萬物の經營の意匠は斯くあれど定むると雖も、人に自由の意思を與へて、好むで神意に適ふことを爲す者が信者となり、又己の意思を肆にして神意に逆ふことを爲す者が不信者となるなり。故に創世記にある七日間の天地萬物の創造も、基督が世に降りて十字架に釘せられて殺されしも、其生涯の德行善教も皆な預定の中にとありと知る可し。詳細なることは茲に説きがたし頗る難解の題目なり。

### 罪惡

罪惡の起原は創世記に書されたる善惡を識るの樹の果を亞當アダムと夏娃エバが食したるより起りしなり。樹果を食したるが人類の罪惡の始なりと云ふは頗る穩當ならざる事の如くあれども、かのエデンの國中に夫婦を置かせ給ひし時に、神は其樹果を食す可からずと禁じ給ひしにも拘はらず、其戒を犯して樹果を食せしが罪の始なり。其時までには清かりし人間の始祖も墜落し次第に諸惡を犯すに至りしは全く肉體の欲、眼目の慾、勢より起る驕傲より生せしなり、これを原罪と稱す。人は祖先の原罪により生れながらにして神の怒の子となり、世は罪惡の厭ふ可き所とはなりしなり、人は皆なこの亞當の末なれば遺傳によりて其性質を受け祖先の罰を受くるなり。「義人なし一人も有なし」といふ本文にあり。世に艱難あるは全く罪の罰にて惡念、凶殺、姦淫等の諸罪の爲なり。人に死と云ふことのあるも原罪より起れり、若し亞當等の罪を犯すことあるば人には死もあらざりしならむか。罪あり死あり、次に死後の永苦はある可きなり、之を地獄の苦と云ふなり。人の靈魂は現世にのみ有にあらず、來世に生存すれば墜獄の苦はありと知る可し。地獄と稱すれど、かの六道の如き理に非ず、永遠に不滅の火中に苦痛を受くるなり。



### 拯救

原罪ありて世に艱難あり、死ありて永苦あり、拯救を求むるは必然の道理なり。艱難あり、救はむ、又生命を興へむ、先づ其源なる罪を除かずばならず、神は亞當の罪を犯せし時より一の約束を立て給ひぬ。これを恩恵の約束と稱す。故いかひとなれば罪を犯せし者は罰を受けざるを得ず、これ世の公義なり、この義あるに救はせ給ふがゆゑに之を恩恵とは云ふなり。この恩恵の約束も其初は分明ならざりしが、基督の十字架に釘うたるに至りて全く明らかになりしなり、之を新約と云ふ。即ち守れば永生を受け、背く時は死の罰を受けむと云へる舊約の律法に對せし言なり。舊約全書には摩西の律法あり、其律法を守らば義人なれど到底人間には守ること能はず、この律法に由りて罪は愈々分明になりしなり、罪には必ず罰あれば其罰より救はむには其罪を贖はずむばならず、茲に及びて贖主を要す、人類の罪を贖はむには同じ罪惡に汚れし人の爲し能ふ可き所にわらず、故に神は預てより一個の人を撰みたり、即神と人との兩性を具へしと云ふ所の耶蘇基督、メサヤなり。基督が贖主として世に来ることを豫言せしは創世紀の昔時より以色列、猶太の建國の後にも豫言者に由りて教へられぬ。或は婦の裔、或は亞伯拉罕の裔、或は大關の裔

など、あるは皆な基督をさし、豫言なり。ナザレの耶蘇は此の基督たる徴あり、加ふるに復活して天へ昇りたれば、耶蘇こそ基督なりと信じたるなり。(基督は名に非ず尊稱なり、使徒行傳には、此外別に救あることなし、蓋天下の人の中に我儕の依頼みて救はる可き他の名を賜はらざればなりなど、もあり。前にも論ずる如く、人類の罪を贖ふには凡俗の人にては贖ひ難し、故に處女マリヤの胎に寄りしは全く聖靈の能力に由るなり、基督は人性を執ると雖も全然缺なき者なりと云ふ。ナザレの耶蘇が神の子たること、基督たることは舊新約全書にあらはれたる豫言、奇跡、異能、品性、感化等に由りて知ることを得べしと説けり。扱基督の職はと問へば、豫言者、祭司、王の三なり、豫言者と云へるは偏に未來の事を宣ふるのみには非ず、神靈の感化を蒙りて道を説き教を宣ふる者なれば、豫言者と稱する中には政治家も、法律家も、詩人も、文人もあるなり、特に神の道を説き其真理を示す者を知る可し。祭司は神殿に奉仕して犠牲を献げ朝夕の祈禱を爲し、神と人との間に立ちて和順を求むる者なり、即中保なりき。王とは元より心靈界の意なれど、恰も國君が其臣民を信仰して平和幸福を得さしむるが如く、天地萬物の王にして且教會の王なり。釋尊に於ても摩哈麥に於ても教祖たる者は皆な心靈界の王なりと云ふことは珍しからず。基督以上の三職を父の神より受け、豫言者となりて福音を傳へ、祭司となりて人類の爲



に祈禱するのみならず、其身を潔き犠牲と爲して神に献げしなり。王となりては萬世にわたり萬國民を治め世を天國の幸福なる様に爲しつゝあるなり。基督は神の愛子なりと云へるに却て此世の卑賤なる家に生れ、人の爲す可き律法を守り、世の罪惡を身に負ひ、人に代りて罪の爲に十字架に懸けられ、三日の間は葬むられて死の權下に居り、復活して今は父の右に坐し、末日に此世を審判せむが爲に臨るなり。かく基督は人類の罪を贖ひ

拯救の道を立て、新約を全ふするなり。

斯くの如く拯救の方は立てられたり。如何にして此の拯救を受く可きやと問へば、信仰なくば此拯救は受け難し、されど人は皆な信仰のなき者にして生來徳義を好まず、光明の邊に出づることは嫌ふ者なり。故に神は聖靈を施して人に信仰の心を起さしめ、基督に依りて救拯を得させ給ふなり。故に人は聖靈の召を拒まず、從順に召に従へば、己の力に由らずして神の賜を受け、己の罪あることを知り、患難あることを悟り、基督を知り、神を愛し、己の私欲を棄て、此世にては聖善に進むことを得て神の子とせられ、來世にては暫く墓中に休むと雖も時來れば基督と偕に甦生り、神の寶座の前に在りて晝夜神に事へ飢へず渴かず目に涙なく、神を讚美し、天使又は聖者と交はり、無窮の生命に入るなり。かく甦生せざる前も信者が死する時は其靈魂は神の榮光の中に入るなりとぞ。斯く高貴なる身と

なるも全く己が力に非ず、神は聖靈を以て罪惡の厭ふ可きを知らしめ、信仰の心を起さしめ、基督に由らしめ、恩恵に由りて罪の赦を蒙り、聖靈より聖善の事を教へられて徳に進み、神の像に肖るに至るも一切父の神の御恩恵なり、あまつさへ罪ある身なるに代償の基督を世に下して恩寵に由りて義人と同様に爲され、不完全千萬なる我輩をも御子の基督を視ると一様と見あされ、死すれば神の榮の中に入り、後には甦生して天國の世嗣となる、一より十まで恩恵の賜なれば、この救を全ふし父の神、子の神、聖靈の神の御心を悦ばせ奉らむと爲し、神の榮を顯さむと一向に心を専に爲すが信者の目的なり、人てふ者の職分なりを教ふるなり。

因に曰く猶太人が犠牲の禮を重むすることは一ト方ならず、利未紀に由れば、エホバはモーセに命じて曰く

「汝等の中の人もし家畜の禮物をエホバに供んとせば牛或は羊を取りて其禮物となす可しもし牛の燔祭を以て其禮物になさんとせば全き牡牛を供ふ可し即集會の幕屋の門にて之をエホバの前に其の受納たまふやうに供ふ可し彼その燔祭とする者の首に手を按く可し然ば受納られて彼の爲に贖罪とならむ」

とあり、牛、羊、鴿を以て犠牲と爲し、之を宮に献ずれば祭司は嚴肅なる儀式を以て之を宰り



火上に置きて焼きしなり。エルサレムの神殿の成りし後は、ソロモン王の前は天幕なりき。莊嚴を極めし殿内に於て祭司は犠牲の馨香を薫らしなり。この犠牲の祭式は形を以て基督の贖罪を示し、ものなりとぞ。以色列人が嚴正なる性情にて、律法の義に遵ひて罪われば必ず罰を受けざるを得ず、然らざれば贖の一途あるのみと、斯る道義上の觀念より實に十字架の贖罪の教へ生ぜしなり、古今に幾多の人種あり、幾何の歴史ありと雖も未だ曾て以色列人(後の猶太人)に似たる嚴正にして罪過を惡み、道義を重むするの民はあらざるなり。哲學、美術は希臘人に譲り、政治、法律は羅馬人に遜るとも、宗教道義の點に至りては以上の諸國民は以色列人には遠く及ぶ所にあらざりしなり。以て贖罪と犠牲、犠牲と拯救、拯救と基督の關係を味ふ可きなり。以上に通ふる如くなれば、信者は聖靈の導に従かび、聖靈を汚さず悲しまさせず、徳に進む可きなりと教しふるなり。

次には基督教の道徳の基礎となれる十戒を説く可し。この十戒は凡三千二百年餘の往古にアラビヤのシナイ山に於て神よりモーセが授けられ石碑に彫りしものなり。(出埃及記第二十章)

第一誠 爾我が面の前に我の外何物をも神とす可からず。

第二誠 爾自己の爲めに偶像をも彫む可からず又上は天にある者、下は地にある者、並に地の下の水中に在る者の何の形像をも造る勿れ、これを拜む可からず、又事ふべからず、我れ耶和華爾の神は妬む神なれば、我を惡む者にむかひては父の罪を子に報ひて三四代に及ぼし、我を愛し我誠命を守る者には恩恵を施して千代に至るなり。

第三誠 爾の神耶和華の名を濫に口にわぐべからず、耶和華は己の名を濫に口にわぐる者を罪せではおかざる可し。

第四誠 安息日を憶ひて之を聖潔くす可し、六日の間働きて凡て爾の一切の業を爲す可し、七日は爾の神耶和華の安息なれば、爾諸業を爲すこと勿れ、并に爾の子女僕婢、畜及び門内に在る他國人も亦然り、蓋耶和華六日の間天と地と海と其中に在る萬物を造りて第七日に休みたればなり、故に耶和華安息日を説ひて之を聖日となせり。

第五誠 爾の父と母とを敬へ、爾の神耶和華の爾に賜ひたる地の上に於て爾の命長からむが爲なり。

第六誠 爾殺すこと勿れ。

第七誠 爾姦淫すること勿れ。

第八誠 爾偷竊こと勿れ。



第九誠 爾の隣に偽の證據を立ること勿れ。  
 第十誠 爾隣人の家を食べること勿れ隣人の妻と其奴婢牛驢又總て隣人の物を食ること勿れ。

以上の十誠は分ちて二となす可し。第一誠より第四誠に至るまでを神に對するの務と爲し、第五誠より第十誠に至るまでを人に對するの務と爲す可し。第一誠によりて基督教徒が他の宗教の神佛を拜せざることを知る可し、第二誠によりて偶像を斥くこと及び神は眞義を熱愛し、惡を憎むことの強を知る可し。第三誠によりて神に對することは更なり、宗教上の諸般の事にわたり嚴正なることを知る可し。第四誠により安息日を必ず守る可き事を教ふ。今の安息日は日曜なれど昔は土曜なり、日曜は基督の復活せし日なれば使徒時代より主の日と稱して守りしが終に改めて主の日を安息日と爲せり、寛嚴はありと雖も安息日に會堂に集りて祈禱を爲し説教を聴き、此日は平常の業を休むに至りては諸派皆な同一なり、第五誠孝道を教ふ、汝の生命云々は孝行を爲して神の榮を顯せば福壽を享くるなりとの神の約束なり。第六誠は自他を論せず生命を害す可からずとの教なり。勿論鳥獸昆虫魚類に至るまで、無益の殺生を禁するなり。第七誠は男女間の不倫を戒めたるなり、一夫一婦の如き或は蓄妾、娼妓を嚴禁する事は尤も斯教の特色なり。

第八誠は説明を要せず、第九誠は互の眞實を守る可きことを教し、個人間にて眞實を嚴守することは基督教國の美風と云ふ可し。第十誠は貪慾を戒めしなり。以上の十誠を一括する時は實に左の訓戒に歸するなり。曰く  
 「爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛す可し。  
 己の如く爾の隣を愛す可し。」

この二誠は耶蘇基督がパリサイの教法師に答へたる教訓なり。抑、信望愛の三は基督教の大綱領なり、特に愛は基督の反覆叮嚀に教へられたる道なり。新約全書中の重なる所を次に記載するゆゑ、一讀なれば大要を解す可し。  
 「愛する者よ我儕互に相愛す可し、愛は神より出づればなり、凡そ愛ある者は神に由て生れ且神を知るなり。」(約翰第一書四章七節)

「主は我儕の爲に生を損て給へり、是に由りて愛と云ふ事を知りたり、我儕また兄弟の爲に生命を捐つ可し。」(約翰第一書三章十六節)

「小子よ我儕愛するに言と舌とを以て相愛することなく行と實とを以てす可し。」(同十

八節) 「假令われ諸の人の言及び天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響く鉄の如し、假令



われ豫言するの能あり又すべての奥義と諸の學術に達し又山を移すはどなる諸の信仰ありと雖も若し愛なくば數ふるに足ぬものなり假令われ我すべての所有を施し又焚るゝ爲に我が身を予るとも若し愛なくば我に益あし愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり愛の妬まず誇らず非禮を行はず己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を言はず不義を喜ばず眞理を喜び凡事包容およそ事信じ凡事望み凡事忍ぶなり。(下略) (哥林多前書十

三章)

所詮基督教神學及道德は基督の一身に在りて存す神學には幾多の議論あり道德にも評論ありと雖も基督の一代は神學及道德論より上に發然たるものあり。基督教を知らむと欲せば一部の舊新約全書を読むと基督の一代を知るにあるのみ基督教は耶蘇基督にあり。

愛は既に述しが如し、信は如何。望は如何。信仰は基督教の最も強く勸むる所なり、人の罪惡より救はるゝは基督を信するに在るのみ。故に其信仰を勸むるや、

「夫信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とする者也。」(希伯來書第十一章)

「爾曹恩に由て救を得是信仰に由てなり、己に由に非ず、神の賜物なり、行に由るに非ず。」

(以弗所書第二章)

「我まことに爾曹に告ん、もし芥種の如き信あらば此山に此處より彼處に移れど命ども必ず移らん又なんぢに能ざること無る可し。」(馬太傳十八章)

聖書の本文は此くの如し、信仰は救靈を取るの手なり、恩恵を受くるの腕なり。徳義の法則を守り自力を頼むも救靈は得がたし、宗教上の禮式を完く守るも救靈は得がたし、身命を抛つも財産を棄つるも救靈は得がたし、徒らに聖書を読み神に祈禱し安息日を守り、洗禮を受くるも、晚餐式を守るも救靈は得がたし、百般の事を爲すも救靈は得がたし、救靈を得るの道は一ツあるのみ、曰く耶蘇基督を神の子と信じ、これに頼るの信仰あるのみなり。又望は靈魂の錨なりとも教へし所あり。

聖書中にある聖賢も、教會史に赫々たる名ある殉教者、監督、牧師等も信じて以色列の建國を望み、基督の降生を望み、天國を望み、死生苦樂の爲に信仰を動かさず堅く望の磐石に立ちて信仰の實例を示し、者多し。

さりながら人若し己の罪を認めざる中は信望愛も贖罪も救靈も實に空名のみ、悔改なくば信仰もなし、信仰あくば救靈もあらず、信じて悔いざるは眞正の信仰に非ず、悔いて信せざれば眞正の悔改に非ず、悔改は基督教門に入るの鍵なり。

基督教道德を知らむと欲する者は先づ馬太傳五章以下山上の教訓を一讀す可きなり。



一二をあぐれば  
「爾曹の敵を愛み爾曹を誣ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ。又曰く、

天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全す可し。」

基督は二ツの禮典を教へたり、一は洗禮なり、一は晩餐禮なり。英語にては「サクラメント」羅句語にては「サクラメンチウム」と云ふ、羅馬の兵士の誓約の義より來りし語なり。猶太の繁冗なる禮式より一轉して僅に二大禮の簡なるに至りしは實に基督の遺訓なり。洗禮は人の知る如く水を以て行ふ禮式なり、天主教も新教も常に水滴を首にそゝぐと雖も、希臘教は浸禮を用ふ、洗ふと云ひ浸すと云ひ經典上に分明なる遺訓なしと雖も、其解釋に由りて終に浸禮教會と稱する一派を生せり、さばれ式の如何に係はらず、基督の命令にも爾曹往て萬國の民に洗禮を施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよとあり、又悔改めて罪の赦を得んが爲に耶穌基督の名に託て洗禮を受けよともあれば洗禮は罪を悔改して基督の弟子となる可き聖禮なり。洗禮に三義あり、一は洗滌の意にして罪過を清淨になすなり。二は父と子と聖靈の名に入るゝと稱へ神との交通を得らることを示す。三は基督に従ふと云ふとを外面に表白し、忠義を以て神命を守ることを顯すあり。

又聖晩餐禮は基督が十字架に懸る前に、我を憶よと云ひて晩餐の麴包を擘きて十二弟子に與へ、葡萄酒の盃をとりて亦た十二弟子に與へしことは傳記の條下に詳細なり。晩餐式の麴包と葡萄酒に就きては天主教と新教とは見解を異にせり。さりながら左の三項は聖晩餐の本義と知る可し。第一は基督の死せし記念の爲なり、即麴包を擘くは基督が肉身を擘きしを表し、葡萄酒は流せし血を表し、化體説は兎も角も記念と基督に一致すると云ふ二點は何派も異論のなき所なり。第二は晩餐を守る者は基督の恩恵を受くると云ふとあり。之も前に全しく異論なし。第三は晩餐を守る時に麴包と葡萄酒は基督の血肉を代表すると信じ、己を反省し謹直嚴正の心を以て守る可き事なり。正統派と稱する教會には守らざる派なし。洗禮を受けて教會員に列し、晩餐禮を守りて信徳に進む、之を尋常の信者と爲すなり。以上の大切なる事項の外に基督教信者の特に重しとなすは祈禱なり。之も宗派に由り特に祈禱文を作るあり作らざるありと雖も凡そ左の三項は祈禱の精神なり。

第一神意に合ふことを願ふ、恰も子女が父母の意にかなふやうに求むる如く祈禱するなり。第二己の罪過を懺悔し、神の恩恵を祈るなり。第三己の受けし、神の恩寵を感謝するなり。惣て基督教徒の祈禱は、基督の名に頼りて祈るなり、名に依ると云へるは基督を信



仰し基督の慈愛にすがりて天父に悃願するの意義なり。基督も終夜祈禱り或は味爽に祈禱の爲に聖殿へ詣で、或は血の汗のしたる程に祈禱せし事、實例多し。祈禱を懇ろに勤められし事も聖書に屢次あり。其他預言者、使徒、師父、殉教者等の祈禱に熱心なることは驚歎するのみなり。故に基督は

「凡そ我名に託て父に求むる所の者、父之を爾曹に授け給ふ可し、爾曹今まで我名に託て求めたるとなし、求めよ、然ば受けん而して爾曹の喜満べし」と教へ、(約翰傳十六章)使徒保羅は「何事をも思ひ煩ふ勿れ、唯毎事に祈禱をし、懇求をし、且感謝して己が求むる所を神に告よ」と訓しへたり。恐らく祈禱を重むすることは宗教の各宗中に於て、基督教の右に出づる者は少なかる可し。基督が弟子に教へたる祈禱の模範あり、之に由りて推考なせば基督教の祈禱の精神を明白に爲すことを得べし。曰く

「天に在す我儕の父よ、(神人の關係を示す)

願くは爾名を尊崇させ給へ、(神の榮光を顯さむと欲す)

爾國を臨らせ給へ、(神國となることを求むるなり)

爾旨の天に成ごとく、地にも成せ給へ、(神の旨を守られむと欲す)

我儕の日用の糧を今日も與へ給へ、(必需品を求むるなり)

我儕に罪を犯す者を我儕が免す如く、我儕の罪をも免し給へ、(我も他の罪を赦すが故に、我が罪をも免し給へと求むるなり)

我儕を試探に遇せず、惡より救ひ出し給へ、(己の荏弱を知り神の助を求むるなり)

國と權と榮は爾の窮なく有たまふ所なり、アーメン。(榮光を神に歸するなり、アーメンは誠に眞實にと云ふが如し)

これを主の祈禱と稱す。簡にして能く祈禱の模範を盡くせしものなり。

この他に預言の詳説、天國、地獄、天使、惡魔、大審判、基督の再降等は重大の事なりと雖も、今茲には特に解説せず、篇中推して知る可し。

### 第七章 教派

#### 天主教

基督教は紀元千〇五十一年に東西に分れたるを天主教(羅馬)希臘教とコンスタンチノーブル稱す。分離以前は一ツの基督教あるのみ。

抑基督教は概論にも述べしが如く、他の佛教の各宗に於ける、其宗乘を異にし、釋尊一代の法門を分つに大なる相違あるが如くならず、若し佛教の事を以て比較する時には一宗に



舊新の兩義あり或は諸派あるに似たれど天主教希臘教は論するまでもなく頗る反對の地位に立てる新教すらも共に舊新兩約の一卷の聖書と父子の神を信じ、聖靈を信じ、十字架の贖罪基督の復活を信するに至りては違へることなし。「キリスト」と云ひ「ハリスト」と稱するもナザレのイエスの教を信する所の教徒なり。然れども甲派の乙派に對し、乙派の丙派に對する感情は全然外教の人に對するが如し。近世は漸次に和らぎ一堂に會して教を談するが如きことありと雖も異論者はありしにもせよシカゴ博覽會の時に開きし萬國宗教會の如きとあり、往時は分争の爲に宗教の體面を汚がせしが如きことなきに非ず。此點に於ては基督教會史上の尤も恥づ可き所にして比較的佛教各宗の相争ふことの少なきに遜色ありと云ふ可し。

天主教とは東洋に於て稱する所の名なり。正しくは羅馬聖公會ローマカソリックと云ふ可し。基督の死後は十二使徒の傳道の世となり、道の羅馬帝國に傳播するや、三百年間に教會は處々に設立せり。されど未だ後世は統一的教會政治に似たるものなく監督も長老も牧師も傳道師も其名稱はありと雖ども階級的に嚴重なる者に非ず、星移り物替り基督教が羅馬帝國に盛むなるに及び、三世紀の頃監督の勢力や、増加し來り、特に大監督パトリアル大都會の監督なりきは地方に在る教會を監督せしが、漸次に權威を有し終に全國の諸教會を支配するに至

れり。茲に及びて羅馬は當時の首府なると、使徒パウロ、ペテロ等に関係深き教會なれば世の尊敬も一ト方ならず、この羅馬に在る大監督は後に法皇パピスと稱せらるゝに至りしあり。然れども希臘教、新教の條下に記載する如く、この兩教派は法皇を天主教徒の推尊するが如き者と認めず、畢竟羅馬の大監督より借して法皇の位號を稱する者と爲すなり。然りと雖も天主教會が法皇の權を認め羅馬の教會を以て神聖あるものと爲すは決して近世の所説ならず、既に第二世紀の頃より羅馬の教會は使徒ペテロの後嗣にして該教會を支配する權ありと唱へしことは分明なる事實なり。元より東方の地にはアンテオケ、アレキサンドル、エルサレム等に監督ありて羅馬の教會よりも力ある人多かりしが、西方にては唯一の大教會は羅馬あればペテロの後嗣云々といへる説も行なはれしなり、終に監督レオ一世レオ大五世紀の人の時に及び基督はペテロと云ふ岩の上に教會を建て給ひし故に、其のペテロの後嗣は全國の諸教會を支配する所の權ありと唱へ出だせり、新約全書馬太傳十六章十八節に爾はペテロなり我が教會をこの磐の上に建つ可しと云ふとあり、さなきに羅馬は帝國最古の首都あり、一時は東方の諸教會をも監督するの勢威ありき。後にコンスタンチン大帝が都を東に遷し、ジヨスチアン帝が勢力の益々振ふに至りて、さすがに羅馬教會の大監督も勢威を屈し頗る從屬の勢ありしかば、かの蠻族が伊太利に亂入す